兵庫県文化財調査報告　第202冊

神戸市

神戸西バイパス関係

埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

表山遺跡
池ノ内群集墳

平成12年3月

兵庫県教育委員会

神　戸　市

神戸西バイパス関係

埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

表　山　遺　跡
池ノ内群集墳

平成12年３月

兵庫県教育委員会

遺跡遠景（明石海峡をのぞむ）

遺跡遠景（南上空から）

遺跡遠景（東から）

遺跡近景（南から）

環壕の規模と埋没状況

焼失住居（竪穴住居２）掘削状況

段状特殊遺構土器検出状況

段状特殊遺構出土土器

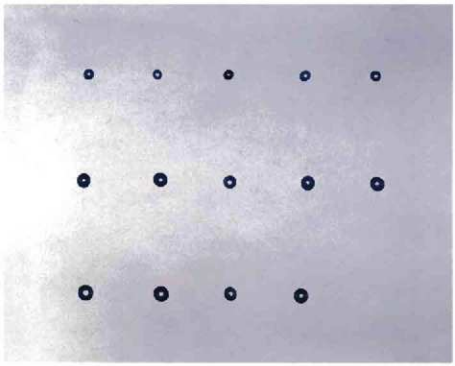
赤彩文土器①（1～4）
赤彩文土器②（5）

環壕内鏑状遺構付近と鏡出土状況

環壕内出土鏡

遺跡調査前（西から）

道路完成後（西から）



池ノ内２号墳棺内出土ガラス小玉

例　言

1．本書は、兵庫県神戸市西伊川谷町上脇字表山に所在する表山遺跡及び池ノ内群集墳の埋蔵文化財調査報告書である。

2．発掘調査及び整理作業については、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

3．全面調査は、株式会社間組と作業委託を交わして実施した。

4．全面調査にあったて、調査担当者の経験不足の面を多くの方々から御援助頂いた。深井明比古氏には実務以外に、対外的な諸々の調整に御尽力頂いた。また、高瀬一嘉・中村弘・藤田淳各氏には多忙な中、断面剥ぎ取り、炭化材処理等の御援助を頂いた。

5．整理作業は、平成10・11年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

6．本書に使用した方位は国土座標Ⅴ系を基準にし、水準は東京湾平均海水準（TP）を使用した。また、各遺構図面で使用している方位は座標北を指す。

7．本書に使用した遺跡分布図等の地図については、国土地理院発行２万５千分の１地形図「前開」・「明石」・「二見」・「神戸南部」図幅を使用した。

8．本文挿図１は、建設省近畿地方建設局作成の図を使用した。

9．本書の執筆は、調査担当者らで分担したが、石器については高木芳史が担当した。編集は、八木和子・尾鷲都美子の補助を得て、表山遺跡を深江英憲が、池ノ内群集墳を服部寛が主に担当し、共同で行った。なお、各執筆担当は本文目次に記した。

10．本書の調査成果は、既に現地説明会資料、「平成８年度年報」等で公表している。本報告では若干内容を異にする部分もあるが、本書が現時点における最新の担当者の見解と理解されたい。

11．整理作業にあたって、佐賀大学の和佐野喜久生・大塚昌揚両氏には、出土した炭化米における自然科学的分析を実施して頂き、本報告書に御寄稿頂いた。記して謝意を表します。

12．金属器の保存処理は、加古千恵子の指導により、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において行った。また、出土小形仿製鏡の処理については、神戸市教育委員会千種浩氏の多大なる御協力があった。記して謝意を表します。

13．遺物番号は表山遺跡、池ノ内群集墳の順にふり、本文・実測図・写真に共通して用いた。また、土器の断面は、弥生土器・土師器を白抜き、須恵器を黒ベタとして区別した。

14．土器以外の遺物の呼称については、金属器Ｆ・石器Ｓ・玉類Ｊのアルファベットを頭文字として付している。

15．発掘調査で出土した遺物の他、図面・写真類は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管・管理している。

目　次

第1章　調査の経緯
第1節　調査に至る経緯 …… (深江英憲) 1
第2節　発掘調査の経過 …… (深江) 2
1．確認調査の概要
2．全面調査
第3節　整理の経過 …… (深江) 5
1．平成10年度の整理作業
2．平成11年度の整理作業

第2章　遺跡の環境
第1節　地理的環境 …… (深江) 6
第2節　歴史的環境 …… (深江) 7
第3章　夾山遺跡の調査
第1節　遺跡の概要 …… (深江) 11
第2節　遺構 …… (深江) 11
1．遺構の概要
2．環壕
3．溝状遺構
4．段状特殊遺構
5．竪穴住居
6．段状遺構
土坑
溝

第4章　出土遺物
第1節　土器 …… (深江) 26
第2節　石器 …… (高木芳史) 44
第3節　金属器 …… (深江) 46
第5章　池ノ内群集墳の調査
第1節　位置と環境 …… (服部　寛) 48
第2節　調査の概要 …… (服部) 48
第3節　池ノ内1号墳 …… (服部) 50
1．立地および墳丘

2．埋葬施設
3．出土遺物
4．小結
第4節　池ノ内2号墳 …… （服部）　50
1．立地および墳丘
2．埋葬施設
3．遺物の出土状況
4．出土遺物
5．小結
第5節　池ノ内3号墳 …… （服部）　53
1．立地および墳丘
2．埋葬施設
3．遺物の出土状況
4．出土遺物
5．小結
第6節　池ノ内4号墳 …… （服部）　56
1．立地および墳丘
2．小結
第7節　その他の遺構 …… （服部）　57
1．ＳＴ1
2．ＳＴ2
3．小結
第8節　池ノ内5号墳 …… （服部）　58
1．立地および墳丘
2．出土遺物
3．小結

第6章　自然科学分析
第1節　表山遺跡の炭化米粒特性と稲作起源 …… （和佐野喜久生・大塚豊揚・澤江）　62

第7章　まとめ
第1節　表山遺跡の位置づけ …… （澤江）　70
第2節　明石川流域の古墳時代の遺跡 …… （服部）　80

巻頭図版目次

巻頭1　上：遺跡遠景（明石海峡をのぞむ）
　　下：遺跡遠景（南上空から）
巻頭2　上：遺跡遠景（東から）
　　下：遺跡遠景（南から）
巻頭3　上：環壕の規模と掘没状況
　　下：竪失住居（竪穴住居2）掘削状況
巻頭4　上：段状特殊遺構土器検出状況
　　下：段状特殊遺構出土土器
巻頭5　赤彩文土器①（1～4）
　　赤彩文土器②（5）
巻頭6　上：環壕内橋状遺構付近と鏡出土状況
　　下：環壕内出土鏡
巻頭7　上：遺跡調査前（西から）
　　下：道路完成後（西から）
巻頭8　池ノ内2号墳槨内出土ガラス小玉

挿図目次

第1図　神戸西バイパス路線図と表山遺跡の位置 …… 1
第2図　トレンチの位置及び周辺の地形 …… 3
第3図　整理作業風景 …… 5
第4図　表山遺跡の位置と明石川流域の弥生遺跡 …… 9
第5図　谷部落ち込み出土土器 …… 25
第6図　石器の長さと幅 …… 44
第7図　表山遺跡出土の鉄器 …… 46
第8図　環壕出土小形仿製鏡 …… 47
第9図　周辺の古墳時代の主要な遺跡　S＝1/25,000 …… 49
第10図　表山遺跡の位置と兵庫県周辺の地形図 …… 62
第11図　表山の粒長頻度分布図 …… 63
第12図　北部九州及び韓国の比較遺跡の炭化米粒長・幅平均値の分布図 …… 64
第13図　表山及び比較遺跡の炭化米粒長・幅平均値の分布図 …… 64
第14図　表山遺跡の炭化米 …… 69
第15図　環壕区画内段状特殊遺構出土土器 …… 72
第16図　環壕内出土土器 …… 74
第17図　環壕区画外出土土器 …… 74
第18図　環壕推定復元図S＝1/7,500 …… 77
第19図　明石川流域の主要遺跡（古墳時代）S＝1/25,000 …… 82

表目次

表1　明石川流域の主要な弥生時代の遺跡一覧 …… 10
表2　出土石器一覧表 …… 45
表3　池ノ内群集墳調査一覧表 …… 60
表4　池ノ内群集墳出土土器観察表 …… 60

表5　池ノ内2号墳棺内ガラス小玉一覧表 ……61
表6　表山及び比較遺跡の炭化米粒特性の平均値及び標準偏差 ……66
表7　表山及び比較遺跡の炭化米粒厚の頻度分布・平均値・標準偏差 ……66
表8　表山及び比較遺跡の炭化米粒長／幅比の頻度分布・平均値・標準偏差 ……66
表9　表山及び比較遺跡の炭化米粒の粒型分布表 ……67
表10　明石川流域の主要な古墳時代の遺跡一覧表 ……83
表11　明石川流域の古墳時代の遺跡盛衰表 ……84

図版目次

図版1　遺構配置図
図版2　環壕遺構配置図
図版3　環壕畦1・3・4・5
図版4　環壕内慣状遺構・環壕畦2
図版5　段状特殊遺構
図版6　竪穴住居1
図版7　竪穴住居2
図版8　竪穴住居3・4・5
図版9　竪穴住居6・7
図版10　段状遺構1・2・3・4・5
図版11　段状遺構6
図版12　段状遺構7・8・9・10
図版13　段状遺構11・12・13・14・15
図版14　段状遺構16・17・18・19・20・21・22
図版15　段状遺構23・24・25
図版16　段状遺構26･27, 土坑1, 溝状遺構1･2
図版17　環壕出土土器①
図版18　環壕出土土器②（最下層）
図版19　環壕出土土器③
図版20　環壕出土土器④
図版21　段状特殊遺構出土土器①
図版22　段状特殊遺構出土土器②
図版23　段状特殊遺構出土土器③
図版24　段状特殊遺構出土土器④
図版25　竪穴住居出土土器①
図版26　段状遺構出土土器①
図版27　段状遺構出土土器②
図版28　段状遺構出土土器③
図版29　段状遺構出土土器④
図版30　その他の遺構・谷部落ち込み出土土器
図版31　包含層・表採出土土器
図版32　出土石器①
図版33　出土石器②
図版34　出土石器③
図版35　出土石器④
図版36　出土石器⑤
図版37　池ノ内群集墳位置図
図版38　1号墳墳丘測量図（調査前）
図版39　1号墳墳丘測量図（調査後）
図版40　2・3号墳墳丘測量図（調査前）
図版41　2・3号墳墳丘測量図（調査後）
図版42　1号墳埋葬施設実測図
図版43　2号墳測量図および遺物出土状況図
図版44　2号墳埋葬施設実測図
図版45　3号墳測量図および遺物出土状況図
図版46　3号墳周溝埋土断面および墳丘盛土断面図
図版47　3号墳埋葬施設実測図
図版48　4号墳測量図および断面図
図版49　ＳＴ1実測図
図版50　ＳＴ2実測図
図版51　2号墳出土土器およびガラス玉
図版52　2号墳棺内出土金属器
　　3号墳埋葬施設・墳頂出土土器
図版53　3号墳周溝出土土器
図版54　3号墳周溝出土土器および石製品
図版55　ＳＴ1出土土器
　　5号墳表採の土器

写 真 図 版 目 次

図版1　上：遺跡全景（南西上空から）　下：遺跡全景（西上空から）
図版2　遺跡北部（垂直写真）
図版3　遺跡中央部（垂直写真）
図版4　遺跡南部（垂直写真）
図版5　上：環壕完掘状況（南東から）　下：環壕断面①（西から）
中：環壕東側（南西から）
図版6　上：環壕西側（南から）　下：環壕断面②（北西から）
中：環壕断面②（南東から）
図版7　上：環壕断面④（南から）　下：環壕内橋状遺構付近断面（東から）
中：環壕内橋状遺構付近（南東から）
図版8　上：環壕内橋状遺構（南から）　下：鏡出土状況
中：鏡出土状況
図版9　上：段状特殊遺構土器検出状況（南から）　左下：段状特殊遺構掘削状況②（東から）
中：段状特殊遺構掘削状況①（東から）　右下：段状特殊遺構上層土器
図版10　上：段状特殊遺構土器出土状況（南から）　左下：段状特殊遺構柱穴断面（東から）
中：段状特殊遺構完掘状況（南から）　右下：炭化材アップ（東から）
図版11　上：竪穴住居1完掘状況（北西から）　左下：竪穴住居1遺物出土状況（北西から）
中：竪穴住居1完掘状況（南東から）　右下：竪穴住居1遺物出土状況（北東から）
図版12　上：竪穴住居2炭化材検出状況（南東から）　左下：竪穴住居2遺物出土状況（東から）
中：竪穴住居2完掘状況（南東から）　右下：竪穴住居2遺物出土状況（東から）
図版13　上：竪穴住居3（西から）　下：竪穴住居5炭化材検出状況（東から）
中：竪穴住居5検出状況（南から）
図版14　上：竪穴住居5完掘状況（南から）　下：竪穴住居5完掘状況（南から）
中：竪穴住居5断面（西から）
図版15　上：竪穴住居6（南から）　下：竪穴住居7（南から）
中：竪穴住居7断面（南西から）
図版16　上：調査区南部遺構群（南西から）　下：調査区中央部遺構群（南西から）
中：調査区中央部遺構群（南から）
図版17　上：調査区中央部～南部遺構群（北西から）　下：調査区中央部遺構群（北東から）
中：調査区中央部遺構群（東から）
図版18　上：段状遺構4（北から）　下：段状遺構9（北西から）
中：段状遺構6（北西から）
図版19　上：段状遺構10（西から）　下：段状遺構15（西から）
中：段状遺構12（南西から）

図版20　上：段状遺構23（北西から）
　　中：段状遺構24（北西から）
　　下：段状遺構27（南東から）
図版21　上：土坑1出土状況（西から）
　　中：谷部包含層内土器出土状況（南西から）
　　下：谷部包含層内土器出土状況（北西から）
図版22　調査中の風景：現地説明会風景
　　：（上）環壕土層剥ぎ取り風景・（左）電気探査実施風景
図版23　環壕横状遺構土坑内出土土器
　　環壕上層・中層出土土器
図版24　環壕最下層出土土器①
図版25　環壕最下層出土土器②
図版26　環壕出土土器一括
図版27　段状特殊遺構出土土器①
図版28　段状特殊遺構出土土器②
図版29　段状特殊遺構出土土器③
図版30　段状特殊遺構出土土器④
図版31　段状特殊遺構出土土器⑤
図版32　段状特殊遺構出土土器⑥
図版33　段状特殊遺構出土土器⑦
図版34　竪穴住居1・2・5出土土器
図版35　段状遺構出土土器①
図版36　段状遺構出土土器②
図版37　段状遺構出土土器③
　　その他の遺構
図版38　谷部落ち込み等出土土器
図版39　包含層出土土器
　　表採出土土器
図版40　環壕横状遺構土坑内出土土器
　　環壕上層出土土器
図版41　環壕中層出土土器
　　環壕下層出土土器
図版42　環壕最下層出土土器
　　環壕内出土土器及び最下層出土土器一括
図版43　環壕内出土土器一括
　　段状特殊遺構出土土器
図版44　竪穴住居1出土土器
　　竪穴住居2出土土器
図版45　竪穴住居3出土土器
　　竪穴住居5出土土器
図版46　竪穴住居7出土土器
　　段状遺構出土土器①
図版47　段状遺構出土土器②
　　段状遺構出土土器③
図版48　段状遺構出土土器④
　　段状遺構出土土器⑤
図版49　段状遺構出土土器⑥
　　段状遺構出土土器⑦
図版50　段状遺構出土土器⑧
　　段状遺構出土土器⑨
図版51　段状遺構出土土器⑩
　　段状遺構出土土器⑪
図版52　段状遺構出土土器⑫
　　谷部落ち込み等出土土器
図版53　包含層出土土器
　　表採資料
図版54　石鏃，投弾，砥石，砥石細部拡大写真
図版55　石皿，台石，台石細部拡大写真
図版56　台石ほか
図版57　金属器
図版58　上：池ノ内群集墳遠景（西上空から）
　　下：池ノ内群集墳遠景（南上空から）
図版59　上：1号墳調査前近景（北西から）
　　中：1号墳墓壙断面（南東から）
　　下：1号墳全景（南西から）
図版60　上：2号墳調査前近景（南から）
　　中：2・3号墳全景（北西から）
　　下：2号墳全景（南西から）

図版61　上：２号墳棺検出状況（南西から）　　下：２号墳棺断面（南東から）
中：２号墳棺掘削状況（南西から）
図版62　上：２号墳棺完掘状況（南西から）　　下：２号墳周溝断面（南東から）
中：２号墳棺内鉄器出土状況（北西から）
図版63　上：２号墳周溝土器出土状況（北西から）　　下：２号墳墳裾土器出土状況（南から）
中：２号墳墳裾土器出土状況（西から）
図版64　上：３号墳調査前近景（南西から）　　下：３号墳墓壙検出状況（北東から）
中：３号墳全景（南西から）
図版65　上：３号墳棺完掘状況（南西から）　　左下：３号墳棺内土器出土状況（南から）
中：３号墳墳丘断面（南西から）　　右下：３号墳周溝土器出土状況（南西から）
図版66　上：４号墳調査前近景（北西から）
下：４号墳墳丘断面（南西から）
図版67　上：ＳＴ１検出状況（北西から）　　下：ＳＴ２墓壙断面（南西から）
中：ＳＴ２完掘状況（北から）
図版68　上：池ノ内２号墳棺内出土ガラス小玉　　左下：池ノ内２号墳棺内出土鉄器
右下：池ノ内３号墳周溝出土石製品
図版69　池ノ内２号墳周溝出土土器
図版70　上：池ノ内３号墳埴輪施設・墳頂出土土器　　下：池ノ内３号墳周溝出土土器（１）
図版71　池ノ内３号墳周溝出土土器（２）
図版72　上：池ノ内３号墳周溝出土土器（３）　　左下：ＳＴ１出土土器
右下：池ノ内５号墳表面採集土器

第1章　調査の経緯

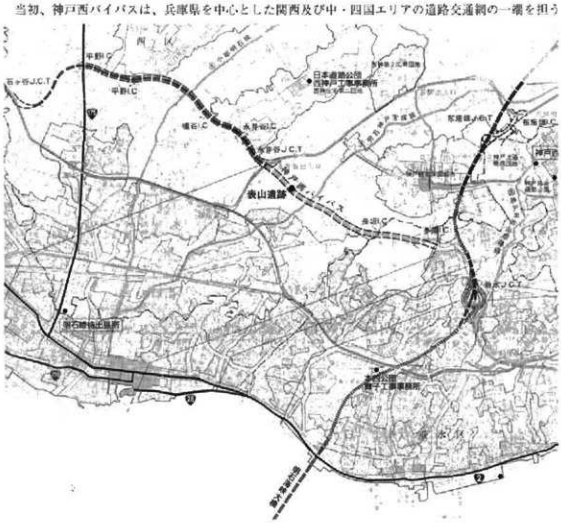
第1節　調査に至る経緯

建設省近畿地方建設局阪神国道工事事務所が計画する一般国道2号（神戸西バイパス）は、東端は本州四国連絡道（神戸ー鳴門）・阪神高速湾岸線・西神自動車道と共に垂水ジャンクションに連結し、西側は阪神高速北神戸線で永井谷ジャンクションと連絡する。更に、西神南及び西神ニュータウンの南側を抜け、石ケ谷ジャンクションで第二神明と合流する予定である。

垂水ジャンクションは、北向きに分岐して布施畑ジャンクションで阪神高速道路北神戸線と、その後山陽自動車道路と連絡して、三木ジャンクションに連結する。

本事業で計画された神戸西バイパスは、第二神明の北側約1kmを、東西に走る自動車専用道路で、現在のところ（平成12年3月現在）では、西神南ニュータウンで終点となっている。また、東行き車線は既に垂水ジャンクションに連絡しており、第二神明道路が名谷に分岐をもつ、西行きルートのみであることから、東行きでの垂水ジャンクションへの連絡という意味合いも兼ねている。

当初、神戸西バイパスは、兵庫県を中心とした関西及び中・四国エリアの道路交通網の一環を担う



第1図　神戸西バイパス路線図と表山遺跡の位置　（1／75,000）

ものとして計画され、それは平成7年1月17日早朝、あの未曾有の大被害をもたらした阪神・淡路大地震に伴い、交通網の一刻も早い復旧・復興の大号令の下、本事業も急ピッチで進められていた。

さて、事業地内における事前の分布調査は、平成3～4年の間に実施し、その結果を受けて、確認調査を実施した。確認調査の結果では、伊川を挟む東西の低位段丘上の神戸市西区伊川谷町字長坂から上脇にかけて遺跡を確認したので、平成4年度から平成8年度にかけて全面調査を行うに至った。

しかし、伊川の右岸丘陵付近は、近接する丘陵の裾付近まで全面調査範囲に有るにも係わらず、急峻な地形と雑木に阻まれた事から、埋蔵文化財の有無の確定が困難であった。そして、後間以後の確認調査の結果から遺跡の存在が明らかとなった。確認調査の詳細については次項において記述する。

第2節　発掘調査の経過

1．確認調査の概要

調査の経緯

平成8年5月神戸西バイパス建設に先立って、伊川谷町上脇字池ノ内、字表山の樹木伐採がおこなわれた。伐採後、丘陵上で古墳状隆起と須恵器の散布が確認された。また、重機用仮設道の崖面で弥生土器が採集され、弥生時代の高地性集落の存在が想定された。

すでに当該地は工事着工が決定していることから、緊急に古墳状隆起が古墳であるかの可否、遺跡の有無及び範囲を確認する調査を実施する必要が生じた。調査は隣接する上脇遺跡調査担当者と埋蔵文化財調査事務所調査第1班の現場開始待ちの職員が対応し、平成8年6月3日～12日の間に実施した。なお、確認調査時の名称は「池ノ内群集墳確認調査」と称した。

調査の方法

調査は、地形等を考慮し、遺構の存在する可能性のある箇所に幅1mのトレンチを23本（第2図中1～23Tと表記）設定した。トレンチは表土以下、遺構検出面直上まで重機にて掘削した。検出した遺構及び遺物包含層は人力掘削を行い、必要に応じトレンチを拡張し調査を行った。遺構及び遺物包含層の掘削は最小限に止め、全面調査に委ねた。また、重機用仮設道の崖面（第2図中A～D，E－F，G－H地点）を機械・人力にて精査し、土層観察を中心に調査し写真、断面図に記録した。各トレンチの調査終了後、トレンチ、遺構の平面的な位置を平板測量にて把握した。同時に遺跡が広がると想定される範囲を木杭を打って示し、図に記録した。

調査の結果

対象地のほぼ全域に遺跡が拡がることが判明した。検出したものは下記の通りである。

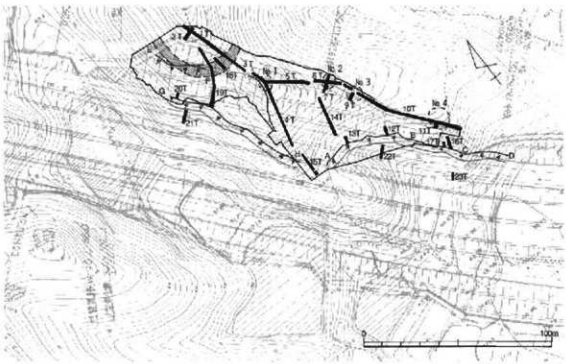
・古墳　　4基
・弥生時代集落（竪穴住居跡、段状遺構等）
・弥生時代環壕

以下調査の概要を記述する。なお、確認調査終了時の段階で判明したことを記述しているため、遺構について全面調査の成果と異なる部分がある。

古墳　当初の古墳状隆起4地点（第2図中No.1～No.4地点）は、いずれも古墳であることが判明し、周知の遺跡である池ノ内群集墳を構成するものと思われる。トレンチは地形に即して、No.1で3～5TをY字に設定した他は、No.2は6・7Tを、No.3は8～10Tを、No.4は10・11Tを十字に設定し、

調査を行った。その結果、No.１は頂上部で主体部と、墳裾と思われる短山の落ち込みを検出した。古墳の規模は径８ｍ程度である。No.２は頂上部で主体部を検出し、墳裾も確認した。古墳の規模は径８ｍ程度である。盛土下には弥生時代の竪穴住居跡があることも判明した。No.３は土取りで損壊していたため、調査は残存状況を主眼に置いた。その結果墳丘裾を確認し、墳丘が１/３程度残存していることが判明した。墳丘裾では破砕した須恵器甕等が出土した。古墳の復元規模は径８ｍ程度である。No.４は大半が工事対象地外になり、墳裾を把握するにとどまった。古墳の規模は径12ｍを測り、他よりも大型である。

弥生時代集落　主に対象地南半の東から南に拡がる緩斜面と、東に延びる尾根上に設定したトレンチで遺構を検出した。尾根上では６Ｔで１棟、10Ｔで２棟竪穴住居跡を検出した。竪穴住居跡の平面形はいずれも円形を呈し、規模は径６ｍ程度である。また南向きの斜面に設定したトレンチでは４・12・14・15Ｔで段状遺構または竪穴住居跡の可能性のあるテラス状遺構を検出した。仮設道の堆面Ａ－Ｂでは遺物包含層が確認できた。出土遺物は弥生時代後期を中心とし、分布状況は比較的粗である。12・13Ｔではこの遺物包含層の拡がりを確認した。



第２図　トレンチの位置及び周辺の地形

弥生時代環壕　尾根上の古墳の有無を確認するため設定した１Ｔ南半部で検出した。当初は上層埋土と地山との見極めが困難であったが、トレンチ内の掘削による断面観察で壕と認識できた。最下層には炭・焼土が堆積し、石鏃１点が出土している。さらに、壕の続きを確認するため18・19Ｔを設定し、堆面Ｅ－Ｆを精査したところ、いずれからも標高80m付近で地山を掘り込んだ壕が検出され、埋土の状態も類似すること、現地形も標高80m付近で段差が明瞭に認められることから、等高線沿いに巡る環壕となる可能性が高まった。なお、環壕内では１Ｔで土坑を検出した他に遺構は確認できなかった。

小結

調査の結果、対象地内には環壕を伴う高地性集落が存在することが明らかとなった。周知の遺跡である「池ノ内群集墳」とは遺跡の時代、性格が異なることから、環壕の所在する付近の字名から「表

山遺跡」と命名し、さらなる成果を全面調査に委ねることにした。

確認調査の体制

池ノ内群集墳確認調査（遺跡調査番号　960150）

調査担当職員	調査第1班	調査専門員	西口　和彦	
		技術職員	多賀　茂治	長濱　誠司
		研修員	水嶋　正稔	
事務担当職員	企画調整班	主査	深井明比古	

2．全面調査

全面調査は、確認調査の結果を受けて、早急に対応が図られた。前述の通り、既に本体工事は着工しており、工期内の工事完了と平成9年4月の道路開通は絶対であった。そこで、建設省・県土木部道路建設課・県教育委員会の三者は、如何なる工程を以て埋蔵文化財の発掘調査を行うか、本体工事工程との調整を含めて協議を重ね、結果、平成8年7月後半から調査を開始し、同年11月初旬までの調査完了を目指す事となった。調査対象範囲内には、古墳4基と、弥生時代の環壕を伴う高地性集落が確認されており、工期内の終了については工程的に幾分厳しいものであった。

全面調査は、まず池ノ内群集墳から開始した。調査は事前に古墳を中心として、周辺の地形測量を実施し、各古墳について調査範囲を任意に設定し、掘削を開始した。発掘調査は、2号墳・3号墳を中心として進行し、概ねお盆を前に終了した。また、お盆中は、地元の要望等もあったため、調査を一時休止した。従って、表山遺跡の全面調査は実質的には盆休み明けからのスタートとなった。

表山遺跡の調査は、重機及び人力による掘削を実施したが、急峻な斜面上での掘削は滑落の危険性を孕み、また遺構上に堆積する流土（包含層）は遺構面と酷似しており、掘削深度の見極めがし辛く、技術的に困難な部分があった。しかし、調査自体は連日の雨天で調査が止まりながらも、奇跡的に順調な進捗をみせ、同年10月19日には現地説明会を行い、11月8日に撤収した。

全面調査の体制（平成8年度）

表山遺跡　　遺跡調査番号　960156

池ノ内群集墳　遺跡調査番号　960157

調査担当職員	調査第1班	調査専門員	西口和彦
	調査第2班	技術職員	深江英憲
		事務職員	服部　寛
		臨時的任用職員	石松　崇

調査補助員　瀬尾正人　成田雅俊　山形　元　米澤美紀　杉原伸吾　山口知子　岸真理子

室内作業員　明石けい子　児玉幸紀　橋尾悦子

第3節　整理の経過

表山遺跡・池ノ内群集墳の整理作業は、遺物の水洗い・ネーミング作業については全面調査時に現場事務所で行い、以後の作業については平成10～11年度にかけて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

平成10年度の整理作業

実施した作業は、土器の接合・補強、実測、復元、一部遺物写真の撮影、金属器の保存処理である。

整理担当職員	整理普及班	主　査	加古千恵子
		主　査	森内　秀造
		主　査	菱田　淳子
	復興調査班	技術職員	深江　英憲
	調査第3班	事務職員	服部　寛
整理技術員託員	中筋貴美子　香川フジ子　早川亜紀子　中田明美　前田千栄子　吉田優子 吉田優子　喜多山好子　島村順子　中西睦子　八木富美子　尾鷲都美子 松末妙子　川村由紀		
(保存処理担当)	栗山美奈　和田寿佐子　前川悦子　藤川紀子		

平成11年度の整理作業

実施した作業は、土器の復元、一部遺物写真の撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、報告書印刷である。

整理担当職員	整理普及班	主　査	森内秀造
		主　査	菱田淳子
	調査第3班	技術職員	深江英憲
	復興調査班	事務職員	服部　寛
整理技術員託員	八木和子　平松ゆり　尾鷲都美子　高田健一		

第3図　整理作業風景

第2章　遺跡の環境

第1節　地理的環境

遺跡の所在する神戸市西区及び明石市周辺は、旧播磨国の東端にあたり、畿内摂津国との国境付近、所謂摂播国境地域である。また、播磨灘を対面の淡路島で挟む明石海峡は、瀬戸内海路の大阪湾における西門とも言うべき交通の要衝であり、まさに畿内と畿外を画す境目である。

本地域は、六甲山地の西側を流れる明石川の本流と、その支流域にあたる。明石川はその源流を六甲山地の西にあたる長坂山（標高392m）に持つ。川は上流の神戸市西区押部谷町木幡辺りで木津川・木見川を集めて明石川となり、南流して中流域で櫨谷川・伊川と合流した後、播磨灘に流れ込む。

明石川流域は、本流域を中心として、河川の氾濫源とその周辺で展開する狭い沖積平野と丘陵の織りなす地形である。大阪層群の隆起によって形成された丘陵は、流域河川の浸食によって形成された、比高差30～50m程の段丘崖状を呈しており、低地から丘陵に上がる急峻な地形に対して、丘陵上は比較的緩やか地形であり、丘陵頂部にまで至れば、流域の丘陵全体に眺望が及ぶ。また、海側に目を向けると、対岸に淡路島の東半部が見え、明石海峡は勿論のこと、大阪湾から紀淡海峡にいたる良好な遠望である。

養山遺跡・池ノ内群集墳は、神戸市西区伊川谷町上脇字養山及び池ノ内に所在する。明石川の支流である伊川右岸の丘陵上に位置し、明石川河口から約6.5km、本流明石川との合流分部から約1.7kmを測る、伊川中流域に位置する。伊川周辺は東西を段丘で囲まれ、さらに北側の狭い谷地形で、扇状地状の平野を形成している。

遺跡が立地する丘陵は、先にも述べた様に段丘崖状を呈し、低地と丘陵頂上部（標高約90m）との比高差が約55mを測り、非常に急峻な斜面である。丘陵上は伊川に向かって深い谷が切り込み、険しさを増しているが、丘陵上の西側は細く狭い谷が、水井谷川沿いを南北に走るものの、比較的平坦な地形が水井谷に向かって続いている。

(参考文献)
兵庫県教育委員会　1995　「第2節　遺跡をとりまく環境　2．歴史的環境」『玉津田中遺跡』3分冊

第2節　歴史的環境

表山遺跡の所在する明石川流域には、多くの遺跡の存在が知られている。この地域に人類の生活の足跡が見られるようになるのは、古くは縄文時代に遡り、古代・中世にいたる遺跡が断平し、或いは重なりながら現在にいたっている。本項では、本来ならば明石川流域に分布する全時代の遺跡について網羅すべきであるが、表山遺跡の遺跡の性格的特徴を考慮し、特に弥生時代に関連する遺跡を中心に、その歴史的環境について概説するため、遺跡分布図等については、他時代の遺跡の図示については割愛する（第4図・表1）。

縄文時代は、遺跡調査例が少ないが伊川流域の長坂遺跡において、兵庫県教育委員会の調査がされている。明石川中流域の玉津田中遺跡では、集落跡は検出されていないが、その存在を想定する痕跡は確認されている。

弥生時代には、大陸から稲作を主要な生産基盤とする文化が伝播し、それを紐帯とする社会が成立する。明石川流域においては、最も古い遺跡の調査例として神戸市西区の吉田遺跡が上げられ、前期古段階の土器が出土している。それ以前の初期の弥生集落は現在のところ確認されていないが、河口付近の海岸砂堆上に遺跡の存在を想定する視点がある。現段階では、それを否定するものではないが、小単位集団の一時的居住があったにせよ、この地に一定の集落を構えたとするには、やや消極的思考にならざるを得ない。

さて、弥生時代前期の遺跡については、先の吉田遺跡にやや遅れて明石川本流の中流域に玉津田中遺跡、下流域に新方遺跡等、中核的（拠点的）集落の出現を見る。そして、明石川本流域では中核集落の拡大と共に、上流部や支流域に集落が拡大し、雪本遺跡や南別府遺跡等、その小域単位での中核集落が出現する。

中期になると、前半には幾度の洪水等で、可耕地の拡大に伴い、居住域が段丘上に移動し、居住・小山遺跡等の集落が拡大する一方、近隣の山田川流域では、狩口台遺跡や舞子・東石ケ谷遺跡等が丘陵上に出現する。後半には、特に玉津田中遺跡において居住域・墓域共に拡大し、集落規模が最大となるが、その後集落は大洪水に見舞われるようである。

大洪水による土砂の流入は、それまでの微高地と水田分部を覆い、起伏が埋積されると、可耕地の拡大を生み、居住域を段丘及び丘陵上に移す集落が出現する。時期的には西神ニュータウンNo. 50地点や頭高山遺跡等がそれに当たり、一般的にこういった丘陵上の集落を高地性集落と呼んでいるが、この時期の高地性集落の全てが大洪水により居住域を移動したものかどうかは、慎重な目で見る必要があろう。なお、これらの高地性集落が廃絶するのに呼応するように、伊川流域の丘陵上に突如として表山遺跡が出現する。

後期になると、その初頭頃には表山遺跡が廃絶する。また、城ヶ谷遺跡もやや遅れて廃絶する。居住域は丘陵から段丘上や沖積地に戻り、これまでに大規模集落がなかった所に新た集落が出現する。また、墓域は丘陵上に残るようである。玉津田中遺跡も段丘上において再び成立し、神戸市西区の池上北遺跡や吉田南遺跡が出現する。特に、吉田南遺跡は後期以降明石川流域における拠点的集落となっていく。また、中期後半に消滅した山田川流域の舞子・東石ケ谷遺跡等の高地性集落は、この時期に再び出現する。

古墳時代には、弥生時代後期の玉津田中遺跡・新方遺跡・吉田南遺跡等の集落が継続し、明石川流域における代表的な前期古墳である、伊川谷の白水瓢塚古墳や天王山古墳群・玉津田中遺跡西方丘陵上の印路Ｃ古墳群等を造営する原動力となっている。中期には神戸市西区に王塚古墳が造営され、他の円墳と共に古墳群が形成される。後期には、群集墳の形態をとる古墳群が流域に造営され、神戸市西区の印路古墳群・別項で後述する池ノ内群集墳等が上げられる。

また、この時期には、明石市の高丘古窯跡や赤根川・金ヶ崎古窯跡等で須恵器生産が営まれる。

飛鳥時代や奈良時代における明石川の状況は、あまり明確な把握がなされていない状況にあり、恐らく古墳時代以降の集落が継続的に営まれていたと想定される。しかし、平安時代後期になると、玉津田中遺跡の周辺の居住小山遺跡や二ツ屋遺跡等の段丘上や、居住遺跡等の沖積地に集落遺跡が形成されるようである。

その他、京都の寺院や鳥羽離宮など院政に係る建物の瓦を供給した神出窯跡群が操業される。

（参考文献）

兵庫県教育委員会　1995　「第２節　遺跡をとりまく環境　２．歴史的環境」『玉津田中遺跡』３分冊
丸山潔　1992　「弥生集落の動態(１)－摂播国境地域－」
『究班』－埋蔵文化財研究会15周年記念論文集－

第4図　表山遺跡の位置と明石川流域の弥生遺跡

表1　明石川流域の主要な弥生時代の遺跡一覧

番　号	遺　跡　名	遺跡の時期	遺跡の内容及び特徴的な遺物
1	鷹匠	中期	集落。
2	古田南	後期～	集落。磨製（雲雷文鏡）・小形仿製鏡・鉄斧。
3	片山	前期	集落。
4	森友	後期	集落。
5	古田	前期	集落。
6	持子	後期	集落。
7	新方	前期～後期	集落。碧玉製玉類・小形仿製鏡・鉄斧・銅鏃。
8	高津橋・岡	後期	集落。
9	今津	前期～後期	集落。
10	昌会	中期～後期	集落。
11	丸塚	後期～終末期	集落。
12	居住	前期～後期	集落。
13	玉津田中	前期～後期	集落。砂岩製石包丁、鋳型、堆堝、小形仿製鏡。
14	二ツ屋	後期	集落。
15	日輪寺	後期	集落。
16	居住・小山	後期	集落。碧玉製管玉。
17	黒崎	後期～終末期	集落。
18	平野	前期～後期	集落。
19	印路	前期	集落。
20	印路台状墓	中期	墳墓。
21	西戸田	前期・後期	集落。
22	常本	前期～後期	集落。扁平片刃石斧。
23	大畑	後期	集落。
24	繁田	中期～後期	集落。
25	西神N．T．50地点	中期	高地性集落。
26	西神N．T．48地点	中期	高地性集落。磨製石剣。
27	西神N．T．38・40地点	中期	高地性集落・墳墓。
28	堅田	中期～後期	集落。
29	黒田	中期	集落。
30	鍋谷池	中期	集落。
31	黄田	後期	集落。
32	黄田中ノ池	中期	高地性集落。磨製石剣。
33	西神N．T．62地点	後期	集落。
34	西神N．T．65地点	中期	高地性集落。凝灰岩製銅鐸鋳型未成品。
35	栄木	中期	集落。
36	長谷	後期	集落。
37	青谷	中期～後期	高地性集落。小形仿製鏡・磨製石剣・磨製石戈。
38	城ケ谷	中期～後期	高地性集落。
39	谷口	中期～後期	集落。
40	如意寺北	中期	高地性集落。
41	南別府	前期～後期	集落。
42	北別府	中期～後期	集落。
43	池上北	後期～終末期	集落。
44	池上口ノ池	中期・後期～終末期	集落。磨製石剣。
45	長坂	後期	集落。
46	上脇	後期	集落。
47	去山	中期～後期	高地性集落。小形仿製鏡。
48	源高山	中期	高地性集落。磨製石剣・磨製石鏃。
49	前開	中期	集落。
50	久留主谷	中期	高地性集落。
51	狩口台	中期～後期	高地性集落。紅廉片岩。
52	大歳山	前期・後期	高地性集落。
53	舞子・東石ケ谷	中期～後期	高地性集落。ガラス玉。碧玉製管玉。

第3章　表山遺跡の調査

第1節　遺跡の概要

表山遺跡における立地その他の概要は別項にて詳細を記述しているので、関連事項の記述は本項では省略し、まず本遺跡で検出した遺構について、その個々の遺構の解説をする前に、全体的な概要を記述しておく。

さて、今回検出した遺構の特徴として上げられる点には、集落の存続時期が非常に限定されることであり、それは即ち弥生時代の中期から後期にかけての、丁度端境期にあたる。限定された時期であるだけに、その細かな帰属時期等についても問題視されるところである。それについては、何れ触れる必要性があるが、本稿においてはその記述は避けることとする。

第2節　遺構

1．遺構の概要（図版1，写真図版1～4）

表山遺跡で検出された遺構は、標高約89mを頂部として伊川の平野へと延びる尾根上及びその南傾斜面で検出されているが、その尾根は頂部に比較的近い部分で狭い鞍部を持ち、またそれに区画された形で遺構が点在する。そして、鞍部付近には、頂部に向かって急激に立ち上がる斜面の裾部に環壕を巡らしている。従って、遺跡内は、環壕を界に大きく遺構が2分されている事が看守される。つまり、環壕が囲む内部の施設、そして環壕の外側に点在する施設であり、両者が有機的関係を以て集落を形成している。

2．環壕（図版2～3，写真図版5～8）

環壕は表山遺跡の性格を特徴付けるのには不可欠の遺構である。遺構は、調査区北部の「馬の背」状の尾根鞍部で顕著に検出され、南面する尾根の裾部沿いをコンタラインに沿う様に巡る壕状の遺構である。調査区においては、検出された延長が約50mを測り、現存する環壕の規模は丘陵側からの幅が約4～6m，床面幅2m，最大深度は約3.5mを測る。断面形状は、鞍部側の立ち上がりが土砂の流出及び後世の削平等により失われているものの、ほぼ逆台形を呈している。

環壕内の埋土は、地山土に酷似する黄灰色砂礫層が中心であり、急峻な斜面地形のために、非常に早い速度で埋没していった事が窺える。そういった状況は、環壕の維持といった面で非常に致命的な欠陥を持つ環境であったと想定され、断面の観察において数度にわたる掘り直しを行った痕跡が見られる事からも明白である。また、その堆積は低地の溝等に見られる様なものと異なり、水性堆積を示す状況を殆ど確認出来ない事から、通常水を湛える事の無い空壕であった事が想定される。それは、環壕の一部で排水口とも窺える溝状の突出部を検出した事からも看守されるものである。ただし、環壕の尾根鞍部から排水口状の遺構の間では、湧水を伴う部分があり、しかもその最下層からは多量の炭化米を含む炭化物層が破砕した大型の壺と共に出土している。2者の相関関係は不明だが、この湧水ポイントが環壕自体の機能として有機的に利用されていたかどうかは、今後検討の必要があろう。

環壕は，東側の尾根鞍部及び南側斜面において，壕状の掘り込みを持つ状況を止めているが，それより西へ向かうに従って，徐々に掘形が統息していく。これは，掘形の流失や削平等の影響もあろうが，むしろ西側で急激に谷へ落ちていく地形を利用する事で，有効な防御施設を構築したのではないかと考えられる。つまり，丘陵側から「L」字状にカットしてテラスを設け，丘陵側の傾斜角を大きくするのである。恐らくこのテラス状の地形は調査区外にも延びるものと想定でき，同一コンタライン上において延びていくとみて間違いなかろう。

環壕は，環壕自体も含めて，環壕で取り囲んだ丘陵上において遺構を検出している。それは，環壕内で検出した橋状遺構と，環壕内で検出した段状特殊遺構と竪穴住居等がある。それらの遺構については各項で詳述する。

3．橋状遺構（図版4，写真図版7～8）

橋状遺構は，環壕東側の尾根鞍部にあり，環壕全体の中でも比較的浅い部分にあたる。遺構は，環壕外側の掘形からテラス状に中へ張り出す部分と，それに対応して，環壕内側の掘形部分で直径35cmの柱の様な施設の存在を窺わせるピットを1基検出した（柱状遺構）。柱状遺構は，環壕内の切り立った部分において，壁面が非常に激しく焼けており，流出した埋土及びその周辺には多量の焼土粒や炭粒が混入していた。また，柱状遺構を中心とする環壕床面付近には，橋状遺構の部材とされたと考えられる炭化木材が出土した。また，炭化材と同様に床面及び柱状遺構の下側では拳大及び人頭大の円礫が集積しており，一時飛礫石との解釈が成されたが，恐らくは柱状遺構を中心とする橋状遺構に伴う施設の補強材として使用されたものと考えられる。

また，本遺構からは，上記の炭化材の他に，床面直上で九州系の小形仿製鏡と最下層付近に鉄滓が出土している。これについては，別項（第3章第3節　金属器）にて，後述するが，これらの出土遺物が床面や最下層付近で出土した事は，集落の時期決定等の問題を越えて，流通論的視野までの広がりを持たせる良例といっても過言ではない。

橋状遺構と呼称したこの遺構では，大壁のピットとテラス状の張り出し以外は，遺構らしきものを確認出来なかった。遺構は削平により失われてしまった可能性もあるが，環壕内部への進入を阻止するための意味合いを鑑みれば，現在の橋を思わせる頑強な橋脚を備えたような，恒久的施設をイメージするのではなく，有事の際には即座に橋を落とせる様な簡易なものであったと想定される。

4．段状特殊遺構（図版5，写真図版9～10）

段状特殊遺構は，環壕内側の南東斜面に位置する。遺構は非常に急峻な地形をカットして，平坦部を設けるものであるが，地盤が非常に脆い砂質層であるため，遺構の半分程度は流失していると考えられる。検出した部分から推測するに，恐らく楕円形に近い隅丸方形状プランであったと考えられ，床面の壁際には周壁溝も確認した。遺構の規模は，東西長5.3m，現存幅1.5m，最大深度0.55mを測る。

遺構内は，検出時から夥しい点数の土器群が集積しているが，土器も含めて，壁・床面共に非常に激しく焼けた痕跡を止めている。また，遺構内で特に土器の遺存度が高い南側では，柱痕と思ほしき木材の一部も炭化した状態で出土した。

本遺構は，竪穴住居か周壁溝を持つ段状遺構かで，その性格付けを明示しかねていた。発掘調査段階では，柱材と思われる炭化材を確認した事等から，便宜上谷側の部分が流失した4本柱を持つ隅丸

方形状の竪穴住居という解釈をした。しかし、大量の土器の一括廃棄と人為的ともとれる激しい被熱状況は、明らかに周囲の遺構とは異質のものであり、単なる居住施設と考えるには違和感を禁じえない。然るに、それが単なる段状遺構といっても、段状遺構自体の性格付けも出来ていない現状を鑑みれば、一概にその様にも考えにくい。従って、本稿では居住施設のイメージを払拭すべく、しかしそのプランの特徴も意識して「段状特殊遺構」とした。

5．竪穴住居跡

本遺跡で検出した竪穴住居は、計7棟である。発掘調査段階では、段状遺構の一部についても竪穴住居としての評価を与えていたが、最終的に居住施設として評価したものを全て掲載した。しかし、段状遺構に踏襲されるものや、平面プランが曖昧なものもあり、必ずしも竪穴住居と断定し難いものがあるのも否めない事実である。

竪穴住居1（図版6，写真図版11）

検出状況

調査区中央部の東向き尾根の稜線上の傾斜変換点に位置する。本遺構は、検出した全ての竪穴住居の内唯一全形を残すものである。掘形等も比較的良好な残存状況であり、調査前から住居部分が凹んだ形で見えていた。また、後世にその凹み部分を池ノ内2号墳の周溝部として再利用されたようである。

形状・規模

一部隅丸に近い形態をとるが、直径6.5mの円形としておく。

屋内施設

周壁溝とその東側隅で連結して住居外へ抜ける排水口、中央土坑及び柱穴を検出した。主柱穴は、不定だが、5～6本柱になろう。

周壁溝

本来は全周しているものであろうが、地形の影響か、南東部で狭くなり、部分的には途切れる箇所もある。

出土遺物

周壁溝付近西側で完形の甕、北側で高杯と石皿・台石類が出土した。また、中央土坑付近には、床面直上で台石が出土した。

竪穴住居2（図版7，写真図版12）

検出状況

調査区中央部の南向き尾根の稜線上の傾斜変換点に位置し、南半部分が崩落及び削平等で失われている。本遺構は、壁・床・屋根にあたる部分が、共に非常に激しく焼け落ちた状況を如実に物語る焼失住居である。床部分には、垂木材等の屋根部材が炭化した状態で出土した。また、壁部分は特に山側の粘質土がベースとなっている部分では、土圧による影響が大きかったようで、焼失後に住居が埋没していく過程において、地滑りによる壁の崩落が見られ、断面観察により住居の壁の倒壊状況を窺うことが出来る。

形状・規模

直径8.4mの円形を呈する。

屋内施設

周壁溝と中央土坑、及び柱穴を検出した。主柱穴は明確でないが、7本柱になろう。

中央土坑

遺構中央にあり、不定円形の土坑である。

周壁溝

遺構東側と西側で一部壁守したが、南側の状況は崩落により不明である。

出土遺物

周壁溝付近の床上で大型の長頸壺や広口壺が出土したほか、床面上で高杯片が出土した。また、中央土坑付近の床面上で台石が出土し、遺構埋土中から石鏃も出土した。

竪穴住居3（図版8，写真図版13）

検出状況

調査区中央部の南向斜面に位置し、段状遺構6に伴って検出した。

形状・規模

長さ約8.7m、現存幅約2.2mの隅丸方形プランである。

屋内施設

周壁溝と柱穴、及び溝を検出した。主柱穴は不明。

周壁溝

検出した部分については全周しており、「コ」の字状になっている。

出土遺物

埋土中より壺の口縁部や底部等が出土した。

竪穴住居4（図版8）

検出状況

調査区中央部の南向斜面に位置し、段状遺構6に伴って検出した。

形状・規模

長さ約4.1m、現存幅約2.2mの隅丸方形プランである。

屋内施設

周壁溝のみを検出した。

周壁溝

東側が途切れる「コ」の字状になっている。

出土遺物

出土遺物は無かった。

竪穴住居5（図版8，写真図版13~14）

検出状況

調査区東部の東向き尾根の稜線上の傾斜変換点に位置する。確認調査段階で既に発見済みであった

焼失住居で、炭化材を検出している。

形状・規模

直径約5.4mの円形を呈する。

屋内施設

周壁溝と柱穴を検出した。主柱穴は4本となるか、不明である。

周壁溝

北側で検出しているが、南側では流失してしまっているようである。

出土遺物

床面付近で壺の口縁部と底部が出土した。

竪穴住居6（図版9，写真図版15）

検出状況

調査区西部の環壕内、西向き斜面に位置する。

形状・規模

復元長約4.2m、現存約1.3mで、恐らく隅丸方形であろう。

屋内施設

周壁溝と柱穴を検出した。主柱穴は4本と考えるが、西側は流失しており、不明である。

周壁溝

東側で検出したが、西側は流失しており、不明である。

出土遺物

出土遺物は無かった。

竪穴住居7（図版9，写真図版15）

検出状況

調査区西部の環壕内、ほぼ頂上付近に位置する。本遺構は調査区の断面で炭化物層が確認されたことで検出し、拡張調査を行ったが、残念ながら良好な情報は得られなかった。

形状・規模

復元した一辺が約4.0mであり、恐らく隅丸方形であろうと考えられる。

屋内施設

周壁溝らしき遺構と柱穴を検出した。主柱穴は不明である。

周壁溝

明確に検出できたのは遺構北側のみであった。

出土遺物

埋土中から壺の口縁部と底部が出土した。

6．段状遺構

本遺跡から検出された段状遺構は、全て環壕外の南面斜面地上である。段状遺構は、斜面地を「L」字状にカットする事で平坦な地形を造りだすものである。段状遺構という呼称については、遺構の造

成過程において与えられた名称であり、その形状や規模、及び付帯施設等について多くのバリエーションを持っている。従って、段状遺構と言う一遺構の中でも、様々な機能的差異を持つと考えられるのである。弥生時代の高地性集落で検出される代表的な遺構である段状遺構については、未だに機能的に不明な点を残しており、近年においても様々な検討が成されている。

そこで、本遺跡で検出した段状遺構については、機能的な部分についての言及は極力避けつつ、3つの属性を上げて、それぞれについて分類を行う。

Aタイプ：柱穴や周壁溝等の付帯施設を伴わないもの。

Bタイプ：柱穴を伴うもの。

Cタイプ：周壁溝のみで検出されるもの。

Aタイプは、不定形で比較的等高線沿いに細長いものが多い。遺構に伴うものと、単独で検出されるものが有り、前者は例えば住居を維持する上での付帯施設のようなものであろう。また、後者は集落内の通路的役割が考えられるものである。

Bタイプは、2個程度のプランにほぼ並列する柱穴を伴うものと、ほぼ直列に3個以上の柱穴を伴うものであり、前者は、場合によっては竪穴住居の可能性を秘めるものであり、後者は柱穴の数によるものもあるが、掘立柱建物や柵列状の遺構となる可能性がある。

Cタイプは、床面上で周壁溝のみを伴うものである。周壁溝の形態は通常山側が流失している事が多く、「コ」の字状か、若しくは「L」の字状で検出される。遺構の形状は周壁溝の形から隅丸方形状であろうと考えられる。柱穴は検出されないが、竪穴住居の可能性を残している。

段状遺構1（図版10）

検出状況

調査区東部に位置する。本遺構は斜面地の傾斜に沿って掘削された溝に切られた状況で検出した。

形状・規模

現存長が約9.8mで、不定形である。

付帯施設・分類

付帯施設は無い。Aタイプである。

出土遺物

埋土中から甕か脚付き無頸壺の口縁部と底部が出土した。

段状遺構2（図版10）

検出状況

調査区東部に位置し、段状遺構3に隣接する。

形状・規模

長さが約6.4m、幅が約1.1mの細長い溝状を呈する。

付帯施設・分類

付帯施設は無い。Aタイプの範疇であろう。

出土遺物

埋土中及び床面付近から広口壺の口縁部と甕、高杯の破片が出土した。

段状遺構３（図版10）

検出状況

調査区東部に位置し、段状遺構２に隣接する。

形状・規模

長さが約1.9m、幅が約0.7mの細長い土坑状を呈する。

付帯施設・分類

付帯施設は無い。Ａタイプである。

出土遺物

埋土中から甕か脚付き無頸壺の口縁部と底部が出土した。

段状遺構４（図版10，写真図版18）

検出状況

調査区南部に位置し、段状遺構２・３に隣接する。

形状・規模

長さが約5.3m、幅が約2.8mで、やや不正な隅丸方形状を呈する。

付帯施設・分類

幅の狭い周壁溝と直列する柱穴を３個検出した。Ｂタイプである。

出土遺物

埋土中から壺・甕の口縁部と底部が出土した。

段状遺構５（図版10）

検出状況

調査区中央部に位置し、竪穴住居２・溝状遺構１に隣接する。

形状・規模

長さが約4.6m、幅が約1.4mで、西側が流失しているが、隅丸方形を呈する。

付帯施設・分類

周壁溝の一部と柱間が不定ながら直列の柱穴を３個検出した。Ａタイプである。

出土遺物

埋土中から甕の口縁部が出土した。

段状遺構６（図版11，写真図版18）

検出状況

調査区中央部に位置し、竪穴住居１・２の丁度中間にある。

形状・規模

長さが約18.0m、幅が約4.2mの細長く、不定形なものである。

付帯施設・分類

竪穴住居３・４を取り込んでいる。Ａタイプであろう。

出土遺物

埋土中から広口壺、甕、無頸壺、蓋、高杯、そして底部・脚部等多量の土器が出土した。これは、竪穴住居の埋土中の土器も混在している可能性がある。

段状遺構7（図版12）

検出状況

遺跡中央部に位置し、段状遺構6に隣接する。

形状・規模

現存長が3.9m、幅0.6mで、細長い「L」字状を呈する。

付帯施設・分類

周壁溝と柱穴1個を検出した。Cタイプの範疇に入れる。

出土遺物

埋土中からの遺物の出土は無かった。

段状遺構8（図版12）

検出状況

遺跡中央部に位置し、段状遺構9に隣接する。

形状・規模

長さが2.1m、幅0.9mで、細長い楕円形を呈する。

付帯施設・分類

付帯施設は無い。Aタイプである。

出土遺物

遺構東側床面に焼成後穿孔を施す壺の下半部が据えられた様な状態で出土した。

段状遺構9（図版12，写真図版18）

検出状況

遺跡中央部に位置し、段状遺構8に隣接する。

形状・規模

長さが4.9m、幅0.8mで、細長い隅丸長方形状を呈する。

付帯施設・分類

周壁溝と直列する柱穴4個を検出した。Bタイプである。

出土遺物

無頸壺と甕、底部が出土した。

段状遺構10（図版12，写真図版19）

検出状況

遺跡中央部西側に位置し、段状遺構11に隣接する。

形状・規模

長さが10.8m、幅2.5mで、細長い不定形を呈する。

付帯施設・分類

周壁溝と不正な柱穴を検出した。Bタイプの範疇に入れるが、Aタイプに近い状況である。

出土遺物

埋土中及び床面上から甕と底部を出土した。

段状遺構11（図版13）

検出状況

遺跡中央部に位置し、段状遺構10に隣接する。

形状・規模

長さが9.2m、幅2.0mで、細長い不正な長方形状を呈する。

付帯施設・分類

不正な柱穴を検出した。Aタイプに近い状況である。

出土遺物

埋土中及び床面上から広口壺と甕、脚部が出土した。また、砥石も出土した。

段状遺構12（図版13，写真図版19）

検出状況

遺跡中央部西側に位置し、段状遺構15に隣接する。

形状・規模

長さが5.7m、幅1.6mで、不定形である。

付帯施設・分類

溝とその上に直列する3個の柱穴を検出した。Bタイプの範疇に入れておく。

出土遺物

埋土中及び床面上から広口壺と甕、底部と脚部が出土した。

段状遺構13（図版13）

検出状況

遺跡中央部東側に位置し、段状遺構6の東側にある。

形状・規模

長さが3.8m、幅0.7mで、細長い溝状を呈する。

付帯施設・分類

付帯施設は無い。Aタイプである。

出土遺物

埋土中から遺物は出土しなかった。

段状遺構14（図版13）

検出状況

遺跡中央部に東側に位置し、段状遺構17に隣接する。

形状・規模

長さが4.0m、幅0.6mで、細長い溝状を呈する。

付帯施設・分類

付帯施設は無いが、周壁溝になる可能性がある。Aタイプだが、Cタイプの要素もある。

出土遺物

埋土中から遺物は出土しなかった。

段状遺構15（図版13，写真図版19）

検出状況

遺跡中央部西側に位置し、段状遺構12に隣接する。

形状・規模

長さが3.8m、幅1.2mで、不正な隅丸方形か楕円形である。

付帯施設・分類

直列する2個の柱穴を検出した。Bタイプである。

出土遺物

埋土中から広口壺と底部、脚部が出土した。

段状遺構16（図版14）

検出状況

遺跡中央部西側に位置し、段状遺構12に隣接する。

形状・規模

長さが2.0m、幅0.6mで、不正な楕円形状を呈する。

付帯施設・分類

付帯施設は無い。Aタイプである。

出土遺物

埋土中から遺物は出土しなかった。

段状遺構17（図版13）

検出状況

遺跡中央部東側に位置し、段状遺構18に隣接する。

形状・規模

長さが1.5m、幅0.6mで、楕円形状か隅丸方形状を呈する。

付帯施設・分類

付帯施設は無い。Aタイプである。

出土遺物

埋土中から壺、甕、底部、脚部が出土した。

段状遺構18（図版14）

検出状況

遺跡中央部東側に位置し、段状遺構21に隣接する。

形状・規模

長さが2.2m、幅0.6mで、楕円形状が隅丸方形状を呈する。

付帯施設・分類

小土坑を１基検出した。Ａタイプである。

出土遺物

埋土中から遺物は出土しなかった。

段状遺構19（図版14）

検出状況

遺跡中央部東側に位置し、段状遺構20に隣接する。

形状・規模

長さが3.8m、幅0.5mで、細長い楕円形状を呈する。

付帯施設・分類

２基の柱穴を検出した。Ｂタイプの範疇に入れておく。

出土遺物

埋土中から遺物は出土しなかった。

段状遺構20（図版14）

検出状況

遺跡中央部東側に位置し、段状遺構19に隣接する。

形状・規模

長さが1.4m、幅0.9mで、楕円形状を呈する。

付帯施設・分類

付帯施設は無い。Ａタイプである。

出土遺物

埋土中から遺物は出土しなかった。

段状遺構21（図版14）

検出状況

遺跡中央部東側に位置し、段状遺構18に隣接する。

形状・規模

長さが6.0m、幅1.6mで、隅丸方形状を呈する。

付帯施設・分類

柱穴４基を検出し、内３基は並ぶ可能性がある。Ｂタイプである。

出土遺物

埋土中からは、壺・甕・高杯・器台の他、製塩土器と考えられるものも含めて比較的多量の土器が出土した。

段状遺構22（図版14）

検出状況

遺跡中央部東側に位置し、竪穴住居5に隣接する。

形状・規模

長さが4.2m、幅1.1mで、不定な楕円形状を呈する。

付帯施設・分類

柱穴1基を検出した。Aタイプの範疇である。

出土遺物

埋土中から遺物は出土しなかった。

段状遺構23（図版15，写真図版20）

検出状況

遺跡中央部東側に位置し、段状遺構24に隣接する。

形状・規模

長さが4.8m、幅1.8mで、不定な楕円形状を呈する。

付帯施設・分類

柱穴1基を検出した。Aタイプである。

出土遺物

埋土中からは、壺・甕・高杯等が出土した。

段状遺構24（図版15，写真図版20）

検出状況

遺跡中央部東側に位置し、段状遺構23に隣接する。

形状・規模

長さが8.6m、幅2.2mで、やや不定ながら隅丸方形状を呈する。

付帯施設・分類

柱穴5基を検出し、内4基は直列に並ぶ。Bタイプである。

出土遺物

埋土中からは、壺や底部等が出土した。

段状遺構25（図版15）

検出状況

遺跡中央部東側に位置し、段状遺構26に隣接する。

形状・規模

長さが6.8m、幅0.7～2.0mで、細長い楕円形状に残る。

付帯施設・分類

遺構の内外柱穴２基を検出したが，遺構に伴うものか不明である。Ａタイプである。

出土遺物

埋土中からは、壺・甕・底部等が出土した。

段状遺構26（図版16）

検出状況

遺跡中央部東側に位置し、段状遺構25、及び竪穴住居５に隣接する。本遺構は、埋土として境土と炭化物ブロックが多量に混入し、最下層は炭化層が堆積していた。また、壁の一部は被熱の痕跡が看守された。

形状・規模

長さが3.8m、幅2.2mで、不定ながら隅丸長方形を呈する。

付帯施設・分類

土坑状の落ち込みを検出した。所謂段状遺構としては、遺構の状況が異質である事から、何れのタイプにも該当しない。

出土遺物

埋土中からは、壺・甕・底部等が出土した。

機能

検出状況等を見ても段状遺構としての位置付けは困難である。現状では、遺構の機能を確定する事にも難はあるが、極めて短期的でも燃焼を目的としたものと理解できることから、焼土状の施設をイメージしても良いと考える。

段状遺構27（図版16，写真図版20）

検出状況

遺跡中央部東側に位置し、段状遺構13に隣接する。本遺構は、平坦部状に浅い凹みを持った小土坑が２箇所隣接し、遺構中には、小振りの円礫と角礫が集積した状態で検出した。

形状・規模

西側の小土坑は長さが1.2m、幅0.9mの不定円形で、東側の小土坑は長さが1.6m、幅0.9mの歪な隅丸長方形を呈する。

付帯施設・分類

付帯施設は無い。段状遺構としては、状況が異質である事から、何れのタイプにも該当しない。

出土遺物

埋土中からは、壺・甕・底部・高杯等が出土した。

機能

遺構の機能は現状において不明であるが、周辺には同様の状況が見られないので、単なる自然堆積とは考え難い。

土坑1（図版16，写真図版21）

検出状況

遺跡中央部に位置し、段状遺構7に隣接する。本遺構は、浅い土坑内に壺の上半部が反転して埋設されていたものである。

形状・規模

直径0.4mの円形である。

付帯施設

付帯施設は無い。段状遺構としては、状況が異質である事から、何れのタイプにも該当しない。

出土遺物

埋土中からは、壺の口縁部が出土したが、図化はしていない。

機能

遺構の機能は、人為的埋設行為によるものとは理解出来るが、現状においては不明である。

溝状遺構1（図版16）

検出状況

遺跡中央部西側に位置し、段状遺構5に隣接する。

形状・規模

長さ4.7m、幅0.6mの細長い楕円形である。

付帯施設

付帯施設は無い。

出土遺物

埋土中からは、壺の底部が出土した。

溝状遺構2（図版16）

検出状況

遺跡中央部西側に位置し、段状遺構12に隣接する。

形状・規模

長さ3.7m、幅0.6mの細長い楕円形である。

付帯施設

付帯施設は無い。

出土遺物

埋土中からは、遺物は出土しなかった。

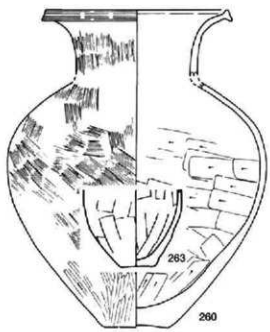
谷部落ち込み（図版1，写真図版21）

谷部の落ち込みは、遺跡中央部から南部西側の谷部において、斜面地からやや平坦になる傾斜変換点にある。これについては、他の遺構の様に明確な掘形を持つものではなく、個別の図示は行っていないが、個体土器が集積する特異な状況にはある種の人為的所作を感じるので、その個体土器の出土状況の解説も踏まえた上で、本遺構の理解について一方向性を述べる事とする。

谷部落ち込み内で検出した個体土器は、大きく2個体が上げられる。1個体は、短頸壺（261）である。これは、斜面地と平坦地の丁度境めで検出したもので、やや斜めに傾いた状況で出土した。

2個体は、広口壺（260）である。これは、平坦部においてやはりやや斜めに立った状態で検出したのだが、この土器の特異な点は、土器内に小型の壺（263）が入っていたことである。これは、決して流れ込んだようなものでは無く、明らかに意図的に入れられたものである。

以上、2個体の土器は、その出土状況もさることながら、器壁全体の磨滅があまり顕著でないことから、斜面地から転がって集積したものではないことが分かる。



第5図　谷部落ち込み出土土器

それでは、本遺構はどのような性格が考えられるのであろうか。それは、この部分が遺跡内において最も低い谷部にあたるところに一つのポイントが有りそうである。つまり、ここがこの遺跡の水汲み場ではないかという仮説によるものである。周辺の傾面では若干の湧水が見られ、また、斜面地がこの谷部を要とする扇状に展開しており、集水性にも長けた場所であった事が想像されるのである。

高地性集落は、そこでの居住する事において「住」を考えた時に最も重要になってくるのは、やはり水の確保である。特に、表山遺跡のように周辺の低地に母集落を持たない集落においては死活問題であろう。そこでは、集落に隣接して効率良く水の供給を行う施設が必要となる訳である。従って、谷部における平坦なスペースは、水汲み場或いは水汲み場に伴う何らかの施設と考えられるのである。

第4章　出土遺物

第1節　土器

今回の発掘調査で出土土器は、28リットル入りコンテナで56箱の出土量であった。出土土器は接合し、最終的に本報告において掲載したのは293点であった。

表山遺跡における出土土器は、環壕及び環壕内の段状特殊遺構から出土したものが大半を占める。環壕外の遺構は、急峻な傾斜地である事から、流失してしまうことも考えられるが、非常に僅かな点数であった。また、この様な丘陵状の遺跡から出土する土器の宿命とも言うべきか、摩滅が激しく、器種の認定にも支障を来す程であった。従って、心ならずも器種の認定に誤りがある場合はご容赦されたい。

さて、出土土器の解説については、主要な遺構と土器の一括性の高いものを先行させ、環壕・段状特殊遺構・竪穴住居・段状遺構・その他の遺構と進み、包含層等については最後にまとめた。

環壕上層出土土器（1～12）

1は、壺の口縁部である。直口気味に立ち上がる頸部は、ラッパ状に外反し、端部が上下にやや拡張する事で面を成す。端部は無文である。

2・3は、甕の口縁部である。2は、棱の鈍い屈曲部をもつ「く」の字状を呈し、端部はあまり肥厚せずに、断面が隅丸方形状にまとまる。3は、僅かに外反しながら開く「く」の字状を呈し、口縁端部では上下方に小さく拡張して面を成し、2条の擬凹線文を施す。

4・5は、底部である。4は、小型の平底である。内面が欠損し、器面調整等が不明だが、恐らく壺であろう。5は、比較的大型で分厚い平底である。外面調整は不明で、内面調整は縦方向を主体としたケズリを施す。器種は壺であろう。

6は、壺の胴下半部である。全体に厚みがあり、緩やかに開きながら立ち上がる。外面調整には、右肩上がりのタタキが残る。また、内面には斜め方向のケズリが見える。

7は、高杯の口縁部である。屈曲して開きながら立ち上がるもので、口縁端部は若干外方向に拡張して、上方で面を成す。外面には、2条の擬凹線文を施す。

8・9は、脚部である。8は、上方へ僅かに摘み上げた端部を持ち、外面に1条の沈線を施し、円形スカシも見られる。器形は不明だが、円錐状を呈するものであろう。9は、面を成した端部が上方に跳ね上がる様な形態を呈している。円錐状と考えられる形態には、円形スカシも見られる。外内面調整の詳細は不明ながら、内面には僅かにケズリの痕跡が看取される。

10～12は器台である。10は、口縁及び脚部共に欠損しているが、中程で窄まり両端部で大きく外反するやや小型のものである。体部中位外面には13条の凹線文を施す。また、中位の最小径部分には大きめ円形スカシを4箇所と、その上の開く部分でやや小さめの円形スカシを4箇所交互に配置している。11は、脚部を欠損するが、低く大きく外反する形態は、一見すると壺の口縁部にも看取される。器壁は分厚く、口縁端部にかけてやや厚くなりながら外反する。口縁端部は、上端部が欠損するものの、上下方に拡張して面を成し、2条の擬凹線文と小ぶりの竹管文を施す。外面の括れ部には配列の

乱れた列点文を施し、口縁部内面には波状文を施す。また、口縁部付近には円形スカシを施す。12は、体部のみで形態等は不明である。薄い器壁の外面には、3条～数条の櫛描直線文と恐らく同一原体のもと考えられる刻み目列点文を施す。

環壕中層出土土器（13～25）

13は、壺の口縁部である。頸部以下が欠損しているが、比較的大型のものと考えられる。ラッパ状に開く口縁部は、端部で僅かに外反する。端部外面には断面三角形の粘土帯を貼付し、下方に拡張する事で面を成す。器面調整は磨滅により詳細不明だが、外内面共に縦方向を主体とする板ナデの痕跡が見える。胎土の特徴から讃岐系或いは河内系のものと考えられる。

14は、甕の口縁部である。屈曲部は緩やかな稜の「く」の字状を呈し、口縁端部は上方に若干摘み上げる。口縁部付近は横ナデで仕上げ、屈曲部以下の胴部内面は、器壁の状況から恐らくケズリ調整と考えられる。

15～22は、壺及び甕の底部である。15は、底薄の比較的小ぶりのもので、外面調整はナデで、内面調整は上方へのケズリである。器種は甕であろう。16は、指押さえにより若干上げ底気味の平底で、外内面共に指頭圧痕を残すが、内面には僅かにケズリの痕跡も看取される。器種は甕であろう。17は、小ぶりの平底からやや内彎気味に立ち上がるもので、内面には、指頭圧痕が残る。小型の壺と考えられる。18は、ラッパ状に立ち上がるもので、外面調整はナデで内面調整は底部付近を横方向、胴部にかけては縦方向を主体としたケズリが施される。器種は甕と考えられる。19は、やや丸みがかった平底で、全体がほぼ均一の厚みの大型器種である。外内面調整は磨滅により不明である。20は、底厚の平底である。外面はナデで、内面は磨滅で調整不明である。21も厚底の平底である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデで指頭圧痕を残す。器種は壺であろう。22は、丸みを帯びた平底で、やや厚みがある。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリか若しくは板ナデである。器種は壺である。

23は、脚部とも口縁部ともとれ、判断し難いものがあり、一応脚として図化している。器面調整は磨滅により不明である。24は、台付の壺か鉢の脚部である。脚端部には強いヨコナデによる沈線状の凹みがある。外面はナデ、内面はヘラケズリで調整する。25は、台付の壺か鉢の脚部であろうか、脚端部に向けてラッパ状に開く形態である。外面はタテハケの後に、端部付近をヨコナデで仕上げ、4条の沈線（或いは退化凹線）を施す。内面はナデである。

環壕下層出土土器（26・27）

26は、壺の底部であろう。外面はミガキの痕跡が見え、内面はヘラケズリである。27は高杯の口縁部である。強く屈曲した受け部は、僅かに外向きに立ち上がり、口縁端部で肥厚して面を成す。外内面は共に磨滅のため調整不明である。

環壕最下層出土土器（28～45）

28～33は、壺の口縁部である。28は、ラッパ状に外反し、口縁端部に断面三角形状の粘土を貼付することで、下方に垂下した様な形態を呈する。外内面は共にナデ及びヨコナデであろう。29は、直口気味の頸部から口縁端部にかけて大きく外反する。口縁端部は肥厚して面を成し、3条の凹線文を巡らす。外内面は磨滅のため調整不明ながら、同部内面に僅かなケズリ痕跡を残す。30は、直口気味の

頸部から大きく外反し、口縁端部で嫩形状に大きく垂下する。外内面は磨滅のため調整不明である。胎土の特徴から讃岐系或いは河内系と考えれる。31は、短い頸部から緩やかに外反し、口縁端部で上下に拡張して面を成すもので、端面には竹管文を巡らす。頸部外面には、刺突列点文が僅かに見える。外内面はヨコナデを主とし、ミガキも若干残る。32は、口縁端部が上下に強く拡張するもので、端面には竹管状の円形浮文を貼付する。外内面はナデ調整である。33は、頸部に貼付け凸帯を持つものである。外面は、ミガキの後に鋸描き直線文を施し、凸帯上にはキザミを巡らす。内面はナデで、胴部付近は板ナデ調整である。

34は、直口壺の口縁であろう。口縁端部付近で大きく外反するもので、器形の全体像があまり明確でない。外内面は共にハケメの後にナデである。

35・36は大型壺の上半部と下半部であるが、恐らく同一固体である。胴部は底部平底の扁倒形を呈し、強く窄まる頸部には屈曲部にキザミメを施す断面三角形の凸帯を貼付する。口縁部はラッパ状に開くのだが口縁端部の形状は不明である。外面には、上半部にヘラミガキが見え、内面にはヘラケズリが残る。胎土の特徴から讃岐系或いは河内系と考えられる。

37～39は、甕である。37は、「く」の字を呈する口縁部である。口縁端部は上方につまみ上げる形で肥厚する。外面はタタキの後にハケメ調整で、頸部付近に刺突列点文を施す。内面はヘラケズリを主体とする調整である。38は、残存状況が劣悪であるが、口縁端部が下方に拡張して面を成すものであろう。外面はタテハケ及びナデ、内面はケズリであろう。39は、「く」の字を呈す。口縁端部は上下に拡張し、面を成して2 条の凹線を巡らす。外面はハケメで、内面は横方向のヘラケズリ調整である。

40～45は、平底の底部である。40は、壺である。外面はナデ、内面はイタナデ調整である。41は、壺である。内面は剥離により調整不明だが、外面はヘラミガキ調整である。42は、壺であろう。外面はハケメの後ナデ、ミガキの痕跡も見える。43は、大型の壺であろう。外面はヘラミガキ、内面はナデである。44は、壺である。外内面は磨滅のため調整不明だが、恐らく外面にはミガキがあると考えられる。胎土の特徴から讃岐系或いは河内系と考えられる。45は、大型の壺であろう。外面は斜め方向を主としたナデ、内面はヘラケズリである。胎土の特徴から讃岐系或いは河内系と考えられる。

46は、壺の胴下半部で、扁倒形を呈する。外面はタテハケの後、底部付近にヘラミガキを加える。また、内面はヨコハケの後、底部付近に細かなヘラケズリを加える。非常に硬質で、調整等も他のものとも異質であることから、搬入品の可能性があるが特定出来ていない。

47～51は、底部である。47は、大型の壺であろう。外面はハケメの後にナデ、内面は磨滅のため調整不明である。48は、甕であろう。外面はタタキの後ハケメで、更にナデ調整である。内面は磨滅のため調整不明である。49は、小型の壺である。外内面は共に磨滅のため調整不明ながら、外面で僅かにハケメが見られる。50は、小型の壺であろう。底部はやや上底になっており、ナデ調整を施す。外面はタテハケで、指頭圧痕が残る。内面はナデであろう。51は、小型の甕であろうか、判然としない。外内面面は共にイタナデであろう。

52は、鉢である。口縁部はやや外向きに立ち上がり、口縁端部で若干肥厚する。外面は磨滅のため調整不明だが、内面は口縁端部付近に横方向のケズリが見られる他、部分的にミガキの痕跡も残る。

53・54は、高杯である。53は、屈曲してやや外向き立ち上がる口縁部である。外内面は共に磨滅のため調整不明である。54は、口縁の受け部である。口縁端部は肥厚して端面を成す。外面はヘラ描き沈線と棒状浮文を意識した凸部が見られる。内面はヨコナデである。

55は、高杯の脚部である。外内面は共にヨコナデで、端部に3条の擬凹線文を巡らす。

56～58は、器台である。56は、大きく外反して屈曲し、直口気味に立ち上がる形態を呈する。外内面は共にナデで仕上げ、端部外面には3条の凹線文上に3個1単位の二重竹管文を施す。また、内面にも二重竹管文を施す。57は、受部の口縁端部が大きく上下に拡張するものである。拡張した端部外面には3条の擬凹線文上に二重竹管文を施す。また、内面にも二重竹管文を施す。外内面は共にナデ調整であろう。58は、鼓胴形器台の胴部である。外内面は共に磨滅がひどく調整は不明であるが、外面の括れ部分には14条の凹線文を施し、裾部には推定6箇所の円孔を穿つ。また、胴部の一部には櫛描き列点文が見られる。

環壕内橋状遺構付近土坑出土土器（59～64）

59は、広口壺の上半部である。胴部は球形或いは楕円形を呈し、強く窄まる。頸部はやや開きながら直口に立ち上がり、口縁端部にかけて大きく外反する。口縁端部は、やや傾斜を持って肥厚して面を成す。端面上には2条の凹線文を巡らす。外面は縦方向を主とするヘラミガキ、内面は胴部中位付近を横方向の、頸部付近を縦方向のヘラケズリで調整する。

60・61は底部である。60は、小型の壺であろう。外面は磨滅のため調整不明だが、底付近に指頭圧痕が残る。内面は縦方向のヘラケズリ調整である。61は、比較的大型の壺である。外面は磨滅のため調整不明である。内面はイタナデであろう。

62は、高杯の脚部である。脚部は小径の裾部と円筒形の柱状部からなる。外内面は磨滅のため調整が分かりにくいが、外面は縦方向のヘラミガキとヨコナデである。内面にはシボリ痕が残る。また、裾部には6個の円孔を穿つ。胎土の特徴から讃岐形或いは河内系と考えられる。

63・64は、脚部である。63は小型の高杯か台付きの壺であろう。外面はハケメ調整だが、一部に指頭圧痕やタタキの痕跡が残る。内面はケズリであろう。また、一部に指頭圧痕が残る。64は、高杯か器台のようなものであろう。外面はハケメの後ナデ及びヨコナデで、裾部に4条の凹線文を施す。内面はイタナデであろう。

環壕出土土器一括（65～84）

65は、大型の器台である。大きく外反する受部は、端部でさらに垂下して面を成す。端面は4条の凹線文上に三重の竹管文を巡らす。外内面は共にヘラミガキである。

66は、壺の口縁部である。口縁端部は断面三角形状に垂下して面を成す。外内面は共に磨滅のため調整不明である。

67は、器台であろうか。受部はやや内彎気味に開き、端部で上下に大きく拡張して面を成す。端面には4条の凹線文を施す。外内面は共に横方向のヘラミガキを主とし、端部付近はヨコナデ調整である。

68～71は、広口壺の口縁部である。68は、外反しながら開き、端部で断面三角形状に垂下する。外内面は磨滅のため調整不明だが、恐らくナデを主とした調整である。胎土の状況から河内系とも考えられる。69は、大きく外反し、口縁端部で下方に垂下気味に肥厚する。外内面は磨滅・剥離のため調整不明だが、口縁端部付近はヨコナデである。70は、やや直口気味に立ち上がり、短く外反する。口縁端部は僅かに上下に拡張して面を成す。外内面は磨滅のため調整不明である。71は、短く外反しながら開き、口縁端部で若干上下に拡張して面を成す。端面には3条の凹線文を施す。外面はヘラミガ

キとヨコナデで、内面は残存する胴部をヘラケズリで、口縁部をヨコナデで調整する。

72は、器台の口縁端部であろう。外内面は共にヨコナデで、端面には4条の凹線文上に三重の竹管文を巡らす。

73は、壺の頸部である。外面は屈曲部で3条の凹線文を巡らし、その下に羽状の刺突列点文を施す。

74は、長頸壺の口縁部であろう。やや外反しながら直口する。外内面は磨滅のため調整不明である。

75～78は、底部である。75は、壺であろうか。外面はナデで、内面はケズリであろう。76は、甕であろう。外面はハケメで、一部指頭圧痕が残る。内面にはケズリが見える。77は、小型の壺であろうか。外面はナデで、内面はイタナデである。また、外面底には籾の圧痕らしきものが残る。78は、小型の壺である。外内面は磨滅・剥離により調整不明だが、ナデ調整が若干見える。

79・80は、高杯である。79は、屈曲してやや外傾気味に立ち上がる口縁部で、口縁端部で外側に肥厚して面を成す。外内面は共にヨコナデで、外面には2条の凹線文を施す。80は、屈曲して開きながら立ち上がる口縁部で、口縁端部で肥厚して面を成す。外面には1条の沈線上に、4個を1単位とする棒状浮文を貼付する。外内面は磨滅のため調整不明である。

81～83は、器台である。81は、器台の受部で、端部は上下に拡張して面を成す。端面には、2個1単位の円形浮文を一定間隔で貼付した後に、波状文を施す。外面は細かなハケメで仕上げ、内面は1条と3条の波状文の間に直線文を施す文様が見える。82は、受部端部が上方に拡張して面を成すもので、端面には3条の凹線文上に二重竹管文と羽状のキザミメ列点文を施す。外内面はナデ調整である。83は、器台の胴部から裾部であろう。全体のプロポーションが不明だが、器壁や調整、文様構成から器台としたが、大型壺とも考えられる。外面はヘラミガキの後に、12条の凹線文と三重竹管文を施す。内面はナデである。

84は、高杯の脚部である。脚部はラッパ状に開くものである。外面は裾部付近に縦、柱状部から杯部にかけて横方向のヘラミガキで仕上げ、11条の退化凹線文が巡る。内面は裾部にハケメが残り、柱状部にはシボリ痕が残る。

段状特殊遺構出土土器（85～130）

85～88は、広口壺である。85は、平底のほぼ球体の胴部に、直口気味の口縁部が付くものである。口縁部は頸部から大きく外反し、口縁端部で上方に拡張して面を成す。端面には3条の凹線文上に二重竹管文を施す。外面は縦及び斜め方向を主体とするヘラミガキで仕上げる。内面は、底部付近に縦、胴部に横方向のヘラケズリで、口縁部はヨコナデ調整である。86は、緩やかに屈曲する頸部に外反しながら開き、口縁端部で断面三角形状に下方に拡張して面を成す。外面は胴部を縦方向のヘラミガキ、頸部をタテハケで調整し、口縁部をヨコナデで調整する。内面は胴部をヘラケズリ、頸部をヨコハケで調整する。87は、壺の上半部であるが、球形の胴部にラッパ状に開く口縁部が付くものである。口縁部は大きく外反し、口縁端部も外側へ発達して面を成す。端面には3条の凹線文を施す。外面は縦方向を主体とするヘラミガキで、頸部の屈曲部付近にヘラ状工具による刺突列点文を施す。内面は胴部中位を縦、胴部上位を横方向のヘラケズリで調整する。口縁部はヨコナデであろう。88は、壺の上半部であるが、球形の胴部に、直口気味の口縁部が付くものである。口縁部は強く外反し、口縁端部で肥厚及び上方への拡張により面を成す。端面には3条の凹線文を巡らす。外面は胴部中位をヘラミガキで、胴部中位をタテハケで調整する。また、頸部付近にはハケ状工具による刺突列点文を施し、

頸部に5条の退化凹線文を施す。内面は胴部と横方向を主体とするヘラケズリで、口縁部はヨコナデであろう。

89は、広口壺の頸部である。外面はヘラミガキで、内面は横方向を主体とするヘラケズリである。

90は、小型の壺の口縁部である。口縁端部は上下に若干拡張して面を成す。端面には竹管文を巡らす。外内面は共にヨコナデである。

91は、把手付きの小型短頸壺である。外面はイタナデで、内面はヘラケズリとナデで調整し、口縁部には指頭圧痕が残る。

92は、ミニチュアの壺である。底部はやや上げ底で、短頸壺の様相を呈する。外面はイタナデを主体とし、内面にもナデで調整する。また、全体的に指頭圧痕が残る。

93は、長頸壺である。平底で球形の胴部には直口の口縁部が付き、口縁端部で丸くおさめる。外面は縦方向を主体としたヘラミガキを施し、口縁端部付近に4条の退化凹線文を施す。内面も縦方向を主体とするヘラミガキで、口縁部はイタナデのようである。94は、口縁部が欠損するが、長頸壺であろう。外面は胴下半部を縦、上半部を横方向のヘラミガキで仕上げる。内面は下半部をヘラケズリ、上半部を強いナデのようである。

95は、脚付き無頸壺の脚部である。脚はラッパ状に開き、上下2箇所の円孔を交互に6箇所穿つ。また、裾部には3条の凹線文を施す。外面は縦方向のヘラミガキで、内面は横方向のナデと指頭圧痕を残し、シボリ痕も残る。そして、壺内面はヘラケズリで仕上げるようである。

96～98は、脚付き無頸壺である。96は、脚付き無頸壺としたが、単独の器形は鉢に近い。脚部はラッパ状に開き、裾部で屈曲する。脚部には5箇所の円孔を穿ち、裾部に3条の凹線文を施す。上斑部は胴張りの鉢で、「く」の字状の口縁部に上方につまみ上げる口縁端部を持つ。口縁端部には2条の凹線文を巡らす。外面は縦方向のヘラミガキで、内面は脚部と胴部をヘラケズリで調整し、口縁部はヨコナデ調整である。97は、小径の裾部と円筒形の柱状部を持つ脚部に、胴部下位に最大径を持つ算盤玉状の無頸壺が付くものである。口縁部は欠損している。裾部は端部で僅かにつまみ上げ、端部付近に9箇所の円孔を穿つ。外面は磨滅のため調整不明である。内面は無頸壺の下半部をヘラミガキ、上半部をイタナデで調整する。98は、ラッパ状の脚部に下膨れの無頸壺が付くものである。口縁部は短く開く「く」の字状を呈する。脚端部はやや肥厚する。外面は縦方向を主体とするヘラミガキである。内面は無頸壺の下半部を横、上半部を斜め方向のヘラケズリで調整する。また、口縁部と脚端部はヨコナデである。

99・100は、無頸壺である。99は、平底に胴部中位に最大径を持つものである。口縁部は突起状の短いものである。口縁部付近には2個1単位の円孔を2箇所穿つ。外面は縦方向の微細なヘラミガキで、内面は横方向を主体とするヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデ、底部はナデ調整である。100は、口縁部と底部のみだが、図上で復元した。口縁部は、端部で粘土紐を折りこんで成形し、丸みを帯びたものである。また、口縁部付近には1個の円孔とその痕跡が1箇所見られる。口縁部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のイタナデである。底部は外面をナデ、内面をイタナデで調整する。

101～111は、甕である。101は、胴部上位に最大径があり、シャープな「く」の字状口縁部を持つものである。口縁端部は下方に若干肥厚して面をなし、2条の凹線文を巡らす。口縁部屈曲付近外面にはハケ状工具による刺突列点文を施す。外面は横方向のタタキを主体として、底部付近をイタナデで調整する。内面は横方向のヘラケズリである。102は、全体に細身で、胴の甘い「く」の字状口縁部を

持つものである。口縁端部は上下へ僅かに肥厚して面を成し、2条の凹線文を巡らす。外面はタテハケで仕上げる。内面は胴部下半部を縦、上半部を横方向のヘラケズリで調整し、口縁部をヨコハケ及びヨコナデで仕上げる。103は、甕の上半部で、強く屈曲する「く」の字状口縁部をもつものである。口縁端部は上方へつまみ上げて面を成し、端面で2条の凹線文を巡らす。外面はタタキの後イタナデである。内面は縦方向のイタナデである。また、口縁部はヨコナデである。104は、「く」の字状で短く開く口縁部である。口縁端部は上下へ僅かに拡張して面を成す。外内面は共にヨコナデで、外面には微かにタタキの痕跡が残る。口縁部の形態から脚付き無頸壺の可能性もある。105は、胴部上位に最大径がある比較的小型の甕である。口縁部は丸みのある、棱の甘い「く」の字状を呈する。口縁端部は僅かに肥厚して面を成し、3条の擬凹線文を巡らす。外面は縦方向のヘラミガキで、底部付近に指頭圧痕が残る。内面は下半部を斜め、上半部を横方向のヘラケズリで調整する。また、口縁部はヨコナデである。106は、甕の上半部である。口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部が僅かに肥厚する。外面はタテハケ、内面は縦方向を主体とするヘラケズリの後にナデである。また、口縁部はヨコナデである。107は、甕の上位で、強く屈曲する「く」の字状口縁部をもつものである。口縁端部は上方につまみあげて面を成し、3条の擬凹線文を巡らす。外面はタタキの後にナデで、内面は横方向のヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデである。108は、甕の上半部である。胴部中位に最大径があり、棱の甘い「く」の字状を持つもので、口縁端部は上方に肥厚して面を成して2条の擬凹線文を巡らす。外面はタタキの後にタテハケ、内面は縦方向のヘラケズリで、口縁部付近に指頭圧痕が残る。また、口縁部はヨコナデである。109は、胴部上位に最大径があり、口縁部が欠損する。外面は横方向のタタキの後に底部付近を縦方向のヘラミガキで調整する。内面は斜め方向のヘラケズリである。110は甕の胴部下位である。外面は縦方向を主体とするヘラミガキ、内面は斜め方向を主体とするヘラケズリである。111は甕の胴部下位である。外面は縦方向のヘラミガキで、底部付近に指頭圧痕が残る。内面は縦方向のヘラケズリである。

112～118は、底部である。112は、壺であろうか。外内面はイタナデで調整する。113は、甕であろう。外面はハケメの後にナデで、内面はヘラケズリである。114は、小型の壺であろう。外内面は共にナデである。115は、大型の壺であろう。外面はヘラミガキ、内面はヘラ状工具によるナデである。116は、小型の壺であろう。外内面はイタナデで、底部付近外面はヨコナデである。117は、小型の壺である。外面は縦方向のヘラミガキ、底部を強いイタナデで仕上げる。内面はヘラケズリである。118は、小型の甕か。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は不定方向のイタナデである。

119・120は、蓋である。119は、笠状の蓋だが、つまみのみである。外面はヘラミガキ、内面はナデである。120は、笠状の蓋である。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整で、口縁部付近に指頭圧痕が残る。また、口縁部付近には円孔を穿つ。

121～130は、高杯である。121は、屈曲して大きく外反する口縁部である。外内面は共にヨコナデであろう。122は、屈曲して直口気味に立ち上がる口縁部である。口縁端部は、外面で強いナデによる凹線を1条付す。外面はヘラミガキ、内面はヨコナデである。123は、脚の裾部が欠損しているが、ラッパ状の脚部に屈曲して直口気味に立ち上がる口縁部を持つ杯部が付くものである。口縁部は外面に5条の凹線文を巡らし、その上に棒状浮文を横した様な縦方向のヘラ描き暗文を施す。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は杯部の皿部を放射状のヘラミガキで、口縁部はヨコナデである。また、脚部内面はヘラケズリで、シボリ痕も残る。124は、ラッパ状に開く脚部に、屈曲して短く外反する口縁部を持

つ杯部が付くものである。脚の裾部には4箇所の円孔を穿ち、端部で強いナデによる1条の凹線を付す。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は杯部の皿部をイタナデで、口縁部はヨコナデである。また脚部内面はナデで、シボリ痕が残る。125は、口縁端部が欠損するがほぼ完形で、小径の裾部に円筒形の柱状部を持つ脚部に、屈曲してやや外反しながら直口する口縁部を持つ杯部がつくものである。口縁部には小振りの竹管文が（恐らく2個1単位で）巡り、口縁端部には現状で6箇所の楕円形の透かしと考えられる痕跡が残る。脚の裾部は上方に拡張して面を成し、8箇所の円孔を穿つ。外面は裾部から皿部まで縦方向のヘラミガキ、口縁部をヨコナデで調整する。さらに、外面には裾端部上と裾部（放射状）、柱状部と杯部の接合部から皿部（渦巻き状）、口縁部（円形列点文状）、そして口縁端部の楕円形状透かし部に赤色彩文を施す。内面は杯部の皿部で放射状のヘラミガキ、口縁部でヨコナデである。脚部はナデで、シボリ痕が残る。この高杯は、器形や彩文等の特異性から在地のものとは言い難いものである。吉備以西の影響の強い地域からの搬入品として捉えたい。126は、裾部が欠損するが、ラッパ状の脚部に無頸の鉢状の杯部が付く小型のものである。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は杯下半部で縦、上半部で横方向のヘラミガキで調整する。脚部はナデで、シボリ痕が残る。また、口縁部はヨコナデである。127は、裾部が欠損するが、円筒形の柱状部に浅い椀状の杯部が付く小型のものである。口縁端部はヨコナデによる沈線状の凹みを有す。外面は縦方向のヘラミガキで仕上げ、杯部（円形列点文状）と口縁端部の端面上に赤色彩文を施す。内面は杯部を放射状のヘラミガキで仕上げ、脚部はナデである。128は高杯の杯部で、屈曲してやや外反しながら直口する口縁部を持つものである。外面は脚付近を縦、皿部で横方向のヘラミガキで仕上げる。内面は横方向を主体とするヘラミガキである。また口縁部はヨコナデである。129は、高杯の脚部で、裾部は端部で上方に拡張して面を成し、柱状部は円筒形を呈する小型のものである。裾部は12箇所の円孔を穿つ。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデである。

130は、器台である。器形は鼓胴形であり、径が胴部よりも受部が勝るものである。受部の端部は外向きに垂下して面をなし、2条の凹線文上に三重竹管文を施す。裾部は僅かに肥厚して面を成す。外面は縦方向を主体とするヘラミガキで仕上げ、受部から裾部にかけて竹管文・15条凹線文・竹管文・4条凹線文の順に施す。またその後に胴部に4箇所、裾部に5箇所の円孔を穿つ。内面は上半部を縦方向のヘラミガキ、下半部を横方向のイタナデで調整する。器台における加飾性は、吉備等瀬戸内地域の影響を強く受けたものであろう。

竪穴住居出土土器

竪穴住居1（131～138）

131は、壺若しくは高杯の口縁部であろう。口縁部は緩やかに開き、口縁端部は、僅かに垂下し、面を成す。外内面共に磨滅が激しいが、ヨコナデであろう。

132は、完形の壺である。器形は大振りの安定した平底に、胴部上位に最大径を持つ卵倒形を呈する。口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部はやや丸みを持つ。外面は、上半部を斜め方向を主体とするタタキで、下半部をイタナデで調整する。内面は、上半部を横方向、下半部を縦方向を主体とするヘラケズリである。

133～135は、底部である。133は、球形の胴部を持つ長頸壺となろう。外面は底部付近をナデ、胴部はミガキのようである。内面はイタナデであろう。134は、外内面共にナデで、指頭圧痕が残る。器種

は不明である。135は、比較的大型の壺であろう。器形は小振りの平底に大きく開いた胴部をもつものである。外面は、底部付近をナデ、胴部付近を縦方向のヘラミガキで仕上げる。内面はイタナデである。

136・137は、高杯である。136は、脚裾部も口縁部も欠損しているものの、ラッパ状に開く脚に付く杯部は、やや内傾気味に屈曲する受部から、さらに外側へ屈曲する口縁を有するものである。受部外面には5条の凹線文を巡らす。外面は皿部付近の一部で横方向である以外は、全体に縦方向を主体としたヘラミガキである。内面は脚部をヘラケズリで、杯部にはミガキの痕跡が見える。137は、口縁部も脚部も欠損しているが、ラッパ状に開く脚に、屈曲して外傾しつつ立ち上がる杯部がつくものである。外面は縦方向のヘラミガキである。内面は脚部を横方向のイタナデ、杯部内面は磨滅のため調整不明である。

138は、高杯の脚部であろう。外面は磨滅のため調整不明である。内面は横方向のケズリで、端部付近はヨコハケが残る。

竪穴住居2〔139～142〕

139は、壺の口縁部である。やや屈曲気味に外傾する。口縁端部では上下方に拡張して面を成し、2～3条の擬凹線が巡る。外内面はヨコナデである。

140は、長頸壺の口縁部で、比較的大型のものである。直口に近びる口縁部は端部付近で微妙に内彎し、端部は丸く収める。外面は縦方向のヘラミガキで調整し　頸部にヘラ状刺突列点文を巡らす。また、口縁端部付近には退化凹線文の痕跡が窺えたが、図化までに至らなかった。内面は横方向のイタナデである。

141は、壺の底部である。外面は底部付近をヨコナデで、胴部にかけてナデである。また、内面はイタナデである。

142は、高杯の口縁部である。屈曲部を持つ口縁部は、やや外反しながら立ち上がり、端部で大きく拡張して上端に面を成す。外面には6条の凹線文を施す。外内面は共にヨコナデであろう。

竪穴住居3〔143～146〕

143は、広口壺の口縁部である。ラッパ状に開く口縁部は、端部で丸みを帯びた断面三角形状に垂下する。外面は磨滅のため調整不明だが、内面はヨコナデである。胎土の状況から河内系か讃岐系の可能性がある。

144は、小型の壺の口縁部であろう。器形はラッパ状を呈し、口縁端部にかけて大きく外反する。口縁端部は下方へ僅かに拡張し、やや丸みのある面を持つ。外内面は共に磨滅のため調整不明である。

145～148は、底部である。145、は壺であろう。小振りの底部はくびれを持たずに接地面付近から開く。外面はナデ、内面はヘラケズリである。146は、壺であろう。外面は縦方向のイタナデで、内面はヘラケズリの後にナデである。147は、非常に小型の壺若しくはミニチュア土器である。形態はやや上げ底で、胴部との接合部付近で大きく括れる。外内面は共に磨滅のため調整不明である。148も小型の壺若しくはミニチュア土器であろう。外面には若干ハケメが残り、内面はナデであろう。

竪穴住居5〔149～152〕

149は、壺或いは器台の口縁部であろう。口縁部はほぼ水平で、口縁端部では若干上下に拡張して面

を成す。端面には2条の擬凹線文を施す。

150は、小型の壺の下半部である。安定性の無い小振りの平底と半紡した鉋弾型を呈する。外面は縦方向のイタナデで、内面調整は不明だが、底部付近には指の圧痕が残る。

151・152は、底部である。151は、甕であろう。外面は磨滅のため調整不明で、内面はケズリ調整である。152は、小型の壺である。外面はイタナデで、内面は指頭圧痕が残る。

竪穴住居7（153～156）

153は、壺の口縁部である。屈曲して大きく外反する。口縁端部は上方に比較的強く拡張して面を成す。端面は5条の擬凹線文を巡らす。外内面は共にヨコナデである。

154は、壺の肩部である。外面は6条を1単位とする櫛描き波状文と直線文が交互に施される。

155・156は、底部である。155は、甕であろう。外面は底部付近に指頭圧痕が巡り、内面はイタナデである。156も甕であろう。比較的細身の器形である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は縦方向を主体としたヘラケズリである。

段状遺構出土土器

段状遺構1（157・158）

157は、壺或いは脚付き無頸壺の口縁部である。口縁部は「く」の字を呈し、口縁端部で微妙に拡張して面を成す。胴部外面は縦方向のヘラミガキで、内面は横方向のヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデである。

158は、小型壺の底部である。外内面は共に横方向を主体とする強いナデで調整する。

段状遺構2（159～163）

159～161は、壺の口縁部である。159は、広口壺である。器形は窄まり気味の頸部から大きく外反し、口縁端部で垂下して面を成す。端面には、2条の凹線文を巡らす。外面はタテハケで、内面は頸部付近でケズリの後ナデ、口縁端部付近は、粗いヨコハケで調整する。また、口縁端部はヨコナデである。160は、外反する口縁部に上下方へ僅かに拡張して面を成す。端面は2条の凹線文を施し、ヨコナデで仕上げる。161は、直口気味の口縁部に、端部で肥厚させて面を成す。外内面は共にヨコナデで仕上げる。

162は、甕である。口縁部形は不明である。胴部最大径は中位にあり、細身の卵胴形を呈する。外面はタテハケで、内面は斜め方向を主体としたヘラケズリを頸部付近まで施す。

163は、高杯の杯部である。器形は、皿部から直口に屈曲するもので、外面には3条の退化凹線文が巡る。内面は横方向のヘラミガキである。

段状遺構4（164～166）

164は、大型の広口壺の口縁部である。口縁部は、大きく外反し、口縁端部で断面三角形状に垂下して面を成す。端面には、3条の凹線文を巡らす。外内面は共にヨコナデである。胎土の状況から河内系或いは讃岐系の可能性がある。

165は、甕の口縁部である。口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部でやや肥厚する。外内面は共にヨコナデである。

166は、甕の底部であろう。外内面は共に磨滅のため調整は不明である。

段状遺構5（167）

167は、甕である。口縁部は短く延びる「く」の字状を呈し、口縁端部で下方に強く肥厚して面を成す。胴部外面はタテハケで、内面は横方向のヘラケズリである。また口縁部はヨコナデで仕上げる。

段状遺構6（168～176）

168・169は、広口壺の口縁部である。168は、頸部で屈曲して短く外反する口縁部で、口縁端部は上下に拡張して面を成す。端面は3条の凹線文を巡らす。外面はハケメの後ヘラミガキで仕上げる。内面は磨滅のため調整不明である。また、口縁部はヨコナデである。169は、緩やかに外反し、口縁端部はつまみ出すように上方へ拡張して面を成す。端面は3条の擬凹線文を巡らす。外面は、縦方向のヘラミガキで仕上げ、頸部に波状文を施す。内面は頸部付近まで斜め方向のイタナデで、それ以上は口縁端部にかけてヨコナデである。

170～174は、甕の口縁部である。170は、緩やかに屈曲する「く」の字状を呈し、口縁端部では若干肥厚して面を成す。外内面は共にヨコナデである。171は、緩やかに屈曲して僅かに外反する「く」の字状を呈する。口縁端部では上下方に拡張して面を成し、2条の凹線文を施す。胴部外面はハケメ調整で、内面はヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデである。172は、屈曲の緩い「く」の字状を呈し、口縁端部がやや肥厚するものである。胴部外面はハケメで、内面はヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデである。173は、やや直口気味に開くもので、口縁端部は若干肥厚して丸みを帯びている。胴部外面は縦方向のヘラミガキで仕上げ、内面はヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデである。174は、口縁端部が僅かに肥厚するものである。外内面は共に磨滅のため調整不明である。

175～184は、底部である。175は、甕である。外面はタタキで、内面はイタナデかヘラケズリであろう。176は、壺であろうか。外面はイタナデで、内面はヘラケズリである。177も壺であろう。外面はハケメで、内面はヘラケズリである。178も壺である。外面はナデで、内面は磨滅のため調整不明である。179も壺である。外面はハケメの後にナデで仕上げ、内面はヘラケズリである。180は、小型の壺である。外内面は共にイタナデである。181は、甕であろう。外面はナデで、内面はヘラケズリである。182も甕であろう。外面はイタナデで、内面はヘラケズリである。183は、壺であろうか。底部は高台状を呈する。外面はナデで、内面はヘラケズリである。184は、細身の底部で、安定性を欠くものである。外面はヘラミガキ状の調整ガ成される。形態はラッパ状に開く鉢の様なもの考えている。

185は、蓋である。形態は笠状を呈し、ツマミは平坦である。口唇部付近には1箇所の円孔を穿つ。外面は縦方向を主体とするヘラミガキで、内面は横方向のヘラミガキで仕上げる。また、口唇部はヨコナデである。

186は、口縁部のみで全体の器形は不明だが、鉢か高杯になると考えた。形態は、内傾に強く屈曲するものである。外面は横方向のヘラミガキで、内面はナデである。

187は、高杯の杯部である。皿部は僅かに内彎しながら開き、やや内傾に屈曲して立ち上がる。口縁端部は、外傾に屈曲して「逆L」字を呈する。口縁部外面は、4条の凹線文を巡らす。外面はヘラミガキ、内面はナデであろう。また、口縁部付近はヨコナデである。

188～190は、脚部である。188は、高杯である。脚端部は上下方に幾分拡張する。外面はヨコナデで、

内面はナデである。189も高杯であろう。脚端部は屈曲して垂下し、面を成す。端面上には3条の擬凹線文が巡る。外面は磨滅のため調整不明である。内面はヨコナデである。190も高杯である。脚部から脚端部には段を持って垂下する。外面はハケメで、端部付近はヨコナデである。内面は磨滅のため調整不明である。

段状遺構8（191）

191は、壺の下半部である。底部付近には焼成後の意図的な打ち掻きが看守される。外面は縦方向のヘラミガキで、底部付近は横方向を主体とするナデである。内面はヘラケズリと考えられる。

段状遺構9（192～195）

192は、無頸壺の範疇であろう。胴部中位に最大径を持ち、やや内湾しながら窄まる。口縁部外面には2条の凹線が巡る。外面はヘラミガキで、内面は横方向を主体とするヘラケズリである。

193は、甕の上半部である。口縁部はしっかりとした屈曲を持つ「く」の字状を呈し、端部では上方にやや肥厚する。胴部外面はタテハケで、内面は斜めから横方向にかけてのヘラケズリ、頸部付近には指頭圧痕も残る。また、口縁部はヨコナデである。

194・195は、底部である。194は、壺であろう。外面はイタナデであろう。内面はヘラケズリである。195は、高台状を呈する底部である。器壁が非常に薄いものである。外内面は共にイタナデで、底部はナデである。

段状遺構10（196・197）

196は、甕の上半部である。口縁部は「く」の字状を呈し、外反気味に開く。外内面は全体にハケメであるが、胴部内面には若干ヘラケズリの痕跡が残る。

197は、甕の底部であろう。外面はナデである。内面は磨滅のため調整不明である。

段状遺構11（198～201）

198・199は、壺の口縁部である。198は、大きく外反し、端部で上方に拡張する。外内面は共に磨滅のため調整不明である。199は、直口する頸部に大きく外反する口縁部を持つ。口縁端部はやや肥厚して面を成す。内面は横方向の強いイタナデである。外面は磨滅のため調整不明である。

200は、甕である。口縁部は棒の緩い「く」の字状で、口縁端部は僅かに肥厚する。胴部外面はタテハケ、内面はハケメの後ナデで、頸部付近には指頭圧痕も残る。また、口縁部内面はヨコハケである。201は、高杯の脚部である。ラッパ状に開く脚部は、端部で僅かに肥厚する。外面はヨコナデで、内面はヘラケズリである。

段状遺構12（202～210）

202・203は、壺の口縁部である。202は、緩やかに窄まる頸部から、大きく外反しながら開くもので、口縁端部は上方につまみ上げて面を成す。端面には2条の擬凹線を施す。頸部内面は横方向のケズリが残り、口縁部付近はナデである。また、外面は磨滅のため調整不明である。203は、直口気味の頸部から外反するものであろう。端部は僅かに上方につまみ上げて面を成す。外内面は共にヨコナデである。

204～206は、甕の口縁部である。204は、明確な稜の屈曲を持つ「く」の字状を呈し、口縁端部は上下方に拡張して面を成す。胴部外面はタタキ、内面はヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデである。205は、屈曲して短く開くものである。口縁端部は丸く収める。胴部外面はタテハケで、内面は横方向のヘラケズリである。口縁部はヨコナデである。206は、緩やかに屈曲し、短く開く口縁部である。口縁端部は肥厚して面を成し、3条の凹線文を巡らす。胴部外面はヨコハケ、内面は縦方向のヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデである。

207～209は、底部である。207は、甕である。外面はタテハケで、内面は縦方向のヘラケズリである。208は、壺であろう。外面はイタナデで、底部付近には横方向のナデが見える。内面は縦方向のイタナデである。209は、壺であろう。外面はイタナデで、内面はケズリであろう。

210は、高杯の脚端部である。端部は肥厚している。外面はナデで、内面はケズリが残る。

段状遺構15（211～213）

211は、壺の口縁部である。口縁端部は下方に肥厚して面をなし、3条の凹線文を施す。器面調整はヨコナデである。

212は、甕の底部であろう。外面はナデでタタキの痕跡が残る。内面はヘラケズリである。

213は、小型の壺等に付く脚部であろう。端部付近には僅かに段を持つ。外内面はヨコナデである。

段状遺構17（214～219）

214は、壺の口縁部である。垂下して面を成す口縁端部上には、竹管状の浮文を貼付している。

215は、壺の下半部である。胴部最大径を中位に持つ球形の壺で、恐らく長頸壺と考えられる。外内面は共に磨滅のため調整不明であるが、底部付近外面には僅かな指頭圧痕が残る。

216は、甕の口縁部である。明確な稜の屈曲を持つ「く」の字状口縁で、短く開く。外面はヨコナデで、内面はナデである。

217は、小型の壺の底部であろう。外面はタテハケで、内面はケズリであろう。

218・219は高杯の脚部である。218は、端部が上方に肥厚して面を成し、2条の擬凹線文を施す。外内面は共にヨコナデである。219は、ラッパ状に開く裾部を持つもので、脚端部付近に1条の沈線を施す。また裾部には推定4箇所の円孔を穿つ。外面は斜めから縦方向のヘラミガキを施し、端部をヨコナデ、内面はヘラケズリで調整する。

段状遺構21（220～228）

220は、壺の口縁部である。直口気味に立ち上がる頸部は、短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は僅かに肥厚して面を成し、2条の擬凹線文を巡らす。外内面は共にナデで、口縁部付近はヨコナデである。

221・222は、甕の口縁部である。221は、稜の緩い屈曲の「く」の字状で、口縁端部は若干肥厚する。胴部内面は横方向のヘラケズリで、口縁部付近はヨコナデ調整である。222は、比較的強く外傾して「逆し」字状を呈する。口縁端部は上方にやや肥厚する。内面はナデで、口縁部はヨコナデである。外面は磨滅のため調整不明である。

223は、壺の底部である。外内面は磨滅のために調整不明である。

224は、高台状の底部を持つ鉢の様な器形を考えた。現状では、製塩土器に最も近似すると理解して

いる。外面はイタナデで、内面にもイタナデの工具痕が残り、シボリメも残る。

225は、高杯の杯部である。接合痕から、柱状の脚部に粘土円盤を充填したものと分かる。外面はヘラミガキで、内面はナデである。

226は、高杯の脚部である。ラッパ状に開く裾部には、現状で円孔を1箇所確認できる。また、杯部との接合付近には3条のヘラガキ沈線が巡っている。外面は縦方向のヘラミガキで、内面は横方向のヘラケズリで、シボリメも残る。

227・228は、器台の受部である。227は、大きく外反する受部で、端部は上下方に拡張して面を成す。端面には、2条の擬凹線の間に波状文を施し、竹管文を施す円形浮文を貼付している。また、端部内面にも波状文を巡らす。内面にはヘラミガキが残る。228も端部が上下方に拡張するもので、端面には波状文の痕跡も見える。また、端部内面にも波状文を施す。内面は調整不明だが、外面はヘラミガキで仕上げている。

段状遺構23（229～242）

229～231は、壺の口縁部である。229は、広口壺である。大きく外反する口縁部は、端部で下方に肥厚する。外面はハケメの後ナデで、内面は磨滅のため調整不明である。230は、広口壺でも短頸のものである。緩やかに外反する口縁部は、下方へ若干拡張する端部を持ち、3条の擬凹線文を施す。外面はハケメの痕跡が見え、内面は磨滅のため調整不明である。また、口縁部はヨコナデである。231は、直口壺の口縁部であろう。やや外傾気味に立ち上がる口縁部で、端部は丸く収める。外面には4条の凹線文が巡るが、非常に浅い。外面はヨコナデで、内面の一部にはケズリの痕跡も見えるが、ナデで仕上げる。

232は、無頸に近い壺と考える。口縁部は窄まりもなく、僅かに外反するのみである。口縁端部は微妙に肥厚し丸く収める。外内面は共にイタナデであろう。

233～235は、甕である。233は、屈曲して短く開く「く」の字状口縁で、端部で上方へ拡張して面を成し、2条の擬凹線文を施す。外面及び口縁部付近はヨコナデである。胴部内面にはケズリが残る。234は、明確な稜の屈曲を持つ「く」の字状で、端部にかけて外反する。口縁端部はやや肥厚する。胴部外面は縦方向のイタナデで、内面は横方向を主体とするヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデである。235は、胴部上位に最大径を持ち、球体に近い形態を呈する。口縁部は、緩やかな稜の屈曲を持つ「く」の字状で、微妙に内彎しながら立ち上がる。口縁端部は僅かにつまみ上げて面を成し、2条の擬凹線文を施す。胴部外面は、タタキの後にナデで、ヘラ状工具による刺突列点文を施す。内面は斜め及び縦方向のヘラケズリで、口縁部付近はヨコナデで仕上げる。

236～239は、底部である。236は、壺であろう。外面は縦方向のヘラミガキで底部付近を横方向のナデで仕上げる。内面はヘラケズリであろう。胎土の状況から河内系のものと考えられる。237は、壺の底部である。外面はハケメの後にヘラミガキで、内面はヘラミガキである。238は、小型の壺であろう。外内面は共にイタナデである。239も小型の壺であろう。外面は縦方向のヘラミガキで、内面はイタナデである。

240は、ミニチュア土器である。緩やかに開く形態は鉢状を呈し、口縁部付近で微妙に外反する。外面は縦方向のユビナデ痕が残り、内面は底部付近に縦方向、それ以上に横方向のユビナデを施す。

241は、一見するとミニチュアの壺と考えていたが、それとはまた異なるものと判断した。不明土製品

としておく。外面は全体を丁寧なイタナデによって、面取り状の成形を施し、内面は不定方向のイタナデで仕上げている。

242は、高杯の杯部である。器形は、皿部で屈曲して外傾気味立ち上がるもので、端部で微妙に肥厚する。外内面は、共に磨滅のため調整不明である。

段状遺構24（244・245）

244は小型の広口壺の口縁部である。大きく外反する口縁部は、端部付近で上端に平坦面を持つ。口縁端部は僅かに肥厚して面を成し、3条の擬凹線文を施す。外面はハケメが残り、口縁部付近はヨコナデ調整である。また、内面は磨滅のため調整不明である。

245は、大型の壺の底部である。外面は縦方向のヘラミガキで、底部には板目の痕跡が残る。また、内面は磨滅のため調整不明である。

段状遺構25（243・246・247）

243は、壺の口縁部である。直口気味に立ち上がる頸部から外反するもので、端部は丸く収める。外内面は共にヨコナデであろう。

246は、小型の壺の底部である。外面はイタナデの痕跡が残る。また、内面は磨滅のため調整不明である。

247は、甕の口縁端部であろう。外傾する口縁端部は、上方に幾分拡張する。調整はヨコナデであろう。

段状遺構26（248～250）

248・249は、広口壺の口縁部である。248は、大きく外反する口縁部に、断面三角形状の端部を持つもので、端部外面には竹管文の痕跡を残している。外内面は共にヨコナデである。胎土の状況から河内系或いは讃岐系のものと考えられる。249は、緩やかに開く口縁部に断面三角形状の端部を持つもので、端部外面には、4条の擬凹線文状に二重の竹管文を施している。外面はヨコナデで、内面には一部ケズリの痕跡が残る。

250は、底部である。外面は縦方向のヘラミガキで、内面はヘラケズリである。

段状遺構27（251～257）

251は、広口壺の口縁部である。口縁部はやや直口気味に短く立ち上がる頸部から緩やかに外反するものである。口縁端部は若干肥厚する。外面は縦方向のヘラミガキで、口縁部から内面にかけてはヨコナデである。

252・253は、底部である。252は、甕である。外面は横方向を主体とするイタナデで、内面は縦方向のヘラケズリ調整である。253も甕であろう。外面は縦方向のイタナデで、内面は縦方向のヘラケズリである。

254は、小型の壺或いはミニチュア土器の底部である。外面はタテハケの後ナデで、内面は横方向を主体とするイタナデである。

255は、小型の高杯の脚部である。脚部は短く円錐状に開く柱状部に、屈曲して短く開く裾部を持つものである。柱状部外面は縦方向のイタナデで、裾部はナデである。また、内面は横方向のケズリが入る。

256は、甕の口縁部である。口縁部は、後の緩い「く」の字状を呈し、僅かに外反する。口縁端部は丸く収める。内面は横方向のイタナデで、口縁部付近はヨコナデである。頸部外面には指頭圧痕が若干残る。

257は、高杯の脚であろう。ラッパ状に開いた柱状部は、裾部で若干外反する。端部は丸く収める。外内面は共にナデであるが、調整が粗く、粘土接合痕が残る。

溝状遺構1出土土器（258）

258は、底部である。器種は壺であろうか。外面はタテハケで、底部付近には横方向の強いナデが入る。内面は磨滅のため調整不明である。

ピット等出土土器（259）

259は、脚部である。器種は高杯或いは脚付き無頸壺等が考えられる。ラッパ状に開く器形で、端部は肥厚せず丸く収める。外面はタテハケで、内面は横方向のヘラケズリである。

谷部落ち込み出土土器（260～275）

260は、広口壺である。頸部の屈曲部分は欠損しているが、ほぼ完形のものである。胴部最大径は上位にあり、肩張りのやや拉げた卵円形を呈する。口縁部は直口気味にやや外反しながら開き、口縁端部は上下方に肥厚して面を成す。端面には3条の擬凹線文を施す。胴部外面は中位から上位にかけて斜めまたは縦方向を主体とするハケメ調整で、底部付近は縦方向のヘラミガキで仕上げる。胴部内面は底部付近を縦方向、中位からは横方向のヘラケズリで調整する。また、口縁部は頸部外面にタテハケが残る以外はナデ、及びヨコナデ調整である。

261は、短頸壺と考えられる。胴部最大径は中位にあり、頸部の窄まりの小さい細身の卵円形を呈する。頸部はやや直口気味に立ち上がっているが、口縁部形態は不明である。外面は全体に横方向を主体とするタタキが残り、その後に縦方向のヘラミガキで仕上げるのだが、タタキが殆ど消されていない。内面は下半部を縦から斜め方向、上半部を横方向のヘラケズリで調整する。

262は、甕の口縁部である。口縁部は後の緩い屈曲で、短く開く。口縁端部は上下方に拡張して面を成し、3条の擬凹線文を巡らす。頸部外面はタテハケ、内面はヨコハケで、口縁部はヨコナデである。

263は、小型の壺であるが、細身の無頸壺の様なものとも考えられる。器形は最大径を上位に持つ卵円形を呈するが、やや歪んでおり、横断の形状は楕円形である。外内面は共に縦方向のイタナデを主体とし、部分的に強いユビナデの痕跡も見られる。

264は、壺の頸部である。直口気味に立ち上がる頸部外面には、ヘラ状工具による羽状の刺突列点文を施している。

265は、甕の口縁部である。後の緩い屈曲の「く」の字状口縁は短く開き、口縁端部で僅かに肥厚する。胴部外面はタテハケで、内面はヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデである。

266・267は、底部である。266は、甕であろう。外面はタテハケで、指頭圧痕も残る。内面は縦方向のヘラケズリである。267も甕であろう。外面は縦方向のヘラミガキで仕上げ、内面は縦方向のイタナデである。

268は、高杯の杯部と考える。受部は外面に強い後の屈曲を持ち、端部は強いナデにより微妙に外側

へ拡張する。外面には現状で1箇所棒状浮文を貼付している。皿部外内面は横方向のヘラミガキで、端部付近はヨコナデである。

269～273は、高杯の杯部である。受部は屈曲するもので、直口気味に開く。端部は僅かに外側に肥厚して上部に面を成す。外面には3条の凹線文を巡らす。外内面は共にヨコナデである。270も屈曲して直口気味に開くもので、端部は僅かに肥厚して丸く収める。外面にはタテハケが残るが、全体的にナデ及びヨコナデで仕上げる。271は、屈曲してやや外傾気味に開くもので、端部は丸く収める。皿部外内面は共にミガキである。口縁部付近はヨコナデである。272は、屈曲してやや外傾気味に開き、端部付近で僅かに外反する。端部は細身に丸く収める。外内面は共に磨滅のため調整不明である。273は、屈曲して僅かに外反しながら開くものである。口縁端部は強いヨコナデによりやや外側に突出し、その直下には凹線状の沈線が1条巡る。皿部外内面は共に放射状のヘラミガキで仕上げ、受部付近はヨコナデである。

274・275は脚部である。274は、高杯である。柱状部はラッパ状に開き、端部は丸く収める。外面は裾部付近をタテハケで、柱状部は縦方向のヘラミガキで仕上げる。内面は横方向のヘラケズリで、シボリメも僅かに残る。275は、高杯或いは脚付き無頸壺であろう。ラッパ状に開き、端部は肥厚せず、やや丸みを帯びる。裾部付近には3条の凹線文が巡る。外面は裾部付近をヨコナデで、柱状部にイタナデの痕跡を残す。内面は指頭圧痕が残る。

包含層出土土器（276～286）

276は、壺である。口縁部は、頸部の窄まりの緩い短頸のもので、短く外反する。口縁端部はつまみ上げて面を成す。外内面は共に磨滅のため調整不明である。

277は、大型の広口壺の口縁部と考えるが、器台の可能性もある。大きく外反する口縁部で、端部は下方に拡張して面を成す。端面には4条の凹線文を巡らし、竹管文を施す円形浮文を3箇所貼付している。外内面は共にヨコナデである。

278は、広口壺である。やや外傾気味に開く口縁部で、口縁端部は下方に肥厚する。外面はヨコナデで、内面には横方向のイタナデの痕跡が残る。胎土の状況から河内系のものと考えられる。

279は、甕である。口縁部は棟の緩い屈曲の「く」の字状を呈し、口縁端部はやや肥厚する。胴部内面は横方向のヘラケズリで、口縁部はヨコナデである。外面は調整不明である。

280は、壺の底部である。外面はナデで、底部付近は横方向のナデである。内面はイタナデである。

281は、大型の壺の下半部である。内面は斜め方向のヘラケズリである。外面は磨滅のため調整不明である。

282・283は、底部である。282は、高台状の上げ底を成すもので、壺に付くものと考える。外内面は共にナデ調整で、指頭圧痕が顕著に残る。283は、甕である。外面はナデ、内面はイタナデである。また、底部付近には、意図的なものか、断面方形の棒状のもので、焼成前にトンネル状の孔を穿っている。

284・285は高杯の杯部である。284は、直口に屈曲するもので、屈曲部では段を持つ。端部は外側に突出して、上部に面を成す。外面はヘラミガキで、受部内面はナデである。また、皿部内面は磨滅のため調整不明である。285は、屈曲してやや外傾気味に立ち上がるものである。端部は本来外側に突出するものと考えられるが、欠損している。外面には4条の凹線文が巡る。外面は横方向のヘラミガキが残るが、内面は剥離しており、調整不明である。

286は、器台の胴部である。裾部付近には円孔の痕跡が1箇所残る。外面にはクシ描き直線文とクシ状工具による刺突列点文が交互に施文される。

表採資料（287～293）

287・288は壺の口縁部である。287は、広口壺でも短頸のもので、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は若干上下方に拡張して面を成し、3条の擬凹線文を巡らすが、上端部は欠損している。外内面は共に磨滅のため調整不明である。288は、広口壺である。大きく外反する口縁部で、口縁端部は断面三角形状に下方へ拡張して面を成す。端面には3条の擬凹線文を巡らし、円形浮文を貼付する。外内面は共にヨコナデである。胎土の状況から河内系或いは讃岐系のものと考えられる。

289は、壺の底部である。底部は若干上げ底を呈する。外面はナデで、内面はイタナデである。

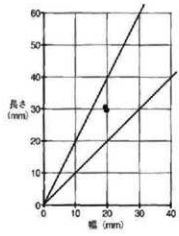
290は、高杯の脚部である。柱状部は円筒状で、屈曲して大きく開く裾部を持つ。外面には杯部との接合付近で4条のヘラ描き沈線文を施す。外面は縦方向を主体とするヘラミガキで、内面は横方向のケズリである。また、脚部上端には、粘土円盤の剥離痕が残る。

291は、器台であろう。大きく外傾して開く受部で、端部は下方に拡張して面を成す。端面にはヘラ状工具による綾杉状の刺突列点文を施す。外内面は共にヨコナデである。

292は、器台であろう。裾部は僅かに開き、端部は上方へ微妙に拡張して面を成す。胴部に円孔の痕跡が1箇所残る。外面には幅広のヘラ描き沈線文を3条施す。外面はタテハケ調整で、内面はナデである。

293は、円筒埴輪の一部のようである。外面には突出の小さい、「コ」の字状凸帯を貼付している。外内面はナデで仕上げているようだが、磨滅のため調整は殆ど不明である。埴輪については、以前この付近での採集があり、報告されており、埴輪を伴う古墳の存在を窺わせる資料である。

第2節　石器



第6図　石鏃の長さと幅

概要

石器は、おもに住居跡・壕溝から出土している。総数は少ない。以下、器種別にみていく。

武器・狩猟具

石鏃（図版32・写真図版54）

石鏃は2点出土している。すべて打製である。基部が緩やかに凹み、刃縁は外湾、逆剥の若干突き出す形態を呈する。調整は表裏から押圧剥離によってなされ、両面に一次剥離面を残す。最終的な剥離は両側とも主に裏側から施されている。（S1）の先端は折損しており、使用された結果と考えられる。

投弾（図版32・写真図版54）

弥生時代、とりわけ中期後半以降の集落より出土する、手に握り込める程度の大きさを持つ円礫は、しばしば投弾として報告され、武器の範疇で捉えられる。特に大量に準備されているような状況は、武器である可能性を強く示唆するものである。当遺跡では1点出土している。（S3）は凝灰岩の円礫で、楕円状の形態を呈し、ほぼ全面が摩滅している。敲打痕は認められない。表面は小単位の面がいくつも形成されるが、作業面と積極的に評価できるような一定の広さを持つ擦り面は認められない。この点から、いわゆる擦る道具として機能していたのではないものと判断した。

加工具・調理具

砥石（図版32・写真図版54）

総数で2点出土したうち1点を図化した。

（S4）石材は泥岩を用いており、細粒で非常に肌理が細かく、やや軟質のものである。仕上もしくは金属製品を研ぐことが、主な用途であると推察される。砥面は元来4面であるが、屑部を加工して利用しており、角柱状の形態を呈する。いずれの面もよく使い込まれている。屑部分に形成された曲には、整形時に削った痕跡が長軸方向に波打つように残る。また、砥面はいずれも研ぎ減りして凹んでいるが、中央部分は溝状にさらに強く凹むことが共通して観察される。線条痕は非常に強いものと、弱いものがある。一部に幅2mm、長さ2.9cmの規模で削ったような痕跡があり、断面は「レ」字形を呈する、鋭いものである。先述した屑部分に見られる加工痕と同様、金属製の利器によって形成されたものと思われる。

台石・石皿類（図版33～36・写真図版55、56）

掻ったり殻いたりするための作業台で、地面に掘えて使用したもの。6点出土しており、うち5点を図化した。石材は砂岩や凝灰岩を選択し、大型の川原石を利用している。手頃な大きさのものをそのまま使うタイプと加工して作業面を作り出すタイプの2者がある。6点中5点が住居跡床面からの出土であり屋内での作業に伴う作業台、とりわけ食料加工の機能が想定される。

（S5）形態は扁平な楕円形を呈する。表裏共に、面全体が大きく皿状に凹んでいる。特に裏側に顕著であるが、作業面から外れた屑部分に敲打痕が見られ、皿部および全体の作出作業との相関が注

意される。作業面には、表裏とも線条痕が顕著に認められるほか、使用による光沢が観察される。その他、側面及び肩部には断面U字状を呈する溝状の痕跡や、やや鋭い対象物が想起される横断面「レ」字形を示す線条痕が認められる。また、側面には一部平滑な面が形成されている。

（S6）作業を行ったと見られる面は1面あり、擦って形成された凹みと敲打痕が認められる。凹みの周辺では、細かな線条痕が観察される。裏側は粗割面であるが、風化や摩滅が認められないため二次的な成因が考えられよう。検出時は作業面を下にしていた。形状は直方体を呈し、小口面の一端は粗割面であるが摩滅が見られ、整形する目的で表面を研磨した可能性も考えられる。残りは自然面をとどめる。

（S7）河原石を粗割・整形して利用している。小口面の一端は粗割した面を平坦に加工している。表面は使用による凹みが見られ、擦って形成された線条痕がみられる。裏面は一見して平滑であるが、中央部に微かな凹みの発達が看取される。

（S8）破砕して出土した。火災による被熱のためと思われ、特に上半分は赤変が著しい。形態は直法体で、長軸を形成する4面全てが作業面である。原状を最もよくとどめている面を観察すると、面全体が船底状に強く凹んでおり、線状痕が長軸方向に平行して発達している。砥石として利用した可能性も考えられるが、ここでは台石・石皿類に分類しておく。

（S9）面全体が磨耗しているが、明確な砥面は形成されていない。線条痕、敲打痕などの使用痕も顕著にみられない。石材は硬緻な凝灰岩質のものを用いている。

楔形石器　両極からの加撃が認められる剥片。1点出土しているが図化はしていない。平面形は長方形を呈し、向かい合う長辺の縁辺にそれぞれ階段状剥離が認められるもの。背断面は持たない。

その他　軽石、サヌカイト剥片が各1点ずつ出土している。軽石は一方の面に平坦部分をもつ。

表2　出土石器一覧表

石器番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	出土地点	層位	石材	備考
S1	石鏃	29.6	19.6	5.9	2.5	環壕	下層	サヌカイト	金山
S2	石鏃	30.6	19.3	5.3	2.3	竪穴住居2	埋土	サヌカイト	金山
S3	投弾	57.1	42.8	39.7	125.2	竪穴住居1	埋土	凝灰岩	
S4	砥石	140.3	37.6	32.9	231.4	中央南斜面	包含層	泥岩	機械搬入
	砥石	63.6	58.9	12.7		溝状遺構11	埋土	凝灰岩	
S5	石皿・台石	282.8	178.8	58	4140	環壕	中層	砂岩	
S6	石皿・台石	240.1	156.1	97	5540	竪穴住居2	床面付近	砂岩	
S7	石皿・台石	225.7	192.7	67.5	3420	竪穴住居1	周壁溝付近	砂岩	
S8	石皿・台石	462	157.7	160.9		竪穴住居2	床面直上	砂岩	
S9	石皿・台石	396.9	184.4	108.0		竪穴住居1	床面直上	凝灰岩	
	石皿・台石	282	123.5	69.5		竪穴住居2		アプライト	
	楔形石器	49.6	30.5	10.5	18.0	環壕	上層	サヌカイト	金山
		132.4	82.2	39.2	100.0	遺構等無遺構	周壁溝内埋土	軽石	
	剥片	16.7	20.0	2.1	0.9	遺構等無遺構	土器群の下	サヌカイト	金山

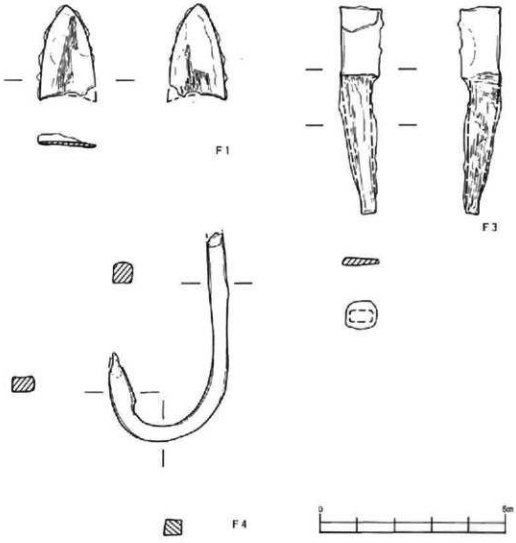
第3節　金属器

表山遺跡の金属器は、環壕内から2点、竪穴住居から1点、包含層から1点の、合計4点が出土している。その内、鉄器は3点、青銅器1点である。従って、個々の遺物の解説は、各地区・各遺構毎の単位ではなく、鉄器・青銅器のまとまりで述べる。

・鉄器（F1・F3～F4）

F1は、鉄鏃である。茎部は緩やかに回み、逆刺が僅かに突き出すもので、一方が欠損している。刃縁は比較的シャープであり、全体に偏平である。長さは2.55cm、幅は基部で1.55cm、厚さは0.35cmを測る。また、表面中程には両面ともに木質が残る。

F3は、包含層出土で時期も不明だが、断面が平凸な部分では一方が刃部状の形態を持つことから刀子と考えられる。刀身は殆ど欠損しており、長さは不明である。幅も1.05cmを測るが、刃部を欠損



第7図　表山遺跡出土の鉄器

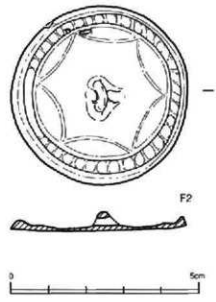
しており、明確でない。厚さは最大0.2cmを測る。また、把部も先端が欠損しており、長さが不明であるが、断面は0.35cm×0.85cmの長方形状であり、表面には木質が残っている。

Ｆ４は、竪穴住居２出土の釣針である。形状は「し」の字形を呈する。先端は若干尖っており、僅かに逆刺を持つ。鈎素を結び付ける受部は欠損しているが、長さ0.55cmで、全体の幅は3.2cmを測る。軸部は断面が一辺0.4～0.5cmの方形状を成し、逆刺部分は断面が0.4×0.65cmの長方形状である。

この釣針は、竪穴住居の出土であり、集落における生業のあり方を考える上で興味深い資料である。

・小形仿製鏡（Ｆ２）

Ｆ２は、青銅製の小形仿製鏡である。鏡は環壕東側の橋状遺構の床面付近から、鏡面を上にした状態で出土した。出土状況を見ると、橋状遺構の部材であったと考えられる炭化材が周辺で確認されているが、堆積の状況は炭化材が集積する層の直下であることから、炭化材を先の遺構の部材として認めて良ければ、橋状遺構が焼け落ちる以前に環壕内に廃棄されたと言える。従って、環壕がその機能を確実に果たしていた時期に入手し、その後環壕が埋没する直前に廃棄したものと考えられるのである。出土した小形仿製鏡は、質的に粗悪であった事に加えて鋳による劣化が著しく、非常に脆いものであった。また、鋳上がりについても、湯回りの不良から生じたと思われる２つの小孔からも粗悪であったと考えられる。



第８図　環壕出土小形仿製鏡

鏡の面径は4.75cm、鈕座の径は不定ながら約1.3cm、高さは0.55cmを測る。鈕は断面形状が蒲鉾形を呈し、鈕孔は一方が広い。

鏡背の文様は、鋳上がりの問題か、それとも鋳型の問題か非常に明確さを欠く。外縁部は断面三角形状を基本とするが、部分的にやや丸みを持つ箇所もある。外縁部の内側には斜行鋸歯文、その内側に１条の圏線が巡る。中央にはやや歪んだ鈕を持つ。鈕と圏線との間は、肉眼では明確でないが、X線の映像などから半肉上の段を有す内行花文が僅かながら見て取れる。内行花文は推定で、６箇所の弧状文様を配すと考えるが不明な部分が多い。鏡表面は、鏡背・鏡面共に淡緑色の緑青が見えるが、鏡背は明赤褐色の部分が多い。これは、鏡鋳造後に塗布したものとみられ、僅かに剥離した赤色粒を分析したところ、鉄の成分が非常に高い値を示した。分析資料はあまり良好なものではないが、鉄分が赤色顔料との関係を憶測するものと考えてよければ、ベンガラ等を想定しても良いと考える。

第5章　池ノ内群集墳の調査

第1節　位置と環境（写真図版58・第9図）

池ノ内群集墳は、神戸市西区伊川谷町上脇字表山に所在する。昭和43年に分布調査が行われ、6基の古墳の存在が確認されている。しかし、現況は樹木の繁茂や土取りによる地形改変が著しいため、調査当時には5基しか確認できなかった。

群集墳は明石川の支流伊川右岸の、伊川と水井谷川に挟まれた北東から南西方向へ伸びる丘陵の主尾根から南へ派生した支尾根上に位置する。群集墳はその支尾根上のおよそ15×60mの範囲に分布する。群集墳の位置する標高は60～80mを測る。現在の水田との比高差は約20～40mである。

池ノ内群集群からの眺望は南と東に大きく開けており、伊川流域の平野から遠く淡路島まで見渡すことができる。

伊川流域の古墳は中流域西岸の丘陵上に集中する。中でも伊川谷町上脇には、北から柏ケ谷群集墳（2）、池ノ内群集墳（5基）（3）、水呑谷群集墳（3基）（4）、中ノ谷群集墳（5）、谷ノ上群集墳（6）と群集墳が集中する。池ノ内群集墳以外は発掘調査されておらず詳細はわからないが、総数20基前後になるものと考えられる。いずれも5世紀末～6世紀前半に築造され、埋葬施設に木棺直葬を採用するものと考えられている。群集墳はそれぞれの尾根ごとに名称が付けられているが、各群集墳を支群と考えて「上脇古墳群」とでも総称できそうな分布状況を示す。

伊川右岸の山裾には、弥生時代後期から飛鳥時代まで続く上脇遺跡（12）、古墳時代初頭の池上北遺跡（13）がある。また、伊川左岸の河岸段丘上には古墳時代中期から後期の長坂遺跡（15）、古墳時代中期の池上口ノ池遺跡（16）などが知られている。池ノ内群集墳のすぐ山裾の上脇遺跡は、弥生時代後期から飛鳥時代まで連綿と継続する集落遺跡である。上脇遺跡は古墳時代を通じて集落は営まれており、平成5～8年の調査で古墳時代前期の竪穴住居跡3棟、同中期の竪穴住居跡26棟と掘立柱建物跡2棟、同後期の竪穴住居跡8棟と掘立柱建物跡3棟が検出されている。上脇遺跡と池ノ内群集墳は密接な関わりあるものと考えられ、上脇遺跡は池ノ内群集墳の被葬者の母集落である可能性が高いものと考えられる。

第2節　調査の概要（図版37）

今回、5基で構成される池ノ内群集墳のうち4基を調査した。ただし、2・3号墳は工事予定地の範囲内に墳丘の大半が含まれるものの、一部が工事予定地の範囲外のため、その部分は現状で保存し、工事で破壊される範囲のみを全面調査した。したがって、古墳を全掘できたわけではない。同様の理由で4号墳は工事予定地の範囲の墳丘裾部のみを調査し、墳丘の大半は現状で保存した。

また、今回工事予定地の範囲外である5号墳についても踏査を行ったので、その成果を表面採集した遺物とともに今回報告する。

なお、古墳の番号は調査した順に順次振り付けたものである。将来的には再度整理する必要があると思われるが、今回の報告では調査時点での古墳番号を踏襲する。

1　柿谷古墳群　2　柏ヶ谷群集墳　3　池ノ内群集墳　4　水呑谷群集墳
5　中ノ谷群集墳　6　谷ノ上群集墳　7　鬼神山古墳群　8　鎌谷群集墳
9　サブカゼ古墳群　10　天王山古墳群　11　白水瓢塚古墳　12　上脇遺跡
13　池上北遺跡　14　小寺遺跡　15　長坂遺跡　16　池上口ノ池遺跡

第9図　周辺の古墳時代の主要な遺跡　S=1/25,000

第3節　池ノ内1号墳

1．立地および墳丘（図版38・39・写真図版59）

池ノ内1号墳は北東から南西方向へ伸びる丘陵の主尾根から南へ派生した支尾根が南東方向へ向きを変えて二股に分岐する地点に位置する。1号墳は、池ノ内群集墳中で最高所に位置し、標高80～81mを測る。群集墳の範囲の中では最西端に位置する。

墳丘西側は土取りで大きく削平され崖面となっており、墳丘の概ね1/5を失っている。また、墳丘の流出が著しく、残存状況は非常に悪い。

墳丘はあまり明確ではなく、裾部で推定径8m前後を測り、平面形は円形を呈する。墳頂は径5m前後の不整形な円形を呈する。墳丘の高まりは明確には認められない。墳頂の標高は最高80.72mである。墳頂から墳裾の比高差は、墳丘北側、南側ともに約0.2mを測る。墳丘盛土は全く認められない。墳裾を削り出したような痕跡が一部墳丘東側に認められるが、明確ではない。周溝は確認できない。地山の削り出しのみで墳丘を造成したものと考えられる。

2．埋葬施設（図版42・写真図版59）

墳丘中央で埋葬施設を1基検出した。墳丘の流出が著しく墓壙しか確認できなかった。また、墓壙中央から南東にかけて攪乱のため墓壙の南東隅は明確でない。主軸はN60°Wである。検出した標高は80.6mである。

墓壙はやや細長い隅丸の長方形を呈する。規模は、主軸上で長辺3.65m、中心部で短辺0.72mを測る。検出面から墓壙の底までの深さは北小口付近で約0.1m、南小口付近で約0.2mを測る。墓壙の底は北小口から南小口にかけて傾斜する。北小口と南小口の比高差は約0.3mである。

3．出土遺物

墳丘、主体部ともに遺物は全く認められなかった。

4．小結

池ノ内1号墳は、推定径8m前後の円墳である。墳丘は地山を削り出して造成されたものと考えられる。埋葬施設は棺の痕跡を確認することができなかったが、墓壙の形状から割竹型木棺が埋葬されていた可能性も考えられる。

出土遺物は全く認められず、築造時期は不明である。ただし、群集墳中最も良い位置を占地する、墳丘を削り出し造成する、割竹型木棺を埋葬していた可能性がある、全く須恵器を持たない、といった点から群集墳中で最初に造営された古墳である可能性が高いものと考える。

第4節　池ノ内2号墳

1．立地および墳丘（図版40・41・43・写真図版60）

池ノ内2号墳は、1号墳の立地する南へ伸びる支尾根の分岐点から南東方向に派生する尾根筋に立地する。水平距離で1号墳の約18m南東に位置する。標高は71～72mを測る。1号墳との比高差は約

9mである。2号墳の南東約8m下方には3号墳と5号墳が位置する。

墳丘は調査区の制約で、約1/8が調査区外となっている。墳丘の流出が著しく、残存状況は悪い。

検出した墳丘は裾部で径7～8mを測り、平面形は円形を呈する。墳頂は径5m前後の円形を呈する。墳丘の高まりは明確には認められない。墳頂の標高は最高71.8mである。墳頂から墳裾までの比高差は、墳丘北側で約0.3m、南側で約0.2mを測る。墳丘流出により盛土は確認できなかったが、本来は周溝と墓壙を掘った際土で盛土していたものと考えられる。しかし、周溝を部分的にしかめぐらさない事、墓壙は地山を比較的深く掘り込む事などから、さほど高い盛土があったとは考えにくい。1号墳と同じく地山の削り出しで墳丘を造成したものと考えられる。

墳丘北から東にかけて弧状にめぐる周溝を検出した。周溝は検出長約6m、検出面で幅1m前後、底で幅0.6m前後を測る。深さは最大0.3mを測る。断面は逆台形を呈する。墳丘北西上方の尾根筋側に墳丘を区画する溝は存在しない。墳丘を整形するように墳丘の北東部分のみ尾根を削り込む。墳丘の北西上方には背後の斜面を削り込んで平坦面を造成した弥生時代の竪穴住居跡が存在する。墳丘造成時にこの平坦面を利用したため、墳丘の斜面上方を大きく削り込む必要がなかったものと考える。

2．埋葬施設（図版44・写真図版61・62）

墳丘中央やや北西よりで埋葬施設を1基検出した。検出した標高は71.7mである。主軸はN47°Eである。掘葬方法は木棺を直葬するものである。

墓壙は隅丸の長方形を呈する。規模は、主軸上で長辺2.55m、中心部で短辺0.80mを測る。検出面から墓壙の底までの深さは約0.3mである。墓壙の底はほぼ平坦である。

木棺はそれ自体は残存していなかったが、埋土の状況からその痕跡が認められた。木棺は墓壙の掘り方東よりで検出された。主軸は墓壙と同一である。規模は主軸上で長辺1.99m、北側小口で0.63m、南側小口で0.56mを測る。検出面からの棺の底までの深さは約0.3mである。検出した棺の形状から箱型木棺であったと考える。また、棺の小口幅は北側の方が広いことから、北に頭位を向けたものと推測される。

3．遺物の出土状況（図版43・写真図版62・63）

遺物は木棺内、周溝および墳裾から出土している。出土した遺物は、土器、鉄器、玉類である。

木棺内からは鉄器（F5）と玉類（J－1～14）が出土している。

刀子（F5）は、棺の中央東北よりの床面上から出土した。刀子の切っ先を北に向ける。北に頭位を向けたものと推測されるため、刀子は遺体の左腰付近に切っ先を頭位に向けて置かれたものと考えられる。

ガラス小玉（J－1～14）の出土状況は明らかでなく、棺内北半の埋土であることしかわからない。棺内の埋土を現地から持ち帰り、水洗した際に見つかったものである。

周溝内からは土器（294～305）が出土している。須恵器の杯5セット（294～303）と甕（304）は、周溝の底部から一括で出土している。302と303は他の一括遺物のやや上位から出土し、出土状況の図面からもれている。周溝の埋土は、黄褐色の細砂から粗砂である。

また特異な遺物の出土状況として、土師器の椀（305）が須恵器の杯のセット（298、299）の中から入れ子の状態で出土している。

墳裾からは須恵器の甕（306）が出土している。甕は墳丘南側の墳裾のテラス状のやや平坦面から、0.4×0.5m前後の平面形が楕円形の掘り方に側面を下にした状況で出土している。掘り方の深さは約0.2mで、約0.1m明黄褐色粘質細砂を入れた後、甕を据えている。甕は本来正位に座っていた可能性も考えられるが、甕の底部の破片が完全に揃わないことなどから、その可能性は低いものと考える。

4．出土遺物（図版51・52・写真図版68・69）

（1）埋葬施設の遺物

玉類（巻頭図版8・表5）

ガラス小玉（J－1～14）が木棺内から14点出土している。直径は2.5～4.1㎜、厚さは1.5～3.7㎜、孔径は1.1㎜前後、重量は0.02～0.08gを測る。色調はJ－3が群青色を呈し、他は濃青色を呈する。

金属器

刀子（F5）が木棺内から出土している。F5は刀身（F5-a）と縁金具（F5-b）から成る。F5-aは先端を欠損しており、残存長7.55cm、刃部の最大幅1.9cm、背幅0.6cmを測る。関部は両関で、関幅1.75cmを測る。茎部には木質が遺存し、茎長4.9cmを測る。F5-bの平面形は卵形を呈する。刃部側に目釘を通す。縁金具の大きさから幅2.4cm、厚さ1.5cmの木柄が復元できる。

（2）周溝出土の遺物

須恵器

蓋杯が5セット一括で出土している。294と295、296と297、298と299、300と301はセットになった状態で出土している。

杯蓋（294、296、298、300、302）が5点出土している。口縁部での径は12.6cm前後、器高は4.7cm前後である。天井部と体部を分ける稜線は退化してにぶく、凹線状になるもの（296、300）もある。口縁端部はいずれも内面に段を持つ。天井部のヘラ削りは、天井部の器高の1/2～1/3である。298は299とセットで杯蓋に利用されているが、本来は高杯の蓋であろう。

杯身（295、297、299、301、303）が5点出土している。口縁部での径は10.8cm前後、器高は4.6cm前後である。口縁部の立ち上がりは、内傾して端部で垂直気味に立ち上がるもの（295、301、303）とやや内傾するもの（297、299）がある。口縁端部は内面に段を持つもの（297、299、301）と丸いもの（295、303）がある。底部は丸く仕上げるもの（295、299）と比較的平坦なもの（297、301）がある。底部のヘラ削りは、底部の器高の1/2～1/3である。

鉢（304）が1点出土している。口縁部は一旦外湾した後、段をつくって外上方にほぼ真っ直ぐのびる。頸部には細かい櫛描き波状文をめぐらす。体部はほぼ球形をなし、底を丸く仕上げる。肩部に沈線をめぐらし、その直下に列点文を1～2㎜間隔でめぐらした文様帯を持つ。体部下半から底部に板ナデの痕跡が残る。

土師器

椀（305）が1点出土している。粘土紐を巻き足して、手づくね成形したものである。外面は磨滅のため調整は不明である。内面は下半を板状工具でかき上げている。内面下半には底部を中心に放射状の工具痕が残る。

（3）墳裾出土の遺物

須恵器の甕（306）が1点出土している。口縁部は欠損している。底部はやや尖る。外面は縦方向の平行タタキ、内面は同心円文のタタキが認められる。

5．小結

池ノ内2号墳は、径7～8mの円墳である。墳丘は主に地山を削り出して造成したものと考えられる。周溝は墳丘北から東にかけて認められる。埋葬施設は木棺を直葬するものである。

木棺内から鉄器（刀子）とガラス小玉が、周溝から須恵器が出土している。出土した須恵器は、田辺編年（田辺1966、1981）のTK47型式の新しい時期に併行するものと考える。したがって、古墳の築造時期は6世紀初頭から前半と考えたい。

特異な遺物の出土状況として、土師器の椀が須恵器の杯のセットの中から入れ子の状態で出土している。これは、葬送儀礼を行った際の土器を片付けて、周溝に置いたものと考えられる。同様の例は、西神N.T.第12－3地点遺跡でも認められる（神戸市教育委員会1989）。西神N.T.第12－3地点遺跡は明石川中流左岸の段丘上に立地する6世紀初頭の古墳である。入れ子状態の遺物はその墳頂から出土している。2号墳とほぼ同時期の古墳であり、土師器の椀を須恵器の杯のセットの中に入れ子にするといった行為は単なる葬送儀礼後の土器の後片付けではなく、明石川流域の共通の葬送祭祀の一端を示すものかもしれない。

また、墳裾部のテラス状になった平坦面に甕を据える例は、西神N.T.第42地点遺跡でも認められる（神戸市教育委員会1987）。西神N.T.第42地点遺跡も同じく明石川中流左岸の段丘上に立地する5世紀末の古墳である。埋葬施設は箱型木棺を直葬するものである。西神N.T.第42地点遺跡では、墳裾のテラス状平坦面からほぼ完形に復元できる甕が2個体、正位で胴部の半ば埋めて据えた状況で検出されている。葬送儀礼に伴う施設（遺物）であると考えられており、2号墳の墳裾の甕も同様のものと思われる。

第5節　池ノ内3号墳

1．立地および墳丘（図版40・41・45・46・写真図版64）

池ノ内3号墳は、2号墳と同じ尾根筋の南東方向約8m下方に位置する。標高は、67～69mを測る。すぐ北東側には3号墳と周溝を共有するように5号墳が存在する。

墳丘は調査区の制約で、約1/5が調査区外となっている。墳丘南側は土取りのため大きく損なわれており、残存状況は悪い。

検出した墳丘は裾部で径8m前後を測り、平面形は楕円形を呈する。土取りにより墳丘の残存状況は悪いが、墳頂は径6m前後の円形を呈するものと推測される。墳頂の標高は最高68.8mである。墳頂から墳裾までの比高差は、墳丘北側で約0.6m、南側で約0.3mを測る。

墳丘盛土は最大0.4mである。断面観察から、斜面上方の北側から土を積み上げて構築している事が確認できる。なお、盛土下層（図版46、11・12層）は弥生土器を含む遺物包含層である。

墳丘北側を弧状にめぐる周溝を検出した。周溝は検出長で約9m、検出面での幅は最大3m、底での幅は1m前後を測る。深さは最大0.6mを測る。断面は逆台形を呈する。

墳丘構築にあたって、墳丘の北西斜面上方を大きく削り込み、平坦地を造成し、その廃土を用いて

墳丘盛土を築くものと考えられる。

2．埋葬施設（図版47・写真図版64・65）

墳丘中央北西よりで埋葬施設を1基検出した。検出した標高は68.7m前後である。主軸はN60°Eである。埋葬方法は木棺を直葬するものである。

墓壙は隅丸の長方形を呈する。ただし、墓壙中央から南側にかけて土取りによる削平をうけて、墓壙の南隅は明確でない。規模は、主軸上で長辺2.18m、中心部で短辺1.41mを測る。検出面から墓壙の底までの深さは約0.3mである。墓壙の底はほぼ平坦である。

木棺はそれ自体は残存していなかったが、痕土の状況からその痕跡が認められた。木棺は墓壙の中央で検出された。主軸は墓壙と同一である。棺中央から南側にかけて土取りによる削平をうけて、棺の南隅は明確でない。規模は主軸上で長辺1.77m、西側小口で0.92mを測り、東小口は1m前後と推定される。検出面からの棺の底までの深さは約0.2mである。検出した棺の形状から箱型木棺であったと考える。頭位は不明である。

また、棺内中央で0.3×0.8mの範囲で赤色顔料の痕跡が認められる。

3．遺物の出土状況（図版45・写真図版65）

遺物は木棺内、墓壙内木棺外、墳頂および周溝から出土している。出土した遺物は、土器と石製品である。

木棺内から須恵器の蓋杯1セット〔307、308〕、杯身1個体〔309〕と米粒状土製品が出土した。蓋杯と杯身は木棺中央南側の床面直上から逆位で出土している。枕に使われていた可能性も考えられる。もし枕であるとすると、頭位は南向きとなり、検出した棺の南側板に接して遺体は置かれたことになる。

米粒状土製品は棺内の埋土を水洗したところ見つかったもので、出土状況は明らかでない。

墓壙内木棺外からは須恵器の短頸壺〔310〕が出土している。短頸壺は東小口よりの南側板南脇から逆位で出土している。

墳頂からは須恵器の横瓶〔311〕が出土している。横瓶は表土直下からばらばらに破砕された状況で出土している。

周溝内からは土器と石製品（S11）が出土している。出土した土器は、須恵器の蓋杯5セット〔312～321〕と脚〔323、324〕2点、そして甕〔325～327〕3点である。

蓋杯4セット〔312～319〕と脚〔323〕は周溝底から一括で出土している。その一括遺物のやや西側で脚〔324〕が正位で出土している。蓋杯のセット〔320、321〕は周溝の底から約25cm上で出土している。特筆すべき点は、320は杯身の立ち上がり部分を打ち欠いて蓋に転用していることである。320、321は、一括遺物の出土する堆積（第46図第5層）より上位の堆積（第46図第4層）からの出土で、周溝がある程度埋没した後、墳頂から転落した可能性が考えられる。甕〔325〕も同じく上位の堆積（第46図第4層）からの出土である。甕はばらばらに破砕された状況で出土している。杯蓋〔322〕と甕〔326、327〕は表土から周溝の上層埋土（第46図第1、3、4）の出土である。

石製紡錘車（S11）は土器群東側の周溝底直上から出土している。

4．出土遺物（図版52～54・写真図版70～72）

（1）埋葬施設の遺物

須恵器

杯蓋（307）が1点出土している。308とセットになるものである。口縁部の径は14.7cm、器高は5.0cmである。天井部と体部の間に弱い凹線がめぐる。口縁端部内面に段を持つ。天井部のヘラ削りは、天井部の器高の約1/2である。

杯身（308、309）が2点出土している。口縁部の径は12.6cm前後、器高は4.9cm前後である。口縁部の立ち上がりはいずれも内傾する。口縁端部は丸くおさめて面をなさない。底部は丸く仕上げる。底部のヘラ削りは、底部の器高の約1/2～1/3である。

短頸壺（311）は直線的に上方に短く立ち上がる口縁を持つ。口縁端部は丸い。体部下半をヘラ削りで仕上げる。底部は平坦である。

米粒状土製品

米粒を模したと考えられる土製品である。長さ5㎜前後、幅2㎜前後のものが大半である。色調は黒褐色を呈する。

（2）墳頂の遺物

須恵器の横瓶（311）が出土している。外面は平行タタキで、内面は同心円文タタキで仕上げている。体部中央に縦方向にカキ目をめぐらした後、口縁を成形している。口縁は、外側に開く。口縁端部は玉縁状を呈する。

（3）周溝の遺物

須恵器

蓋杯が5セット一括で出土している。312と313、314と315、316と317、318と319、320と321はセットになった状態で出土している。

杯蓋（312、314、316、318、322）が5点出土している。口縁部での径は14.9cm前後、器高は4.5cm前後である。天井部と体部を分ける稜線は退化してにぶい。口縁端部はいずれも内面に段を持つ。天井部のヘラ削りは、天井部の器高の1/2～1/3である。

杯身（313、315、317、319～321）が6点出土している。口縁部での径は13.3cm前後、器高は5.2cm前後である。口縁部の立ち上がりはいずれも内傾する。口縁端部は内面に段を持つもの（315、317）と丸くおさめて面をなさないもの（313、319、321）の二種類がある。底部は平坦で、全体として偏平な印象を覚える。底部のヘラ削りは、底部の器高の2/5～1/3である。なお、321は口縁部立ち上がりを打ち欠いて蓋に転用した個体である。

壺（323、324）が2点出土している。323は肩部がやや張り、底部はやや尖る。324は体部は丸く、底は平坦で、頸部に細かい櫛描き波状文をめぐらす。いずれも、体部には装飾を持たず、底部はヘラ削り成形したのち、ナデで再調整する。

甕（325～327）が3点出土している。325は口縁部と体部下半が欠損する。外面は縦方向の平行タタキ、内面は同心円文のタタキが認められる。内面のタタキはナデ消して、同心円文のタタキの痕跡が薄く残る。326は頸部よりド、327は頸部より上を欠損する。いずれも外面は縦方向の平行タタキ、内面は同心円文のタタキが認められる。

石製品

滑石と思われる石製紡錘車（S11）が1点出土している。断面は台形を呈する。上径1.7cm、腹径4.1cm、底径4.0cm、高さ2.1cm、孔径0.8～0.9cmを測る。

5．小結

池ノ内3号墳は、径約8mの円墳である。墳丘は斜面上方を大きく削り込み、平坦面を造成し、その廃土を盛土に用いて墳丘盛土とするものである。埋葬施設は木棺を直葬するものである。

木棺内、墓壙内木棺外、墳頂、周溝から須恵器が出土している。また、周溝から石器（紡錘車）が出土している。出土した須恵器は、田辺編年（田辺1966、1981）のTK47型式からMT15型式の時期に併行するものと考える。したがって、古墳の築造時期は6世紀前半と考えたい。ただし、甕（326）は内面の同心円文をナデ消しており、当該時期の須恵器の甕としては古い様相を示している。

周溝からは甕が3個体、ばらばらに破砕されたような状態で出土している。周溝の底より上位から出土しており、古墳を築造した後、周溝がある程度埋没した時点で、何らかの墓前祭祀が行われたことを示すものと考えられる。

また、杯身の口縁部立ち上がりを打ち欠いて、蓋に転用した個体が認められる。杯身を蓋に転用してまで蓋杯のセットにすることに、何らかの意義が認められる。

来紋状土製品は、兵庫県内では辺間古墳群（朝来郡山東町）やケゴヤ古墳（城崎郡城崎町）で確認されている（山東町教育委員会・武庫川女子大学考古学研究会1979、城崎町教育委員会1987）。ともに横穴式石室を埋葬施設とする古墳である。辺間古墳群の報告では、石室内での祭祀、具体的には黄泉国の食事「ヨモツヘグイ」と関連する遺物である可能性を示唆している。今回は出土状況が明らかでなく、他の類例の増加を期して検討したい。

第6節　池ノ内4号墳

1．立地および墳丘（図版48・写真図版66）

池ノ内4号墳は、3号墳・5号墳と同じ尾根筋の南東方向約23m下方に位置する。標高は、60～62mを測る。池ノ内群集墳の範囲の中では最東・南端に位置する。

墳丘の大半は工事予定地の範囲外のため、調査は南西側の墳裾断面を観察したにとどまる。墳丘西側は、地滑りにより墳裾の一部が失われている。また、地形測量を行ったが、4号墳の墳丘付近は樹木の繁茂や伐採した木の集木のため、十分な測量図を作成できなかった。

墳丘は裾部で径12～13mを測ると推定できる。平面形は円形を呈する。墳頂は径8m前後の円形の平坦面が認められる。墳頂の標高は最大62.4mを測る。墳頂から墳裾までの比高差は、墳丘北側で約0.3mを測る。

断面観察によると、墳丘盛土は最大0.4mである。盛土は斜面上方の北側から土を積み上げて構築している事が確認できる。

墳丘北側で弧状にめぐる周溝を確認できる。周溝の幅は検出面で2m前後、底で0.5m前後を測る。深さは、断面観察で最大0.5mを測る。

墳丘構築にあたって、墳丘の北側斜面上方を大きく削り込み、平坦地を造成し、その廃土を用いて

墳丘盛土を築くものであろう。

なお、遺物は全く出土していない。

2．小結

池ノ内4号墳は、径12～13mの円墳である。墳丘は斜面上方を大きく削り込み、平坦面を造成し、その廃土を盛土に用いて墳丘とするものである。埋葬施設は不明であるが、他の古墳と同じく木棺直葬であると考えられる。

遺物は全く出土していないため、時期は不明である。

第7節　その他の遺構

ＳＴ1、2の2基は、古墳の調査終了後、遠山上で弥生時代の遺構面精査時に検出された遺構である。調査前には墳丘状の高まりなどは全く確認できなかった。

1．ＳＴ1（図版49・55・写真図版67・72）

ＳＴ1は、池ノ内2号墳の立地する尾根筋の東側斜面に立地する。2号墳からは南方向約8m下方に位置する。

検出した標高は約69.8m前後である。主軸はN84°Wで、等高線に平行して設けられている。急な斜面に立地するため、斜面下方の南側は大きく流出している。平面形は不整形な細長い隅丸長方形を呈する。規模は、主軸上で長辺2.98m、中心部で短辺0.60mを測る。検出面から床面までの深さは0.2～0.4mである。床面はほぼ平坦である。

遺物は床面上から出土している。出土した遺物は、須恵器の杯身4点（328～331）である。

328は土坑の中央東よりで、329は土坑の中央でほぼ正位に出土している。330、331は土坑の中央西よりで、側面を下にして立った状態で出土した。

出土遺物はいずれも杯身である。口縁部の径は12.8cm前後、器高は4.6cm前後である。口縁部の立ち上がりはいずれも内傾する。口縁端部は丸くおさめる。底部は平坦気味である。底部のヘラ削りは、底部の器高の2/3～1/3である。

2．ＳＴ2（図版50・写真図版67）

ＳＴ2は、池ノ内1号墳の立地する尾根の鞍部から南東方向に伸びる尾根筋の約18m下方に位置する。木棺を直葬し埋葬施設としている。

検出した標高は約75.6mである。主軸はN53°Eで、等高線に平行して設けられている。急な斜面に立地するため、斜面下方の南側は大きく流出している。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、主軸上で長辺2.23m、中心部で短辺1.07mを測る。検出面から床面までの深さは0.35mである。床面はほぼ平坦である。

木棺はそれ自身は残存していなかったが、埋土の状況からその痕跡が認められる。木棺は墓壙のほぼ中央で検出された。主軸は墓壙と同一である。規模は、主軸上で長辺1.96m、西側小口で0.45m、東側小口で推定0.65m前後を測る。検出面から床までの深さは0.2m前後である。検出した棺の形状から箱型木棺であったと考える。また、西側小口が大きいことから、西に頭位を向けたものと推測する。

なお、遺物は全く出土していない。

3．小結

ＳＴ1出土土器は、出土状況や埋土の堆積状況から、木の蓋の上にあった土器が、蓋の腐食による陥没で転落したような状況が考えられる。ＳＴ1は木蓋土坑墓であった可能性が考えられる。また、出土した須恵器は、田辺編年（田辺　1966、1981）のＴＫ10型式の時期に併行するものと考える。したがって、古墳の築造時期は6世紀半ばと考えたい。

ＳＴ2のように古墳の位置する尾根筋から離れた急斜面に埋葬施設を築く例は、西神N.T.第11地点遺跡などでも確認されている（神戸市教育委員会1989）。明石川流域の同時期の墓域でも認められ、例外的な例ではないと考えられる。このような斜面に位置し、墓壙以外地山を整形しない埋葬施設は、調査前には全く認識できない。今後、古墳の調査時に調査区を設定する上で、尾根筋だけでなく、斜面にも留意する必要がある。なお、ＳＴ2は出土遺物が全くなく、時期は不明である。

第8節　池ノ内5号墳

1．立地および墳丘（図版37）

池ノ内5号墳は今回の工事予定地の範囲外に位置し、全面調査の対象となっていない。

今回の3号墳の調査時に、5号墳の墳丘裾部から土器を表面採集した。採集した土器と5号墳の現況観察を以下に紹介する。

池ノ内5号墳は、2号墳と同じ尾根筋の南東方向約8ｍ下方に位置する。標高は67～69ｍを測る。5号墳のすぐ南西側には3号墳が存在し、周溝を一部共有する。

踏査の結果、墳丘は裾部で径8～9ｍと推定できる。平面形は円形を呈する。墳頂は径4ｍ前後の円形の平坦面が認められる。墳頂から墳裾までの比高差は、墳丘北側で約0.5ｍを測る。墳丘は北側斜面上方を大きく削り込んで平坦地を造成し、その廃土を用いて墳丘盛土を築くものであると推定される。

墳丘北側には、墳丘北半を弧状にめぐる周溝が認められる。周溝は墳丘南西側で3号墳と共有しているが、共有部分は調査範囲外のため築造時期の前後関係は不明である。

2．出土遺物（図版55・写真図版72）

墳丘裾部で採集した土器は、須恵器の杯身（332）である。

332は完形である。口縁部の立ち上がりは内傾して端部で垂直気味に立ち上がる。口縁端部はまるくおさめる。底部はやや尖りぎみである。底部内面には、線刻で蘗のようなものが描かれている。

3．小結

出土した須恵器は、田辺編年（田辺1966、1981）のＭＴ15型式の時期に併行するものと考える。したがって、古墳の築造時期は6世紀前半と考えたい。埋葬施設は不明であるが、他の古墳と同じく木棺直葬であると考えられる。332の杯身底部内面の線刻はヘラ記号というよりも落書きのようなものではないかと考える。

(参考文献)

城崎町教育委員会　1987　『上山・ケゴヤ古墳』

神戸市教育委員会　1987　『昭和59年度　神戸市埋蔵文化財年報』

神戸市教育委員会　1989　『昭和61年度　神戸市埋蔵文化財年報』

山東町教育委員会・武庫川女子大学考古学研究会　1979『西谷古墳群・迫間古墳群』

田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』

田辺昭三　1981　『須恵器大成』

表3　池ノ内群集墳調査一覧表

番号	墳丘		埋葬施設			出土遺物					備考
	墳形	規模	種類	墓壙規模	掘規模	棺内	棺外	墳頂	墳裾	周溝	
1	円	径8	木棺	3.65×0.72	不明	なし	なし	なし	なし	なし	
2	円	径7～8	木棺	2.55×0.80	1.99×0.63	鉄器 ガラス玉	なし	なし	須恵器	須恵器 土師器	
3	円	径8	木棺	2.18×1.41	1.77×0.92	須恵器	須恵器	須恵器	なし	須恵器 石製品	棺内に赤色顔料。
4	円	径12～13	－	－	－	－	－	－	－	－	埋葬施設未調査。
5	円	径8～9	－	－	－	－	－	－	須恵器	－	未調査。遺物は表面採集。

※単位は m

表4　池ノ内群集墳出土土器観察表

番号	出土地点	器種	器形	法量	回転	調整	備考
294	2号墳周溝	須恵器	杯蓋	11.85 3.4	右	外：回転ヘラ削り(1/3)、回転ナデ 内：回転ナデ	295とセット 焼け歪み
295	2号墳周溝	須恵器	杯身	9.9 4.85	左	外：回転ヘラ削り(1/2)、回転ナデ 内：回転ナデ	294とセット 焼け歪み
296	2号墳周溝	須恵器	杯蓋	13.65 5.9	右	外：回転ヘラ削り(1/3)、回転ナデ 内：回転ナデ	297とセット
297	2号墳周溝	須恵器	杯身	12.0 4.05	右	外：回転ヘラ削り(1/2)、回転ナデ 内：回転ナデ	296とセット 焼け歪み
298	2号墳周溝	須恵器	杯蓋	12.05 5.1	右	外：回転ヘラ削り(1/2)、回転ナデ 内：回転ナデ	299とセット 高杯蓋？
299	2号墳周溝	須恵器	杯身	10.35 4.75	左	外：回転ヘラ削り(1/3)、回転ナデ 内：回転ナデ	298とセット 焼け歪み
300	2号墳周溝	須恵器	杯蓋	13.0 4.4	－	外：回転ヘラ削り(1/2)、回転ナデ 内：回転ナデ	301とセット 焼け歪み
301	2号墳周溝	須恵器	杯身	11.1 4.9	左	外：回転ヘラ削り(1/3)、回転ナデ 内：回転ナデ	300とセット 焼け歪み
302	2号墳周溝	須恵器	杯蓋	12.5 (4.2)	右	外：回転ナデ 内：回転ナデ	303とセット
303	2号墳周溝	須恵器	杯身	(11.1) (3.75)	左	外：回転ナデ 内：回転ナデ	302とセット
304	2号墳周溝	須恵器	甕	10.5 11.7	－	外：底部から体部下半ヘラ削り 内：回転ナデ	
305	2号墳周溝	土師器	甑	8.8 3.35	－	外：磨滅により不明 内：上半はハケ状工具でかき上げ、下半は放射線状の暗文	298・299の入れ子
306	2号墳墳丘	須恵器	甕	－ (39.5)	－	外：縦方向の平行タタキのち平行カキ目 内：同心円文タタキ	
307	3号墳棺内	須恵器	杯蓋	14.7 5.0	左	外：回転ヘラ削り(1/2)、回転ナデ 内：回転ナデ	308とセット
308	3号墳棺内	須恵器	杯身	13.0 4.95	左	外：回転ヘラ削り(1/3)、回転ナデ 内：回転ナデ、仕上げナデ（一方）、同心円文タタキ目痕	307とセット 焼け歪み
309	3号墳棺内	須恵器	杯身	12.35 4.8	左	外：回転ヘラ削り(1/2)、回転ナデ 内：回転ナデ、同心円文タタキ目痕	
310	3号墳墓壙内	須恵器	短頸壺	7.85 8.15	左	外：底部から体部下半回転ヘララ削り 内：回転ナデ	蓋の痕跡
311	3号墳墳丘	須恵器	横瓶	(12.4) 27.7	－	外：平行タタキのち縦方向カキ目 内：同心円文のタタキ	
312	3号墳周溝	須恵器	杯蓋	15.4 5.2	右	外：回転ヘラ削り(1/2)、回転ナデ 内：回転ナデ、仕上げナデ（一方）	313とセット 焼け歪み
313	3号墳周溝	須恵器	杯身	(12.6) 5.1	左	外：回転ヘラ削り(2/5)、回転ナデ 内：回転ナデ、仕上げナデ（一方）	312とセット
314	3号墳周溝	須恵器	杯蓋	15.35 4.5	左	外：回転ヘララ削り(1/2)、回転ナデ 内：回転ナデ、仕上げナデ（一方）	315とセット 焼け歪み
315	3号墳周溝	須恵器	杯身	12.85 5.15	左	外：回転ヘラ削り(2/5)、回転ナデ 内：回転ナデ	314とセット
316	3号墳周溝	須恵器	杯蓋	13.55 3.9	右	外：回転ヘラ削り(1/3)、回転ナデ 内：回転ナデ、仕上げナデ（一方）	317とセット
317	3号墳周溝	須恵器	杯身	13.2 5.0	左	外：回転ヘラ削り(1/3)、回転ナデ 内：回転ナデ、仕上げナデ（二方）	316とセット
318	3号墳周溝	須恵器	杯蓋	15.2 4.85	右	外：回転ヘラ削り(1/2)、回転ナデ 内：回転ナデ、仕上げナデ（一方）	319とセット
319	3号墳周溝	須恵器	杯身	13.8 5.4	左	外：回転ヘラ削り(1/3)、回転ナデ 内：回転ナデ、仕上げナデ（一方）	318とセット
320	3号墳周溝	須恵器	杯身	－ (3.7)	－	外：磨滅により不明 内：磨滅により不明	321とセット 蓋に転用
321	3号墳周溝	須恵器	杯身	13.2 5.4	左	外：回転ヘラ削り(1/2)、回転ナデ 内：回転ナデ	320とセット

番号	出土地点	器　種	器形	法量	回転	調　整	備　考
322	3号墳周溝	須恵器	杯蓋	(14.9) 4.2	右	外：回転ヘラ削り(1/3)，回転ナデ 内：回転ナデ，仕上げナデ〔一方〕，同心円文タタキ目痕	焼け歪み
323	3号墳周溝	須恵器	甕	11.3 12.65	－	外：底部ヘラ削りのちナデ 内：回転ナデ	
324	3号墳周溝	須恵器	甕	11.7 14.5	－	外：底部から体部下半ヘラ削りのちナデ 内：回転ナデ	
325	3号墳周溝	須恵器	甕	－ (44.3)	－	外：体部縦方向の平行タタキ，頸部ナデ 内：同心円文タタキのちナデ消し	
326	3号墳周溝	須恵器	甕	(22.5) (9.7)	－	外：体部平行タタキのちカキ目，頸部ヨコナデ，口縁部回転ナデ 内：同心円文タタキ，頸部から口縁部回転ナデ	
327	3号墳周溝	須恵器	甕	(27.4) (45.7)	－	外：体部平行タタキ，頸部から口縁部回転ナデ 内：同心円文タタキ，頸部から口縁部回転ナデ	
328	ＳＴ1	須恵器	杯身	12.9 4.75	左	外：回転ヘラ削り(2/5)，回転ナデ 内：回転ナデ，仕上げナデ〔一方〕	
329	ＳＴ1	須恵器	杯身	13.2 4.65	右	外：回転ヘラ削り(1/3)，回転ナデ 内：回転ナデ	
330	ＳＴ1	須恵器	杯身	12.5 4.05	左	外：回転ヘラ削り(1/4)，回転ナデ 内：回転ナデ，仕上げナデ〔一方〕	焼け歪み
331	ＳＴ1	須恵器	杯身	12.75 5.0	左	外：回転ヘラ削り(2/3)，回転ナデ 内：回転ナデ，仕上げナデ〔一方〕	
332	5号墳	須恵器	杯身	12.9 5.05	左	外：回転ヘラ削り(1/2)，回転ナデ 内：回転ナデ，同心円文タタキ目痕	底部内面に線刻

※法量の上段は口径、下段は器高、（　）の数値は上段が復元長、下段が残存長。単位はcm

表5　池ノ内2号墳棺内ガラス小玉一覧表

番号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色　調	番号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色　調
J-1	2.7	1.5	1.1	0.03	濃青色	J-8	2.5	1.9	1.1	0.03	濃青色
J-2	2.5	1.9	1.0	0.02	濃青色	J-9	3.2	2.7	0.9	0.05	濃青色
J-3	2.8	1.8	1.0	0.02	群青色	J-10	4.0	3.3	1.2	0.08	濃青色
J-4	3.5	2.3	1.2	0.05	濃青色	J-11	3.8	3.1	1.2	0.07	濃青色
J-5	3.8	3.1	1.1	0.06	濃青色	J-12	4.1	2.4	1.0	0.06	濃青色
J-6	3.1	2.3	1.0	0.02	濃青色	J-13	4.0	3.7	1.0	0.06	濃青色
J-7	3.2	2.2	1.2	0.02	濃青色	J-14	3.6	3.5	0.9	0.07	濃青色

第6章　自然科学分析

第1節　表山遺跡の炭化米粒特性と稲作起源

第6章は公開していません

第7章　まとめ

第1節　表山遺跡の位置づけ

・はじめに

今回の表山遺跡の調査では、兵庫県下では数少ない、環壕を伴う高地性集落を発見するに至った。壕を持つ高地性集落としては近隣の神戸市域が谷遺跡（後期）が上げられ(1)、また内陸部では独立丘陵において二重環壕を巡らす環壕集落として和田山町大盛山遺跡（後期）が知られる(2)。表山遺跡の環壕は、検出範囲としては末端部のみであり、その全貌は明らかでないが、調査区外の地形的状況は、大規模な環壕が同一等高線上を巡ることを十分に予測させるものである。このような集落の様相は、現段階の周辺集落において類を見ない異質のものといっても過言ではなかろう。

本稿では、発掘調査で得られた成果から、表山遺跡の地域的、時期的、及び性格的位置づけを行うこととする。

・遺跡の立地について

表山遺跡は、前述した通り明石川の支流の伊川右岸丘陵上の南向き斜面に位置する。集落を構える尾根上は、伊川の平野との比高差が遺構の最も低い所で25m、環壕を巡らす尾根の最も高い所で52mを測り、環壕内の高所では周辺の丘陵上を一目の下に確認できる眺望を有す。また、播磨灘においては、明石海峡の東側から大阪湾の一部が見える程度であり、中心となるのは伊川の平野を眼下に置き、西側に広がる丘陵上であるため、やはり伊川を境とした、それ以東の地域を意識した立地である。

・遺構について

検出した主な遺構は、環壕と環壕内の橋状遺構、また環壕で囲まれた内側の斜面地上で検出した段状特殊遺構を中心として、竪穴住居及び段状遺構、土坑を検出した。

環壕

環壕は、集落内にあって尾根筋部上に掘削され、ほぼその同一等高線上に巡っていると考えられる。ただし、調査区外の地形を細かく踏査すると谷に向かって急激に落ちていく斜面にあっては谷側の環壕の立ち上がりが確認されないことから、環壕が巡っていたとしても、現状では崩落しているものと考えられる。環壕は床面から環壕内側との比高差は約3.5mを測り、切り立った壁の様な状況にあり、普通に登るのは非常に困難であったろうし、その防禦性は高いものであった事は推察するに難はない。

そして、環壕の出入には橋状施設は不可欠であったろう。環壕の鞍部付近ではテラス状の張り出しと大型ピットを検出したが、大型ピットは橋状の施設を支える橋脚のようなものと考えられる(3)。橋状遺構付近にテラス状の張り出しを持つのは、高槻市古曽部・芝谷遺跡にも見られるが、恐らく同様の機能を有したものと考えられる(4)。橋状遺構の近辺には、こぶし大～人頭大の礫と炭化材がまとまって出土した。礫については、飛礫石と言う見解もあったが(5)、橋脚の補強などに用いられたものと考えている。また、炭化材は橋状施設の部材に使用されたものと考えており、これらの炭化材と、激しく被熱した大型ピット、更に焼土粒・炭粒等は、この施設が激しく焼け落ちたことを、如実に示すものである。

段状特殊遺構

さて、環壕の区画内の遺構で検出した段状特殊遺構は、隅丸方形状の掘形を残し、柱材の痕跡と考えられる炭化材の存在を以て、調査当時は竪穴住居という位置づけをしていた。しかし、大量の土器の一括廃棄状況と、人為的ともいえる焼失状況は、単なる居住施設とするには非常に違和感を覚えるものであった。段状特殊遺構の性格付けについては、未だ断定的な見解を出せずにいる。しかし、検出した地点が環壕に隣接することから、区画エリアの縁辺、つまり環壕内の中心施設から外れた場所に設けられていることを、考慮すべき点の一つと考える。段状特殊遺構における土器の一括廃棄は、周辺の状況から集落の最終時期と重なるものと考えられる。即ち、これは表山集落の終息を物語っていると言えよう。

竪穴住居

竪穴住居は、報告段階で7棟を示しており、環壕区画内に2棟（内1棟は焼失住居）、区画外の南斜面に5棟（内2棟は焼失住居）である。検出した竪穴住居の規模・形状は谷側が流失・削平などで、全体のプランを想定するには困難なものもある。言わば、土砂の流出が激しい急斜面上に形成された高地性集落通有の特徴とでも言うべきものだが、そのような条件下にあって、比較的規模・形状共に良く残っている住居を2棟検出している。2棟の竪穴住居は、南斜面のほぼ同一等高線上にあり、其々南側と東側に張り出す小尾根筋上の比較的平担な部分に選地している。

竪穴住居1は、直径6.5mの円形プランを呈し、床面から完形の甕と、有段高杯の一部、台石・石皿等が出土した。別項で記述した通り、床面の状況等からは祭と生活痕が見られず、居住期間が非常に短期であった事が想定出来る。

竪穴住居2は、谷側が流失しているが、直径8.4mのほぼ円形である。本住居跡は床面上に大型長頸壺の口縁部の他、大型の砥石・台石等が出土している。また、住居跡内からは比較的大振りの鉄製釣針も出土している。この住居は非常に激しく被熱する所謂焼失住居であり、その被熱の程度は高温の為に砕けた台石からも容易に想像出来るが、この様に祭と出土遺物を共伴しない検出状況からは、焼失をある程度予測し得たという可能性をも窺わせる。

段状遺構

段状遺構は、第3章第2節でも述べた通り、大きくA・B・Cの3タイプに分類される。段状遺構はほぼ等高線に平行する形で掘削されるが、ある一定の空間地をもって、一定の等高線上にベルト状に収束していることが分かる。これは、それぞれ別機能を持った段状遺構が、比高差の大きな集落内において、居住空間としてより効率的に展開した結果と考えられる。筆者は、推測ながら集落内の段状遺構群にはある程度の単位があると考えている。それらの機軸になるのは、尾根筋上で検出される竪穴住居である。竪穴住居を中心として段状遺構が形成される。従って、段状遺構の延長上には、竪穴住居が存在するのである。ここで、段状遺構3・14・17の延長上には竪穴住居は検出されていない。しかし、段状遺構27を検出した非常にフラットな面は、後世に池ノ内3号墳によって削平されており、竪穴住居の存在していた可能性が非常に大きく、段状遺構は高地の斜面地といった限定された立地条件における竪穴住居の補完的な施設になると考えられる。

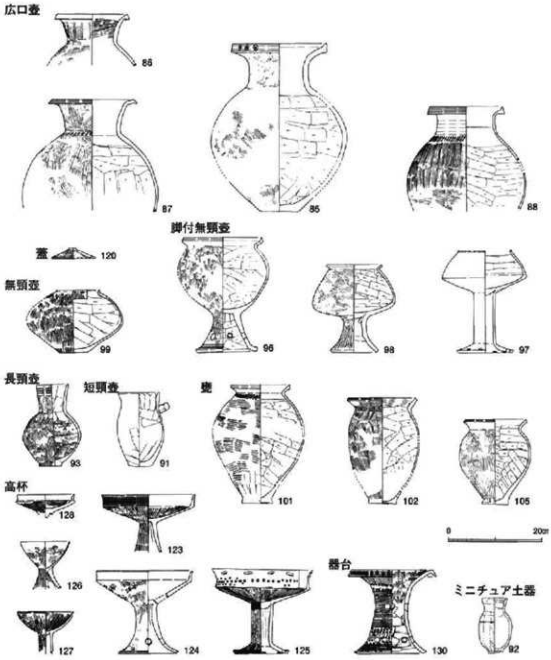
上記の事から推測すると、分類したB・Cタイプ等の居住施設の可能性を残す段状遺構は、竪穴住居に付帯する上屋施設を持つものであろう。また、Aタイプの場合は、遺構が大規模若しくは細長い状況を考えると、比較的多目的な部分であったり、やはり通路としての目的を持つことが大きいのではないかと考える。

・出土土器について

遺跡から出土した土器は、各遺構の床面直上出土のもの以外は、土砂の流入によるものが多い。その様な状況下で、環壕区画内で検出した段状特殊遺構は、土器の廃棄後人為的な燃焼により、遺構が廃絶している。土器は、その堆積状況から見ても、時間的な幅或いは差異が認められないことから、非常に一括性の高い資料であることは、揺るぎない事実である。

本稿では、段状特殊遺構出土土器を中心として、他の資料との比較を行う。

段状特殊遺構出土の主な土器群は、広口壺・長頸壺・短頸壺・無頸壺・脚付き無頸壺・蓋・甕・高杯・器台・ミニチュア土器等の器種に分類される。



第15図　環壕区画内段状特殊遺構出土土器

広口壺は、頸部が外反するものと、直口して大きく外反する口縁部を持つものと、大きく2つに分類される。

長頸壺は、球形の胴部で、明確な稜の屈曲を持ち、直口する口縁部がつくものである。

短頸壺は、明確な稜を持たず、外反する口縁部を持たないもので、片側に断面楕円形の把手を有す。無頸壺は、丸みのある算盤状で、口縁端部が短く屈曲するものである。端部付近には円孔があり、有蓋である。

脚付き無頸壺は、脚部と体部との組み合わせに若干のバリエーションが見られる。脚部はラッパ状を呈するものと、円筒形の柱状を呈するものがあり、体部は「く」の字状口縁部を有する鉢や、やや下膨れの体部を持つ無頸壺などが付く。

蓋は、突起状のツマミを持つ笠形のものである。端部に円孔を有す。

甕は、大きく外面調整で分類出来、横方向を主体とするタタキを施すもの、縦方向を主体とするヘラミガキを施すもの、縦方向を主体とするハケメを施すものに分かれる。

高杯は、大型・小型共に脚部と杯部との組み合わせで若干のバリエーションが見られる。脚部はラッパ状を呈するものと、円筒形の柱状を呈するものがある。杯部は有段のものと、鉢状を呈するものがあり、大型は有段タイプが主流で、小型は鉢状タイプが主流である。

器台は、小型化傾向が強く、また、裾部より受部の径が上回るものである。体部に擬凹線文を多用して、口縁部及び裾部付近には竹管文を施すなどの加飾をしている。

ミニチュア土器は、楕円球形状の胴部に短く外反する口縁部を有する壺形のもので、段状特殊遺構内の土器群の中で、層位的に最も新しいものである。

段状特殊遺構出土の特徴としては、

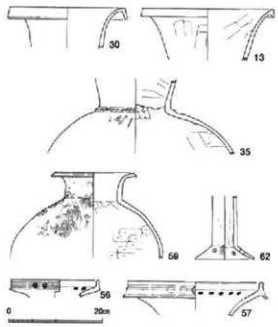
1．甑などの広口壺・甕・無頸壺・脚付き無頸壺等の比較的大型器種の内面調整に横方向を主体とするヘラケズリを多用している。
2．土器全般に加飾が減少し、無文化が進む。また、所謂B様凹線の退化及び擬凹線化が生じる。
3．器台の小型化と高杯等に小型器種（例えば、柱状脚部に浅い皿がつくもの）が現れている。
4．水差し形土器の形態は退化し、長頸壺が出現する。
5．高杯は有段のものが主流となり、水平口縁のものが見られない。
6．壺の口縁部等に擦磨的な様相を止めながら、赤彩文を施すものや内面ヘラケズリ等に見る器面調整、また外面に特徴的な刺突列点文が見られる事から、吉備等瀬戸内系土器の影響が色濃い。

などが挙げられる。

段状特殊遺構出土土器の特徴は、上記に列挙した通りである。それでは、それ以外の遺構から出土した土器との関係は、どの様になっているのだろうか。ここで、大きく環壕埋土出土土器と、環壕区画外南斜面の遺構出土土器の2者に分類して、それぞれ解説を加えたい。

環壕埋土内出土土器は、大型の広口壺を中心として、高杯・器台等の出土が目立つ。甕は数点出土しているが、図化可能なものは数点であった。出土した土器の最大の特徴は、暗茶褐色系あるいは黒褐色系のもの（13・32・35・62）が比較的多い点である。これは、従来発掘調査で出土した場合、「生駒西麓産」と呼称されてきた河内系土器群（以下、河内系と呼称する）である。しかし、近年これらの土器群の形態的特徴や胎土でも類似する讃岐系土器群の存在がある。両者共、胎土には角閃石粒を多量に含み、外見上でも見分けがつき難く、化学的特性も類似するという(6)。本遺跡でも、出土土器

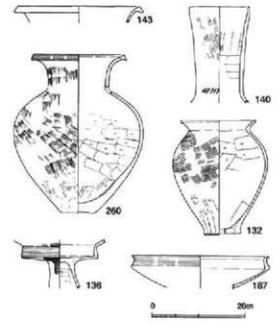
の検討の中で、讃岐系土器の可能性があるとのご指摘もあった(7)。また、香川県高松市の上天神遺跡では、在地の胎土とする土器群中に、「近畿地方」の土器の特徴を有するものが混入しているという。報告者は、この土器群について『他系統の「在地」土器』と呼称して、他の搬入土器との差別化を図っており、在地胎土による他地域土器の「模倣」であるとの記述をされている(8)。この様な状況からは、遺跡内から出土する河内系とされるものに、それらの（近畿地方の模倣）讃岐系土器群が混入しても判別が困難である。表山遺跡で出土したそれら土器群には、形態的に西ノ辻N式に近い広口壺等も含まれるようである。特に、表山遺跡が位置する摂播国境地域を含む播磨全域においては、瀬戸内海ルートを通じて、土器が搬入される可能性が無いとは言えない。断定出来ない以上、ここでの言及は避けるが、形態的には河内系としても違和感は無いと考える。



第16図　環壕内出土土器

環壕埋土内からは、上記の他に加飾等の状況が吉備的様相の色濃い器台（56・57）も出土している。また、高杯には、口縁端部が外側へ僅かに拡張し、上端に面を持つ有段のものもあるが、口縁端部の形態から、後期初頭の吉備系高杯の口縁部に類似する点では、彼地の影響によるものが大きいと言えよう。

環壕区画外の遺構出土土器は、南斜面上の段状遺構等では、土砂の流失等の関係か、良好な状況での検出は困難であったが、竪穴住居出土土器（132・136、140・143）は、ほぼ床面直上の検出であり、遺構に共伴するものである。その中でも、竪穴住居1の有段高杯（136）は、幅の広い段の外面に擬凹線を施すもので、西部瀬戸内地方の影響を強く受けたものと考えられる。また、環壕埋土内から大量に出土していた河内系或いは讃岐系の土器群は、量的には僅少だが、環壕区画外の遺構にも同様に混入している。器種は殆ど広口壺の口縁部だが、竪穴住居2出土の長頸壺（140）は、長頸壺の中でも比較的大型のもので、口縁部外面に退化した凹線文が微かに見える。



第17図　環壕区画外出土土器

以上、遺跡内より出土した土器を3分類して解説した。その特徴としては、環壕区画内の段状特殊遺構における吉備的色彩の濃い土器群と、環壕及び環壕区画外における讃岐系あるいは河内系の色彩の濃い土器群の二つの異なる毛

色を持つことである。実際、段状特殊遺構内の土器群からは、黒土中に角閃石を含む土器は全く出土しなかった。また、環壕区画外の遺構内出土土器では、竪穴住居1・段状遺構6の高杯に吉備的様相の強いものが見られるが、非常に僅少であった。

さて、これについての意味付けには、一つの前提が必要である。それは、黒土中に角閃石を含む土器について、河内系か讃岐系かを明確化することである。そこで、筆者は現段階において形態的類似性から、これらの土器を河内系土器として認識する事とした。

・炭化米について

炭化米は、環壕内偏状遺構の南西側の、尾根鞍部から緩やかな谷部を横断する環壕底で出土した。地形的には鞍部から一段下がった所（環壕で最も低い部分）で、若干の湧水を伴っており、河内系を主体とする土器群や炭化材と共に多量に出土した。

炭化米については、別項で詳細な分析がある。分析では、炭化米の粒長特性から短粒系（表山A）、長粒系（表山B）の異なる2品種の混合したもので、韓国・北部九州の遺跡出土のものとの比較では、表山A種について唐津市菜畑遺跡・韓国国城遺跡と、表山B種について小郡市津古牟田遺跡と酷似すると言う(9)。表山A種は、瀬戸内を中心とする遺跡で出土する炭化米において一般的な品種であり、これに対して表山B種は、日本海沿岸の遺跡からの出土例が多く、瀬戸内からの出土は稀少であり、本遺跡からの多量の出土も稀少な例であるという。また、この両品種炭化米の混種については、両品種が別々に伝来し、本地において混種となったという説と、既に他の地方で混種したものが本地に伝来したという説がある。前者には一定の時間差が条件となり、後者は伝播行程上の現実性が要求される。分析者の見解では、「今後の考古学的証拠に基づく古代の地域間の交流・交易の頻度」の度合いを鍵としながら、日本海沿岸ルートで、由良川・加古川を経由した伝播の可能性を提示している。

・鉄器について

本遺跡からは、4点の鉄器が出土している。その内、特徴的な2点について解説を加える。1点は環壕橋状遺構付近から出土した鏃である。形態は、尖端部や逆刺の各部を含め、全体のプロポーションが無茎の石鏃に酷似する。

もう1点は竪穴住居2出土の釣針である。釣針は現存長5cmを超える大型のもので、逆刺が内側にある。如何なる獲物を対象としたものかは想像の域を脱しえないが、より外洋を意識した釣漁法を展開していた可能性を示唆するものである。

・出土鏡について

環壕底より出土した鏡は、高倉洋彰氏の編年による小形仿製鏡Ⅰb類に位置付けられることは別項でも述べた通りである(10)。同一の鏡式と考えられるものには、長崎県タカマツノダンⅠ鏡・佐保ノ浦赤崎鏡(11)、大阪府加美遺跡(12)の例が挙げられ、神戸市新方遺跡(13)でも出土している。長崎例は石棺墓の副葬品で、ある程度の伝世が考えられる。加美遺跡は溝の埋土中の出土であり、埋没までの時間差が考えられるため、遺構の時期を反映するものとは言えない。本遺跡の鏡は、環壕の床面直上で出土しており、その上焼け落ちた炭化材のほぼ直下にあることから、遺跡環壕の埋没の直前に廃棄された事が分かる。前述の高倉氏の編年による時間軸と、本遺跡出土の土器群の型式から推測する時期を比較すると、鏡の製作後ほぼ間断なく入手し、廃棄したと想定される。

内行花文日光鏡系小形仿製鏡Ⅰ型b類の製作地については、それを祖型として製作されるⅡ型鏡の鋳造遺跡とされる、須玖遺跡群を中心とする福岡平野(14)、ヒルハタ遺跡に代表される筑後平野(15)において、

鋳型の出土及び鋳造遺構の検出等で明らかとなっており、Ⅰ型b類をはじめ、舶載とされるⅠ型a類についても北部九州での鋳造の可能性を指摘している[16]。それに対して、本遺跡と同鏡式で、ほぼ同面径であるタカマツノダンⅠ鏡に見られる狭縁断面（断面三角形等）等の特徴は、韓国流入銅鏡の小銅鏡にも通じ、更に坪里洞でも知られることから、少なくともⅠ型b類段階においても韓国産とを考える必要性と、Ⅰ型b類・Ⅱ型a類段階での日韓両地域の仿製が進んだ可能性も指摘されている[17]。

何れにせよ、鋳造されたⅠ型b類小銅鏡は、製作地から恐らく瀬戸内海ルートを通り、吉備地方の集団、或いは吉備地方の影響を強く受けた集団を経由して、入手に至ったと考えられる。現段階では、製作地域と入手先（表山集落）という二極地域を、その分布状況から結びつける十分な資料はないが、本遺跡における瀬戸内色（吉備系土器群等）の強い状況は、鏡の入手プロセスにおいて吉備地方を中心とする集団が介在していたのは間違いなかろう。

・まとめ

以上、表山遺跡の調査で得られた成果について、其々の角度から解説を加えた。それでは、表山遺跡とは明石川流域においてどのような集落・集団として位置づけられるだろうか。前述の解説を踏まえて集落像を検討していく。

明石川流域では、弥生時代前期より本流域の中流域と下流域の沖積平野に、稲作農耕を生産基盤とする中核集落（拠点集落）が成立する。中流域におけるそれは玉津田中遺跡で、下流域においては新方遺跡である。両拠点集落は、河川に隣接した微高地上の集落という宿命的な立地から、しばしば洪水による集落の移動を余儀なくされた。そのことは、玉津田中遺跡における発掘調査においても確認されており、大きなピークとしては、前期後半～中期初頭と、中期後半に求められ、特に中期後半の洪水については、「極めて大きな洪水によって埋めつくされ、玉津田中遺跡も大きく衰退し、廃絶状態になる。」という[18]。そして再び集落が形成されるのは、後期中葉を待たねばならない。

新方遺跡は、中期中葉にその盛期をむかえ、中期後葉から縮小が見られ、中期末にはほぼ消滅してしまうというが[19]、発掘調査が小規模調査が殆どであり、なかなか全体像の把握が困難な状況である。その中にあって、中期初頭及び後期の竪穴住居からは、多量の碧玉製管玉の製品・未製品、玉の砥石等が出土して玉生産の拠点であった事が確認されており、内行花文日光鏡系小形仿製鏡（Ⅰ型b類）や鋳造鉄斧、銅鏃や分銅形土製品等も出土している。また、河内・紀伊等の他地域の搬入土器も見られる。出土遺物から見る新方遺跡のこの様な状況は、播磨灘に注ぐ明石川の下流域において本流域及びその支流との分岐を抑える立地に起因するもので、明石川流域上流から播磨灘に通ずる河川ルートの要衝を占める拠点であるばかりでなく、大阪湾から瀬戸内海を中心とする物流ネットワークの一拠点を担うものと考えられる。

さて、これらの中期中葉まで隆盛を極めた拠点集落は、中期後半以降中期末葉に縮小し、播谷川・伊川等の各支流域において中核的集落であった集落も縮小してしまうが、それらの縮小に合わせて丘陵上において新たに集落が形成される。明石川流域における高地性集落の出現である[20]。明石川流域の高地性集落は、本流の中流域、各支流域に隣接する丘陵上に成立し、低地集落の集団がそのまま丘陵に上がっていく状況を示すもの（これを集住型と呼ぶべきか）[21]、例えば本流域における西神ニュータウン38・50地点等が挙げられる。特に50地点は、40基の竪穴住居を検出し、サヌカイトの大型剥片が出土している事からも、石器素材を保有する中核集落のスタイルを色濃く残すものである。また、伊川上流東岸丘陵上にある頭高山においても同様の状況が窺え、サヌカイトの大型剥片に加え、竪穴

住居において石器生産を行った痕跡が残っている。そして、これらの高地性集落或いはその隣接集落では、畿内文化の影響下にあるとされる銅剣形石剣を保有していることも注意される。

更に流域の高地性集落では、他の高地性集落よりも一段高くなった所（丘陵の頂上付近）に、竪穴住居1棟のみを検出する遺跡が確認されている。久留主谷遺跡や鍋谷池遺跡等は、最も見通しの良い部分に占地されており、隣接する高地性集落に対する見張り台的な機能をもつ補完関係にある集落と考えられる[22]。これらの高地性集落は中期末葉にあって、後期までに忽然と消えてしまう。

表山集落は、これら中期末葉の高地性集落の消滅に呼応して伊川右岸に出現する。表山遺跡における最も特徴的な点は、集落に環壕を巡らす事である。明石川流域における環壕集落の存在は、低地の拠点集落（玉津田中・新方）では確認されていない。

また、西神ニュータウン第50地点や頑高山等に代表される（集住型の）高地性集落においても環壕は確認されず、僅かに城が谷で壕が確認されているのみである。このことから、明石川流域の弥生集落は、その形成にあたって、環壕を巡らすという集落形態が成立しなかったものと考えられる。従って、表山集落の集団は、流域において拠点集落を中心として展開していた、それまでの集落の集団とは全く異なる集落形態を持った集団、或いは異集団と密接な関係にある集団と考える[23]。それには瀬戸内地方（恐らく吉備地方）の集団が介在するという想定は、出土土器からも妥当であろう。ただし、吉備的様相の強い状況下で、播磨的または畿内的な様相も見受けられる事や、環壕内で出土した炭化米に、瀬戸内海から大阪湾周辺地域では稀少な長粒種が、高比率で混在する事を考えると、瀬戸内地方からダイレクトに移住した集団と考えるよりも、播磨周辺で一定の在地化が進んだ集団を想定しうる。それは、集団の大規模な移住を伴ったものとは考えていない。また、表山に占地した集団は、集落の中枢部分に環壕を巡らす事で、外圧に対する一定の防禦を図りながら、瀬戸内海航路を往来する情報及び物資に対して、より積極的に触手を伸ばす為の拠点としたのである[24]。本遺跡では、環壕及び環壕区画外に河内系土器群が多量に出土しているが、大阪湾を介した東方集団との接触によるものであり、環壕区画内ではそれらとの接触に対して「防禦線」を張ったとも考えられ、正に「守りながら、攻める」[25]高地性集落と言えるのである。更に、竪穴住居2から出土した鉄製釣針は、その規模からより外洋での使用が想定でき、製塩土器と考えられる土器も出土している事から、海洋での漁に根ざした集団との味方もできる[26]。それは、環壕内から出土した炭化米の分析で、

第18図　環壕推定復元図　S＝1/7,500

種作農耕に適正な環境・土壌にあって技術的に未熟であった可能性が指摘されていることにも、直接の因果関係は無いにせよ、表山集落の集団像・集落像を考える上での補完資料となろう。

中期末葉における大陸物資（鉄・銅等）の普及による、入手物資の変移は、それまでの石材を中心とした流通モデルの中核であった拠点集落の解体と、鉄を中心とした物流システムへの移行を急速に進めた。解体した拠点集落は物流の掌握の為に丘陵上に集落を構え、更に山頂に画定的な小集落を設けるといった集落の大きな動きが生じる。明石川流域における小平野では、大洪水によって居住域が堆積したことも要因の一つともなったのであろう。そういった集落の大変動の間隙を縫うように、表山遺跡は伊川中流域の丘陵上に環壕集落を構えたのである。それは、大阪湾を中心とする海洋の物資や情報の動きを見張るだけでなく、伊川から内陸へ抜ける陸上ルートの掌握をも意識したもので、表山遺跡の出現に呼応して頂高山遺跡等の近隣の高地性集落が消滅するものと考えられる。

・おわりに

以上、長々と述べたが、推測の域を脱しえないものが多いとのお叱りの声が聞こえるようである。現段階での私見についての御批判については、無論真摯に受け止めるものである。また、今後表山遺跡と酷似する環壕集落が明石川流域において必ず発見されるであろうことを予見しながら本論の終結とするものである。

最後に、発掘現場にもお越し頂き、遺構・遺物のについて非常に多くのご教示を頂いた都出比呂志氏・森岡秀人氏、出土鏡についてご教示頂いた高倉洋彰氏・福永伸哉氏に深謝するものである。

註

1．「城ケ谷遺跡」『平成８年度神戸市埋蔵文化財調査年報』　1996　神戸市教育委員会
2．「大塩山遺跡」「和田山町文化財調査報告書」第７集　1995　和田山町教育委員会
3．朝倉都肥木町西ノ迫遺跡では、環壕内側に門柱と考えられる遺構２基を確認している。
4．高槻市古曽部・芝谷遺跡で橋状遺構とされる部分の環壕外側には、写真上でテラス状になった部分を確認した。
5．大分県玖珠郡玖珠町白岩遺跡では、投弾用と考えられる200個の礫が集積していたという。
6．三辻　利一　「下川津遺跡出土土器蛍光Ｘ線分析」『下川津遺跡』　1990　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
7．都出比呂志・森岡秀人両氏には、現地の他出土遺物についても御教示頂いた。その中で、「生駒西麓産と思われる土器群の中でも、胎土中に長石が多量に含まれるものは、讃岐系の土器の可能性がある。」との御指摘を頂いた。
8．大久保徹也　「上天神遺跡の他系統の「在地」土器」『上天神遺跡』　1995　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
9．和佐野喜久夫　本報告書第６章より
10．高倉洋彰氏には兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所において実見して頂いた。
11．『対馬』－浅茅湾とその周辺の考古学調査－長崎県文化財調査報告第17集　1974　長崎県教育委員会
12．高倉洋彰　「弥生時代小形仿製鏡について〔承前〕」『考古学雑誌』70－３　1985
13．喜谷美宣ほか　『新方遺跡発掘調査概要』1984　神戸市教育委員会
丸山潔　『新方遺跡発掘調査概要・居住遺跡発掘調査概要』1977　神戸市教育委員会

14. 平田定幸ほか　「(3) 青銅器・鉄器・ガラス製品の生産」『奴国の首都　須玖岡本遺跡－奴国から邪馬台国へ－』1994　小田富士雄・田村圓澄監修　春日市教育委員会編
15. 高倉洋彰　「倭鏡の創作－弥生時代仿製鏡の創作地－」『鏡の語る古代史』季刊考古学　第43集　1993　雄山閣
16. 高倉洋彰　1993　前掲
17. 小田富士雄　「日・韓地域出土の同笵小銅鏡」『古文化談叢』第9集　1982　九州古文化研究会
18. 山本三郎　「明石海峡・明石川流域における弥生時代の高地性集落小論」『あまのともしび－原口先生古稀記念集』　2000　原口正三先生の古稀を祝う集い事業会
19. 山本三郎　2000　前掲
20. 高地性集落については、その定義付けおいて、立地上の差異でもばらつきが生じている。
21. 森岡秀人氏は、古曽部・芝谷遺跡や観音寺山遺跡の様に大規模な環濠集落について、低地の拠点集落との有機的関係を示され、「集住型の高地性集落」と呼称されており、表山遺跡もそれに近似する様相を持つとの指摘をされている。
22. 山本三郎　2000　前掲
23. 山本三郎氏は、頭高山・表山など、伊川流域の高地性集落の出現を、衰退した低地の拠点集落が高地に移動したものとされた上で、それを新方遺跡の集団と位置づけされている。
24. 伊藤実　「瀬戸内の環濠集落と高地性集落」『古文化論叢－児嶋隆人先生喜寿記念論集－』　1991　児嶋隆人先生喜寿記念事業会
25. 伊藤実　1991　前掲
26. 間壁忠彦氏は、瀬戸内海において、高地にありながら漁具が出土したり、貝塚を伴う高地性集落が多いことについて、「海辺に生活の糧を求めた山の民というより、山に登った海人の性格」が強いとされている。資料的には僅少だが、大型の釣針等の状況をみると、表山集団にもその可能性を考えても良いのではないかと考える。

付記

発掘調査中は多数の方々に現場へ足をお運び頂き、多くの御指導、御助言を賜った。本報告書の刊行にあたり、記して深謝の意を表するものである。

足立敬介・石野博信・伊藤広幸・井守徳男・大石雅一・奥田哲通・國本綾子・斎木崇人・籠宮正・種定淳介・田畑基・丹治康明・都出比呂志・礪宜田佳男・服部文章・平田博幸・藤井整・松井敬代・丸山潔・宮原文隆・森岡秀人・森田克行・安平聰利・山田清朝・山本三郎・山本雅和・渡辺伸行・和田晴吾
(以上　敬称略五十音順)

第2節　明石川流域の古墳時代の遺跡

1．はじめに

今回対象とする明石川流域とは、律令制下の播磨国明石郡にほぼ相当する地域を指す。播磨国でも東端にあたり、摂津国と国境を接する。畿内という中心部の西周縁に位置する。

明石川流域の弥生時代の遺跡については、今までに集落を中心とした研究がある（丸山1992）。また、古墳時代については、後期の群集墳を中心とした研究がある（宮本1984、渡辺1986）。近年、明石川流域の古墳時代の集落の調査例が急増している。そこで、今回は集落と古墳の立地と分布を考察しながら、明石川流域の古墳時代の遺跡を概観する。

2．明石川流域の古墳時代の遺跡概観

概観するにあたって、明石川流域の遺跡を立地から以下のような地域に分類する。

Ⅰ地域：明石川上流域

Ⅱ地域：明石川中流域

Ⅲ地域：明石川と櫨谷川の合流点付近

Ⅳ地域：明石川と伊川の合流点付近

Ⅴ地域：櫨谷川流域

Ⅵ地域：伊川流域

Ⅶ地域：山田川流域

以下に地域ごとに特徴的なことを概観する。

Ⅰ地域：明石川上流域

当地域には古墳時代を通じて継続する押部遺跡（B）がある。後期には栄遺跡（A）、西盛南遺跡（C）が出現する。

当地域で前期・中期の古墳は認められない。後期に明石川流域の前方後円墳としては最上流にあたる金棒池古墳群（4）の同1号墳が築かれる。また、後期になると群集墳が盛行する。七曲り古墳群（7）は、木棺直葬墳のみで構成される群集墳である。他の群集墳では埋葬施設に木棺直葬と横穴式石室の両者が認められる。明石川流域でもこの地域だけの特徴的な現象である。

Ⅱ地域：明石川中流

当地域の集落には中期の堂本遺跡（E）、後期の黒田遺跡（D）、養田遺跡（F）、堅田遺跡（G）がある。

当地域の前期の古墳に、堅田神社古墳群（12）の同1号墳、養田中ノ池古墳（10）、西神N.T.第44・45地点古墳群（15）が挙げられる。中でも堅田神社1号墳は明石川流域でも最古の古墳の一つである。堅田神社古墳群では、中期半ばから再度古墳が造営され後期半ばまで継続する。特徴的なのは、同古墳群の西神N.T.第29・30地点支群で、中期に木郭を埋葬施設に持つものが認められる。後期になると埋葬施設に木棺直葬を採用する群集墳が盛行する。

Ⅲ地域：明石川と櫨谷川の合流点付近

当地域の集落には弥生時代後期後半から継続するものが多く認められる。西戸田遺跡（H）、玉津田中遺跡（J）、芝崎遺跡（K）、日輪寺遺跡（L）である。しかし、玉津田中遺跡を除く他の集落は前期初頭には廃絶する。玉津田中遺跡は古墳時代を通じて継続する。他に、中期の印路遺跡（I）がある。

当地域の前期の古墳に印路古墳群(16)のC－2・3号墳が挙げられる。他の古墳は中期後半から後期前半に盛行する群集墳である。特徴的なのは、中期の西神N.T.第55地点古墳群(19)の同2号墳で掘墓施設に刳竹形木棺を直葬している。また、中村古墳群(17)の同5号墳は後期の帆立貝式古墳である。

Ⅳ地域：明石川と伊川の合流点付近

当地域には、弥生時代後期から古墳時代を通じて継続する吉田南遺跡(N)がある。中期には出合遺跡(M)、新方遺跡(P)が、後期には高津橋・岡遺跡(O)が出現する。

当地域の前期の古墳に天王山古墳群(24)の同4号墳、5号墳と白水瓢塚古墳(25)が挙げられる。天王山4号墳、5号墳は明石川流域で最古の前期前葉の古墳である。白水瓢塚古墳は前期後半の前方後円墳で、前方後円墳としては明石川流域で最古のものである。中期には王塚古墳(23)、あさぎり寮古墳(27)が認められる。王塚古墳は前方後円墳で、陪塚を伴う。後期には出合古墳群(22)の同1号墳(亀塚)、天王山3号墳で帆立貝式古墳が認められる。

Ⅴ地域：幡谷川流域

当地域の集落には、弥生時代後期後半から古墳時代中期まで継続する管野遺跡(T)、前期・後期の栃木遺跡(R)、後期の福谷遺跡(Q)、西神N.T.第62地点遺跡(S)がある。

当地域には前期・中期の古墳は認められない。後期の古墳に池谷古墳群(28)、松本古墳(29)がある。いずれも埋葬施設に木棺直葬を採用すると考えられている。

Ⅵ地域：伊川流域

当地域の集落には弥生時代後期から古墳時代初頭の池上北遺跡(V)がある。古墳時代を通じて継続する集落に上脇遺跡(U)がある。中期に長坂遺跡(X)、池上口ノ池遺跡(Y)が、後期に小寺遺跡(W)が出現する。

当地域では前期・中期の古墳は認められない。後期には今回調査した池ノ内群集墳(30)など群集墳が盛行する。いずれも埋葬施設に木棺直葬を採用する。

Ⅶ地域：山田川流域

当地域で古墳時代の集落は長らく確認されていなかったが、近年、後期の竪穴住居跡が清水ケ丘遺跡で確認された。しかし、未だ不明な点が多い。

当地域の古墳は、前期の大型古墳群と後期の横穴式石室を埋葬施設に採用する群集墳に二分される。前期の古墳には五色塚古墳、小壺古墳がある。やや後出して大歳山古墳群(37)の同1号墳、歌敷山東古墳、歌敷山西古墳が出現する。五色塚古墳は県下最大の前方後円墳である。小壺古墳は県下最大の円墳である。後期には、同初頭に多聞古墳群(35)の主に西脇支群で木棺直葬墳のみで構成される群集墳が出現する。そして後期後半以降、埋葬施設に横穴式石室を採用する群集墳が盛行する。中でも、狐塚古墳(36)は二重の周濠を巡らす大型の円墳である。

3．明石川流域の古墳時代の遺跡の盛衰

明石川流域の古墳時代の遺跡の盛衰を概観する（表11）。

明石川流域で古墳時代を通じてほぼ継続する集落に、Ⅰ地域の押部遺跡、Ⅱ地域の常本遺跡、Ⅲ地域の王津田中遺跡、Ⅳ地域の吉田南遺跡、Ⅴ地域の菅野遺跡、Ⅵ地域の上脇遺跡がある。中でも、王津田中遺跡と吉田南遺跡は明石川流域でも拠点的な集落であると考えられる。

古墳時代を通じて、Ⅶ地域を除いた明石川流域で集落は継続して営まれる。明石川流域の古墳時代の集落の特徴的なこととして、①弥生時代から継続する集落で前期初頭に廃絶するものがみられる。

第19図　明石川流域の主要遺跡（古墳時代）　S=1/25,000

表10　明石川流域の主要な古墳時代の遺跡一覧表

No	地域	古墳（群）名（群集墳名）	構成基数	埋葬施設 木槨	割竹	木棺	横穴	箱式	時期 古墳時代 前期	中期	後期	飛鳥時代（7C）	主要遺物	備考	文献
1	I	日吉谷	19			6	13						埴輪		20
2		追心山	3			2	1								22
3		元住吉山	3			2	1								20.22
4		金棒池	2										（鏡）	前方後円墳１基	20.22
5		新内	1										埴輪		20.23
6		離岡山	1				1								20
7		七曲り	6			6									17.20
8	II	常本	11			11							埴輪		22
9		保養所裏山	2			2							埴輪		20
10		養田中の池	1		1										22.30
11		西神NT 9-12地点	5		1	4									20.22.23.24
12		堅田神社	15	1	1	13							鏡・鉄剣・埴輪	西神NT29−33地点を含む	16.20.22
13		西神NT38・39地点	2			2							銀製指輪		19.22.24
14		西神NT41・42地点	2			2							鉄器		19.22
15		西神NT44・45地点	2		2								鉄剣		22
16	III	印路	24		1	23									22.30
17		中村	5		1	4							帯金具・埴輪・横	帆立貝式古墳１基	4.20.22
18		下大谷	2			2									30
19		西神NT55地点	3		1	2							鉄剣・鉄斧		20.21.22
20		西神NT61地点	2		2										24
21		居住・小山	5			5									16.20.22
22	IV	出合	5										埴輪	帆立貝式古墳１基	20.22
23		丁塚	4										埴輪	前方後円墳１基	20.22.29
24		天王山	7		2	5							鏡・鉄剣・埴輪	帆立貝式古墳１基	7.20.22.23.24.29
25		白水瓢塚	1										埴輪	前方後円墳	20.22.24.29.36.39
26		延命寺	1					1					鉄鎌		22
27		あさぎり寮	1			1									22
28	V	池谷	3										埴輪		22
29		松本	1			1									20.22
30	VI	池ノ内	5			3							刀子・玉類		22
31		木春谷	3												22
32		鬼神山	4			4							鏡・銅釧・埴輪		3.20.22
33		柿谷	3			3							鉄剣・埴輪		22
34	VII	高塚山	15					15							22.32.33.35
35		多聞	41				7	34					馬具		22
36		狐塚	1					1					馬具		22.23.36
37		大歳山	2		1			1					鏡・石釧・玉類	前方後円墳１基	9.22
38		舞子	43					43					馬具・鉄器・玉類		10.13.16.19.22.23
		歌敷山東	1		1								鉄剣・鉄斧・埴輪		1.22
		歌敷山西	1		1								鉄剣・埴輪		1.22.29
		五色塚	1										石製合子・埴輪	前方後円墳	16.19.21.22.24.29
		小壺	1										埴輪		16.19.22.29

No	地域	遺跡名	所在地	立地	時期 弥生時代後期	古墳時代 前期	中期	後期	飛鳥時代（7C）	主要遺物	備考	文献
A	I	栄	押部谷町栄	段丘上								31
B		押部	押部谷町押部	段丘上								22.24.26
C		西盛南	押部谷町西盛	段丘上								27
D	II	黒田	平野町黒田	段丘上						鉄滓		20.22
E		常本	平野町常本	段丘上								20.22
F		養田	押部谷町養田	段丘上								20.22.31
G		堅田	平野町堅田	段丘上								27
H	III	西戸田	平野町西戸田	段丘上								20.22
I		印路	平野町印路	段丘上						韓式系土器		27.28.41
J		玉津田中	玉津町田中他	沖積地								28.36.38.39.44
K		芝崎	平野町芝崎	段丘上								18.20
L		日輪寺	玉津町二ツ屋	段丘上								44.46.48
M	IV	出合	玉津町出合	段丘上						韓式系土器		20.22
N		吉田南	森友	沖積地						鏡・陶質土器		20.22.27
O		高津橋・岡	玉津町今津	段丘上								20.22.38
P		新方	玉津町新方他	沖積地							玉生産	12.18.19.20.22
Q	V	福谷	櫨谷町福谷	段丘上								20
R		栃木	櫨谷町栃木他	段丘上								41.44
S		西神NT62地点	櫨谷町菅野	段丘上								10.16.17.20.22.42.4
T		菅野	櫨谷町菅野	段丘上								44
U	VI	上脇	伊川谷町上脇	段丘上								38.42
V		池上北	伊川谷町上脇	段丘上								20.22
W		小寺	伊川谷町小寺	段丘上								16.22
X		長坂	伊川谷町長坂	沖積地								19.20.21.24.42
Y		池上口ノ池	伊川谷町上脇	段丘上								20.22

※ 割竹―割竹形木棺直葬　木棺―木棺直葬　横穴―横穴式石室　箱式―箱式石棺　※数字，アルファベットは第19図に対応

②後期になって出現する集落が明石川上・中流域を中心に多くみられる。特に後者は、後期に盛行する群集墳の母集落となる可能性が考えられる。

明石川流域では古墳時代を通じて古墳の造営され続ける地域は確認できない。

前期には、Ⅱ地域の堅田神社古墳群、Ⅳ地域の天王山古墳群、そしてⅦ地域の五色塚古墳など大型の古墳から構成される古墳群がある。中期にはあまり古墳は認められず、Ⅳ地域の王塚古墳が当期唯一の前方後円墳である。後期前半になると明石川流域全域で群集墳が盛行する。埋葬施設には木棺直葬を採用する。そして、後期後半にはⅠ地域とⅦ地域でしか古墳は造営されなくなる。埋葬施設には横穴式石室を採用する。

表11　明石川流域の古墳時代の遺跡盛衰表

地　域	遺跡	前期	中期	後期前半	後期後半
Ⅰ地域	古墳	×	×	◎	○
	集落	○	○	◎	○
Ⅱ地域	古墳	◎	◎	◎	×
	集落	×	○	◎	◎
Ⅲ地域	古墳	○	○	◎	×
	集落	◎	◎	◎	◎
Ⅳ地域	古墳	◎	◎	◎	×
	集落	◎	◎	◎	◎
Ⅴ地域	古墳	×	×	○	×
	集落	○	○	◎	○
Ⅵ地域	古墳	×	×	◎	×
	集落	○	◎	◎	○
Ⅶ地域	古墳	◎	×	○	◎
	集落	×	×	○	×

◎－盛行する　○－存在する　×－確認されず

4．結語

前期のⅡ地域の堅田神社古墳群とⅣ地域の天王山古墳群は、弥生時代以来の首長の系譜を引く小地域の首長層の墓域であると考えられる。そして、集落や生産基盤が確認できないⅦ地域の五色塚古墳に代表される大型古墳から構成される古墳群は、畿内政権と密接に結び付いた明石川流域を掌握する首長層の墓域であると考えられている。

中期のⅣ地域の王塚古墳はⅦ地域の五色塚古墳の被葬者の系譜を引く首長の墓域が移動したものと考えられている。しかし、同じⅣ地域内の天王山４号墳－白水瓢塚古墳の被葬者の系譜を引く首長の墓域である可能性も捨てがたい。

後期には、明石川流域全域で群集墳が盛行するようになる。このような現象は、畿内政権が新興首長層や有力家父長層に直接結びつき、造墓権を持つ階層が拡大した結果と考えられている（和田1992）。そして、後期後半には、Ⅰ地域とⅦ地域にしか古墳は造営されなくなる。Ⅰ地域では、群集墳の同一墓域内で埋葬施設が木棺直葬墓から横穴式石室に移行する様子が確認されている（渡辺1986）。Ⅶ地域については、Ⅰ地域以外のⅡ～Ⅵ地域で古墳が造営されなくなることから、畿内政権の介入による墓域の再編が考えられている。単なる、石室の石材確保だけで墓域が移動した（宮本1984）と考えにくい。

明石川流域では、古墳時代後期に集落は最も拡大し、群集墳が盛行するようになる。こうした現象は、後期の群集墳の盛行を、従来の直系護族に従属していた傍系親族の経営の独立を伴う分節運動であったとする人骨からの研究（田中1995）とも一致する。

また、西播磨の揖保川流域の長尾・小畑遺跡群で興味深い報告がなされている（岸本1999）。同遺跡群では、後期初頭に集落と墓域（古墳）が出現し、後期半ばまで古墳は造営されるものの、後期後半に墓域は移動し、後期末には集落が解体するという。この後期初頭の集落の成立と墓域の開与、そして後期後半の墓域の再編には「強い上位意志」が働いたと考えられるという。明石川流域の古墳時代後期の現象も、その一連の流れと大きくは一致するものと考える。

今回調査した池の内群集墳の経営母体は、山裾に位置する上脇遺跡の可能性が高いと考えられる。池ノ内群集墳は、後期に新たに造墓権を持つ階層が拡大し、明石川流域全域で群集墳が造営されるようになったもののひとつとして位置付けられる。

(参考文献)
兵庫県　1931　「垂水歌敷山古墳の調査」『兵庫県史績名勝天然記念物調査報告』8
神戸新聞社会部編　1960　『祖先のあしおと』Ⅳ
神戸市教育委員会　1967　『鬼神山古墳』
明石市教育委員会　1971　「兵庫県明石市中尾古墳調査概要」『兵庫県埋蔵文化財調査報告書』第4冊
神戸市教育委員会　1972　「西神ニュータウン内の遺跡中間報告Ⅰ」
神戸市教育委員会　1972　「天王山古墳群発掘調査概要」
神戸市立考古館　1980　「地下にねむる神戸の歴史展」
春成秀爾　1981　「神戸市大蔵山の古墳ほか」『兵庫考古』15
神戸市教育委員会　1983　「昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報」
神戸市教育委員会・神戸市健康教育会社　1984　「地下にねむる神戸の歴史展Ⅱ」
神戸市教育委員会　1984　「新方遺跡発掘調査概要」
渡辺伸行　1984　「舞子古墳群の形成過程」『歴史と神戸』125号
宮本博　1984　「明石川流域における後期古墳」『歴史と神戸』125号
明石市教育委員会　1985　「明石市史資料考古編」
神戸市教育委員会　1985　「昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報」
神戸市教育委員会　1986　「昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報」
渡辺伸行　1986　「木棺直葬墳の終焉」神戸市市長総務局編『神戸の歴史』15号
神戸市教育委員会　1987　「昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報」
神戸市教育委員会　1988a　「繁田古窯址発掘調査報告書」
神戸市教育委員会　1988b　「昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報」
神戸市　1989　「新修神戸市史　歴史編Ⅰ　自然・考古」
神戸市教育委員会　1989　「昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報」
神戸市教育委員会　1990a　「昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報」
神戸市教育委員会　1990b　「舞子・東石ケ谷遺跡Ⅱ」
神戸市教育委員会　1991a　「押部遺跡」
神戸市教育委員会　1991b　「昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報」
神戸市教育委員会　1992　「平成元年度神戸市埋蔵文化財年報」
兵庫県　1992　『兵庫県史考古資料編』
兵庫県教育委員会　1992　「下大谷古墳群・印路古墳群C・印路台状墓」
丸山潔　1992　「弥生集落の動態(1)－摂播国境地域－」『究班』埋蔵文化財研究会
和田晴吾　1992　「群集墳と終末期古墳」『新版　古代の日本　近畿Ⅰ』角川書店
神戸市教育委員会　1993　「平成2年度神戸市埋蔵文化財年報」
神戸市教育委員会　1994a　「平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」
神戸市教育委員会　1994b　「高塚山古墳群発掘調査概要」
神戸市教育委員会　1995　「平成4年度神戸市埋蔵文化財年報」
田中良之　1995　「古墳時代親族構造の研究」柏書房
兵庫県教育委員会　1995・96　「玉津田中遺跡」第3－6分冊
神戸市教育委員会　1996　「平成5年度神戸市埋蔵文化財年報」
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1996　「平成7年度年報」
神戸市教育委員会　1997　「平成6年度神戸市埋蔵文化財年報」
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1997　「平成8年度年報」
神戸市教育委員会　1998a　「神戸市埋蔵文化財分布図」
神戸市教育委員会　1998b　「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」
同志社大学考古学研究室・明石市教育委員会編　1998　「明石市埋蔵文化財包蔵地分布図」
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1998　「平成9年度年報」
岸本道昭　1999　「6世紀集落と古墳造営の変革」『長尾・小畑遺跡群』龍野市教育委員会
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1999　「平成10年度年報」

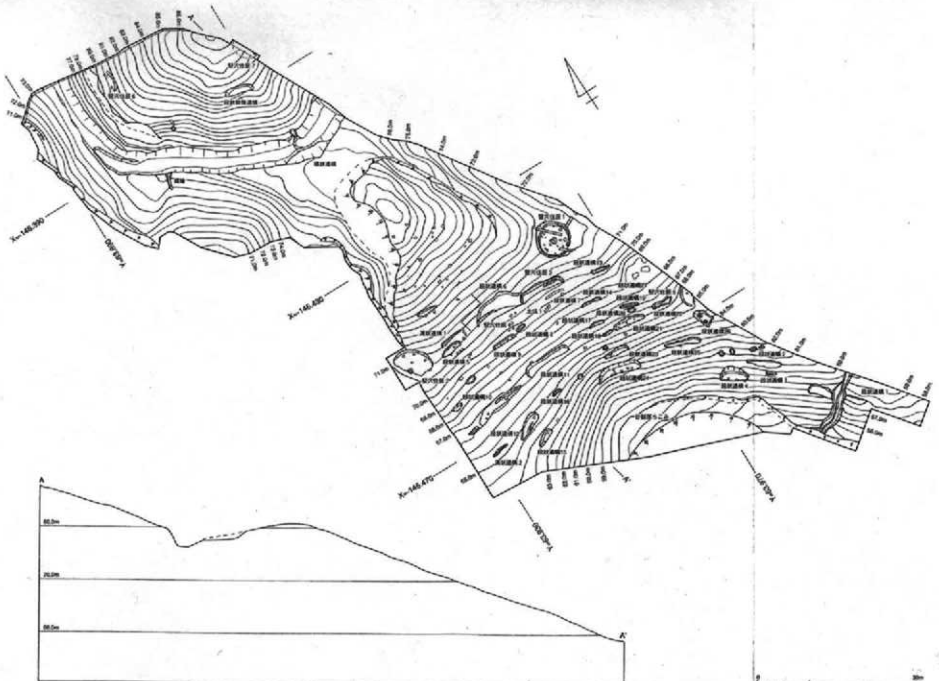
報告書抄録

ふりがな	おもてやまいせき・いけのうちぐんしゅうふん
書名	表山遺跡・池ノ内群集墳
副書名	神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書
巻次	I
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第２０２冊
編集者名	深江英憲・服部寛・高木芳史・和佐野喜久生・大塚豊揚
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　℡078-531-7011
発行年月日	西暦２０００（平成12）年３月17日

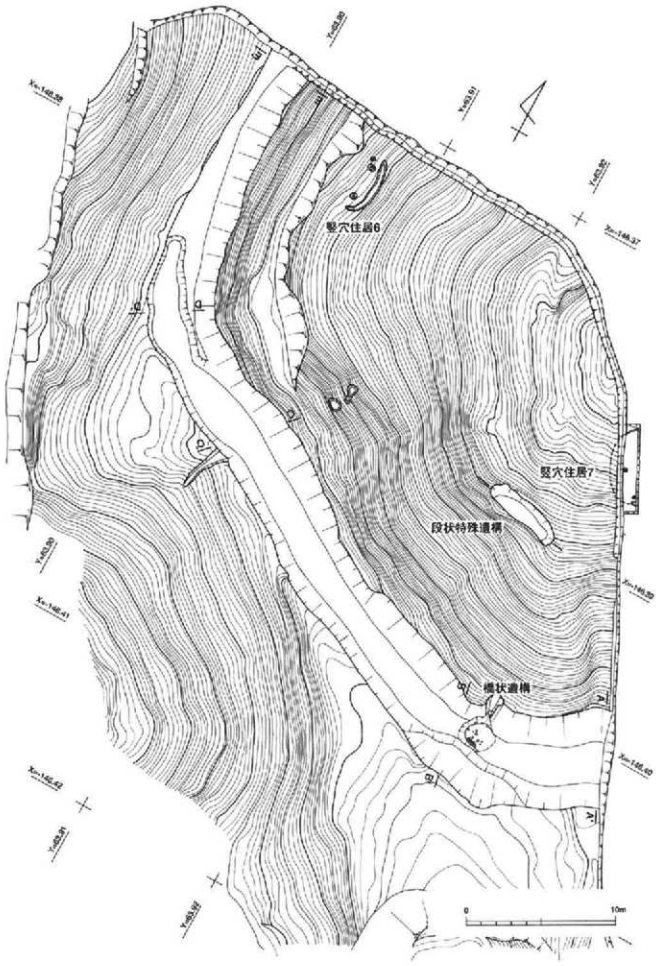
所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 調査番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おもてやま 表山 いせき 遺跡	こうべにしく 神戸市西区 いかだにちょう 伊川谷町 かみわき 上脇	28110	960156	34度 40分 39秒	135度 15分 31秒	19960710 / 19961216	5,198m²	一般道道２号（神戸西バイパス）建設事業
いけのうち 池ノ内 ぐんしゅうふん 群集墳		28110	960157			19960710 / 19961216	391m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
表山遺跡	集落	弥生時代後期 初頭	環壕 段状特殊遺構 竪穴住居跡 段状遺構	土器・石器・鉄器・銅鏡・炭化米
池ノ内群集墳	古墳	古墳時代後期	古墳　4基	須恵器・土師器・鉄器 玉類・石製品

表山遺跡
図　版

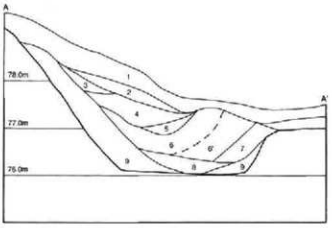


遺構配置図



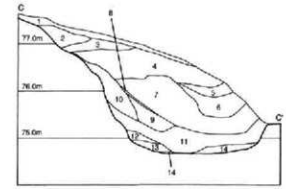
環壕遺構配置図

図版3



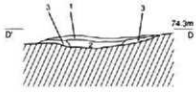
環壕畦1

1.	2.5Y6/3	浅黄色	表土及び盛土
2.	2.5Y7/3	浅黄色	シルト質細砂～粗砂
3.	2.5Y7/4	浅黄色	シルト質細砂
4.	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト質細砂（細礫混入）
5.	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト質細砂（細礫混入）
6.	2.5Y6/2	灰黄色	シルト質細砂（細礫混入）
6'	2.5Y6/2	灰黄色	シルト質細砂（中礫混入）
7.	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト質細砂（細礫混入）
8.	2.5Y6/6	明黄褐色	シルト質細砂（細礫混入）
9.	2.5Y5/6	黄褐色	シルト質細砂（細礫混入）



環壕畦3

1.	10YR6/3	浅黄橙色	中砂～細砂（小礫を含む）
2.	10YR6/4	にぶい黄橙色	細砂～中砂（小礫を多く含む）
3.	10YR6/3	にぶい黄橙色	細砂～中砂
4.	10YR7/3	にぶい黄橙色	細砂～中砂
5.	10YR7/2	にぶい黄橙色	粘砂～中砂
6.	10YR7/3	にぶい黄橙色	粘砂～中砂（中礫を少し含む）
7.	10YR7/6	明黄褐色	細砂～中砂（中礫を多く含む）
8.	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘砂（細礫混入）：一時的な旧表土層か？
9.	10YR6/4	にぶい黄橙色	粘砂～中砂
10.	10YR7/6	黄橙色	粘砂（細礫混入）
11.	10YR7/4	にぶい黄橙色	細砂～中砂（小礫を多く含む）
12.	10YR8/6	黄橙色	細砂～中砂
13.	10YR4/4	にぶい黄褐色	細砂～中砂（小礫を多く含む）炭化木・土器等出土
14.	2.5Y7/4	浅黄色	シルト質集積断層～細砂　炭若干含む

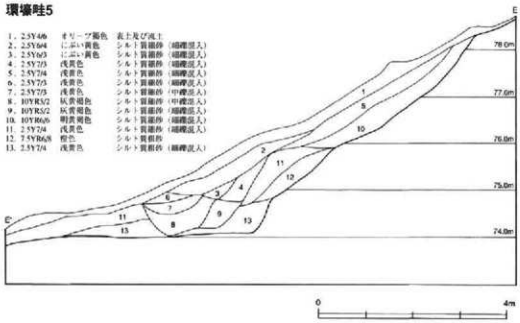


環壕畦4

1.	2.5Y7/4	浅黄色	シルト質細砂（細礫含む）
2.	10YR8/2	灰白色	シルト質細砂（細礫含む）明黄褐色シルトブロック含む
3.	10YR6/8	明黄褐色	シルト質細砂（細礫混入）

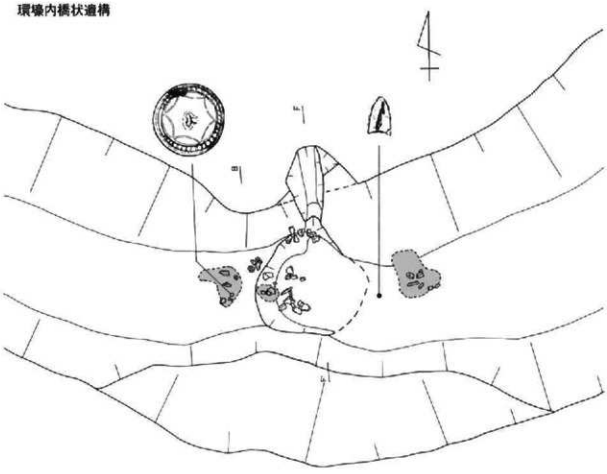
環壕畦5

1.	2.5Y4/6	オリーブ褐色	表土及び盛土
2.	2.5Y6/4	にぶい黄色	シルト質細砂（細礫混入）
3.	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト質細砂（細礫混入）
4.	2.5Y7/3	浅黄色	シルト質細砂（細礫混入）
5.	2.5Y7/4	浅黄色	シルト質細砂（細礫混入）
6.	2.5Y7/3	浅黄色	シルト質細砂（細礫混入）
7.	2.5Y7/3	浅黄色	シルト質細砂（中礫混入）
8.	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質細砂（中礫混入）
9.	10YR6/6	明黄褐色	シルト質細砂（細礫混入）
10.	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質細砂（細礫混入）
11.	2.5Y7/4	浅黄色	シルト質細砂（細礫混入）
12.	7.5YR6/8	橙色	シルト質細砂
13.	2.5Y7/4	浅黄色	シルト質細砂（細礫混入）

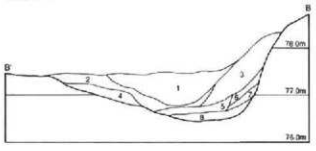


図版4

環壕内橋状遺構



環壕畦2



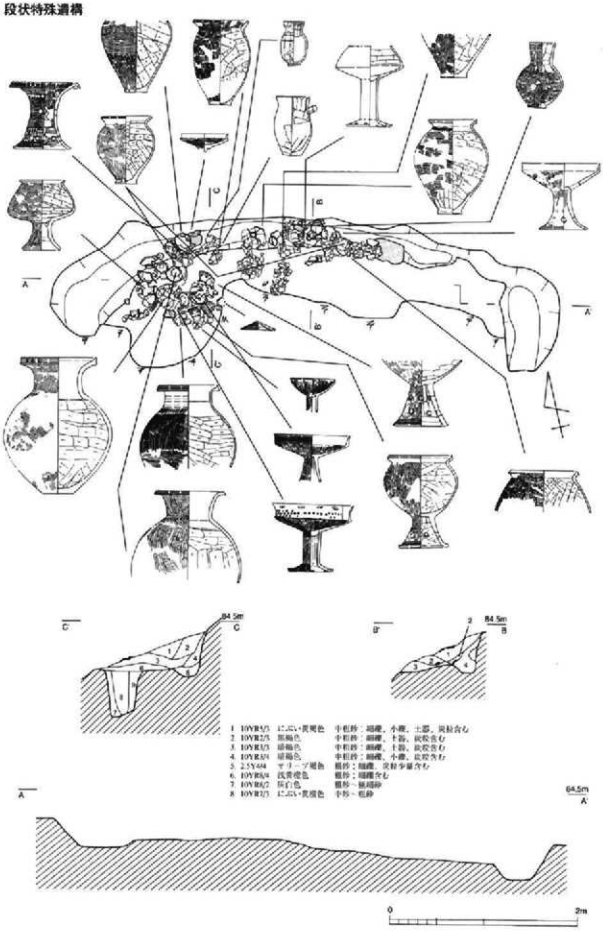
1.	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト質細砂（小礫～中礫多く含む）
2.	10YR5/4	にぶい黄褐色	粗砂（細礫混入）
3.	10YR7/4	にぶい黄橙色	粗砂（細礫混入）
4.	10YR5/6	明黄褐色	粗砂（小礫～中礫を多く含む）
5.	10YR7/2	明黄灰色	粗砂（小礫～中礫を多く含む）
6.	7.5YR7/6	橙色	粗砂（細礫若干含む）
7.	10YR7/3	にぶい黄橙色	粗砂（細礫～小礫混入）
8.	2.5Y5/6	黄褐色	粗砂（中礫を多量に含む）砂面直上に炭層堆積

環壕橋状遺構内土坑断面

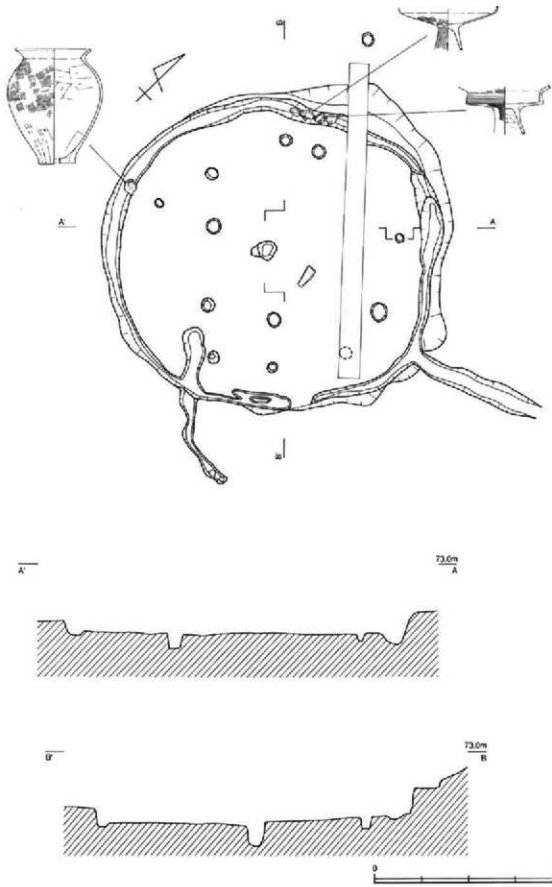
1	5YR2/1	黒褐色	シルト質細砂（炭多量に含む）
2	2.5Y5/4	黄褐色	シルト質細砂（炭含む）
3	2.5Y5/3	黄褐色	シルト質細砂（中礫混入）
4	2.5Y7/6	明黄褐色	シルト質細砂
5	2.5Y7/4	浅黄色	シルト質細砂（細礫混入）
6	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト質細砂（細礫混入）
7	2.5Y7/4	浅黄色	シルト質細砂

図版5

段状特殊遺構

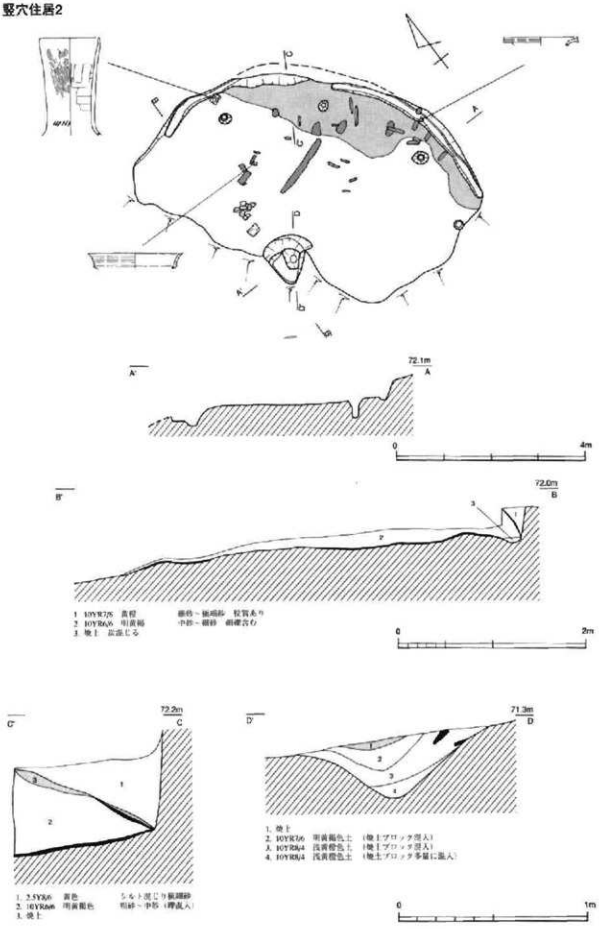

C
C'
84.5m
B
B'
84.5m
1 10YR5/3 にぶい黄褐色 半粘性：細礫、小礫、土器、炭粒含む
2 10YR2/3 黒褐色 半粘性：細礫、土器、炭粒含む
3 10YR3/3 暗褐色 半粘性：細礫、土器、炭粒含む
4 10YR3/4 暗褐色 半粘性：細礫、小礫、炭粒含む
5 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘性：細礫、炭粒少量含む
6 10YR6/4 にぶい橙色 粘性：細礫含む
7 10YR6/2 灰白色 粘性～極粘性
8 10YR3/3 にぶい黄褐色 半粘～粘性
A
A'
64.5m
0
2m

竪穴住居1



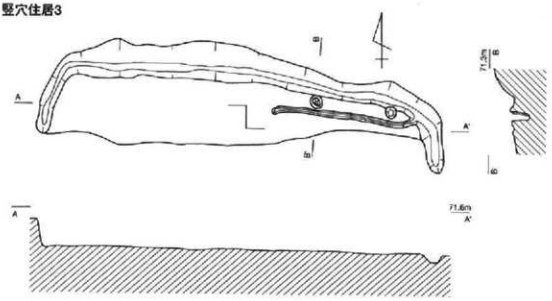
図版7

竪穴住居2

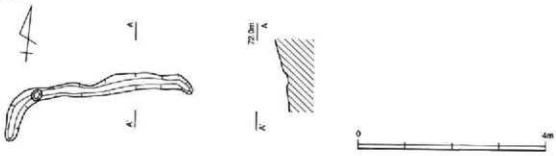


A'
72.1m
A
0
4m
B'
72.0m
B
1 10YR7/6 黄橙 細砂～極細砂 粒質あり
2 10YR6/6 明黄褐 中砂～細砂 細礫含む
3 焼土 広並じる
0
2m
C'
72.2m
C
1. 2.5Y8/6 黄色 シルト混じり極細砂
2. 10YR6/6 明黄褐色 粗砂～中砂（礫混入）
3. 焼土
D'
71.3m
D
1. 焼土
2. 10YR7/6 明黄褐色土 （焼土ブロック混入）
3. 10YR8/4 浅黄橙色土 （焼土ブロック混入）
4. 10YR8/4 浅黄橙色土 （焼土ブロック多量に混入）
0
1m

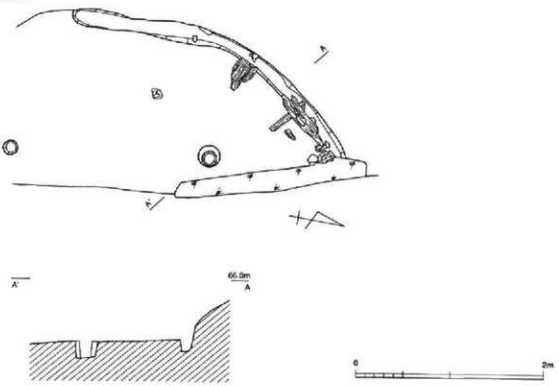
竪穴住居3



竪穴住居4

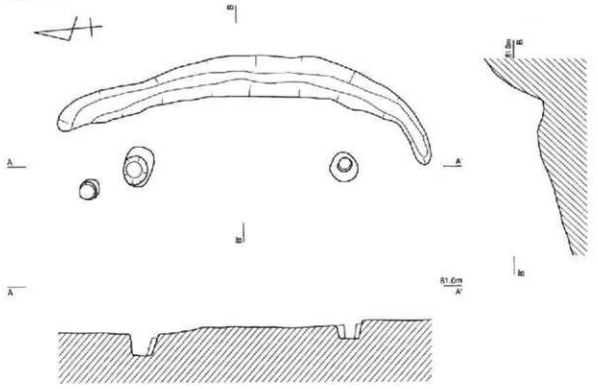


竪穴住居5

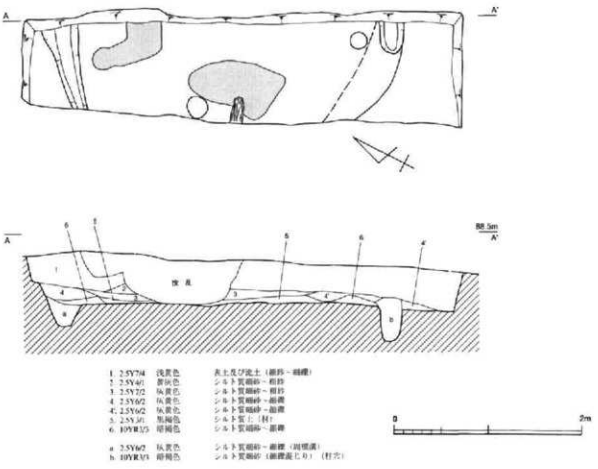


図版9

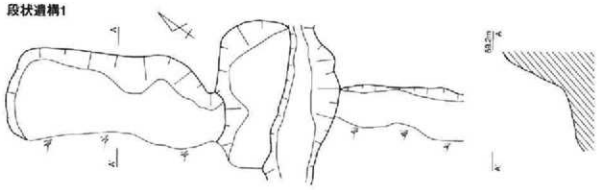
竪穴住居6



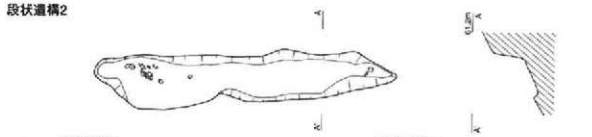
竪穴住居7



段状遺構1

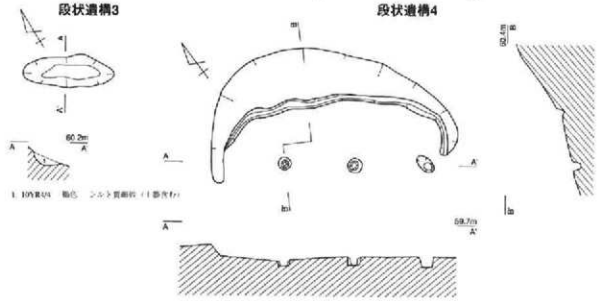


段状遺構2

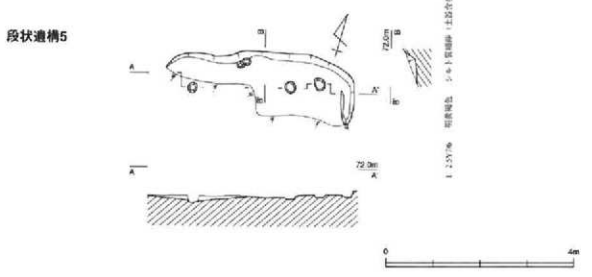


段状遺構3

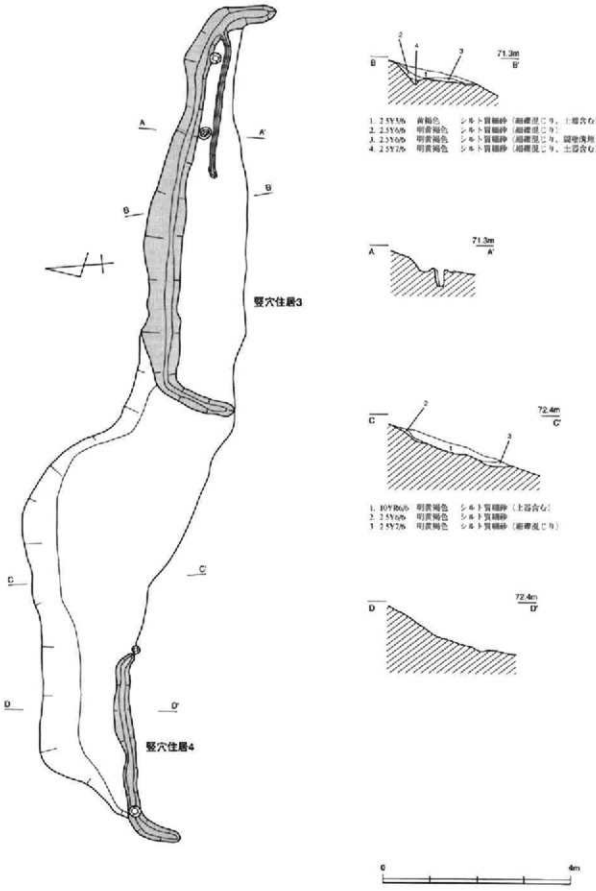
段状遺構4



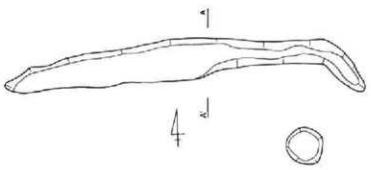
段状遺構5



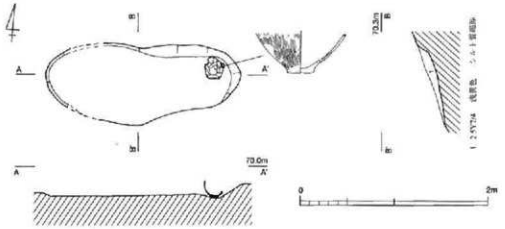
段状遺構6



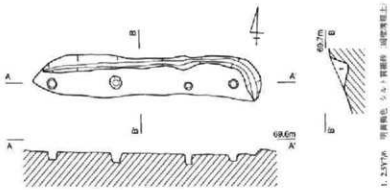
段状遺構7



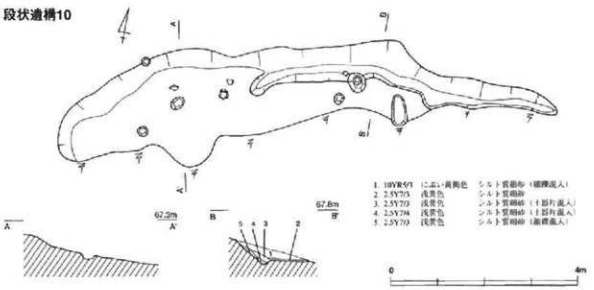
段状遺構8



段状遺構9

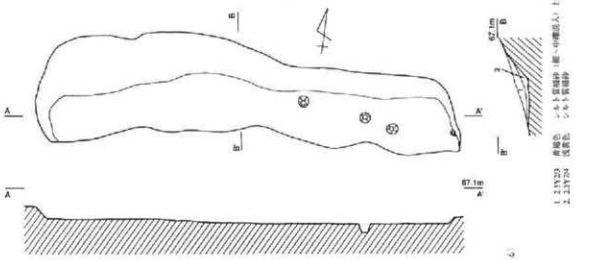


段状遺構10

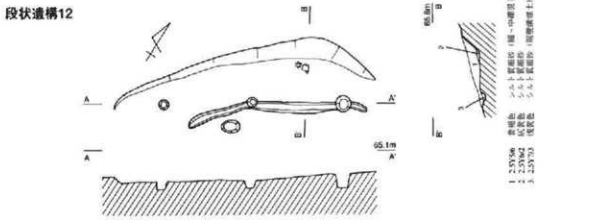


図版13

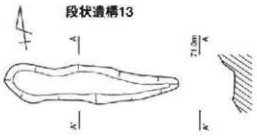
段状遺構11



段状遺構12

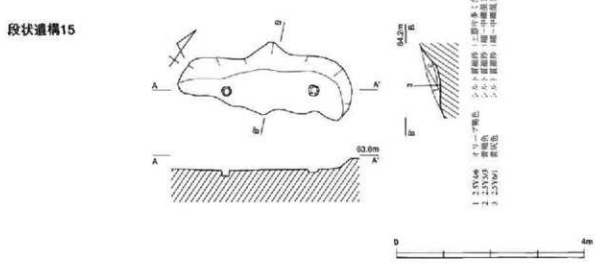


段状遺構13

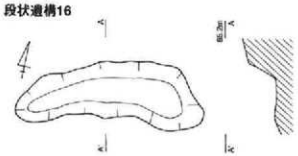


段状遺構14

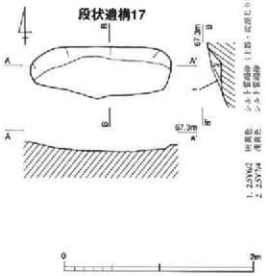
段状遺構15



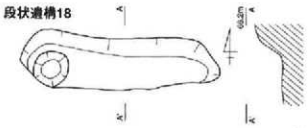
段状遺構16



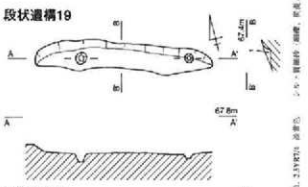
段状遺構17



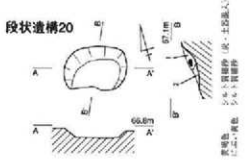
段状遺構18



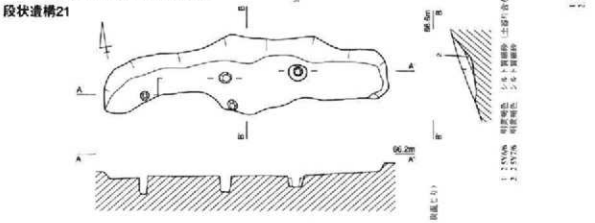
段状遺構19



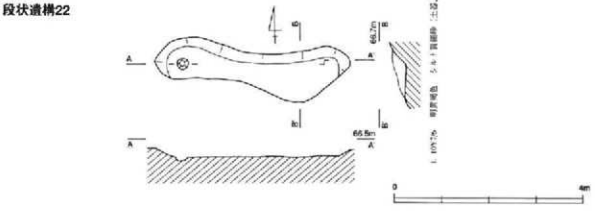
段状遺構20



段状遺構21

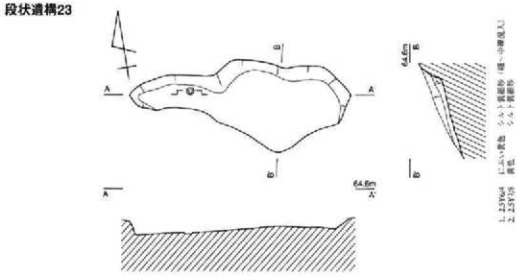


段状遺構22

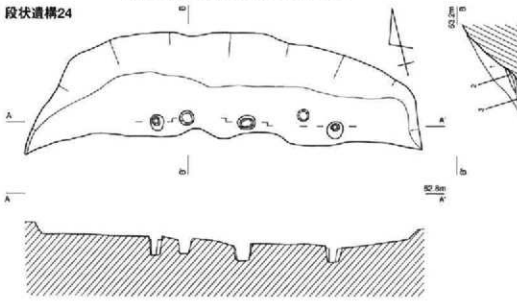


図版15

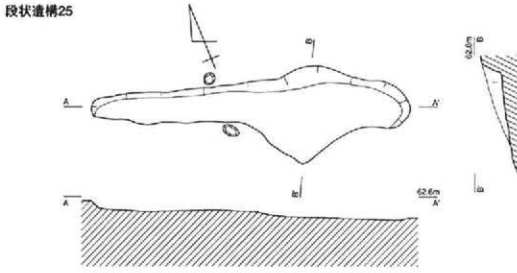
段状遺構23



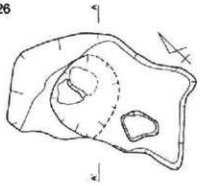
段状遺構24

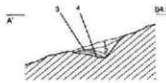


段状遺構25



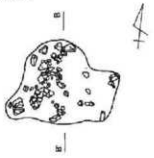
段状遺構26

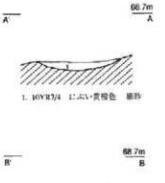




1. 2.5Y6/6　明黄褐色　シルト質細砂（炭、焼土、土器混じり）
2. 10R4/8　赤色　シルト質細砂（焼土ブロック）
3. 10YR4/8　赤色　シルト質細砂（焼土ブロック含入、下面に炭層あり）
4. 2.5Y2/1　黒色　炭層

段状遺構27



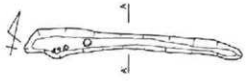


1. 10YR7/4　にぶい黄橙色　細砂

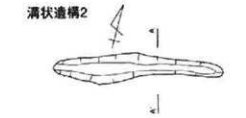
1. 10YR8/6　黄橙色　細砂

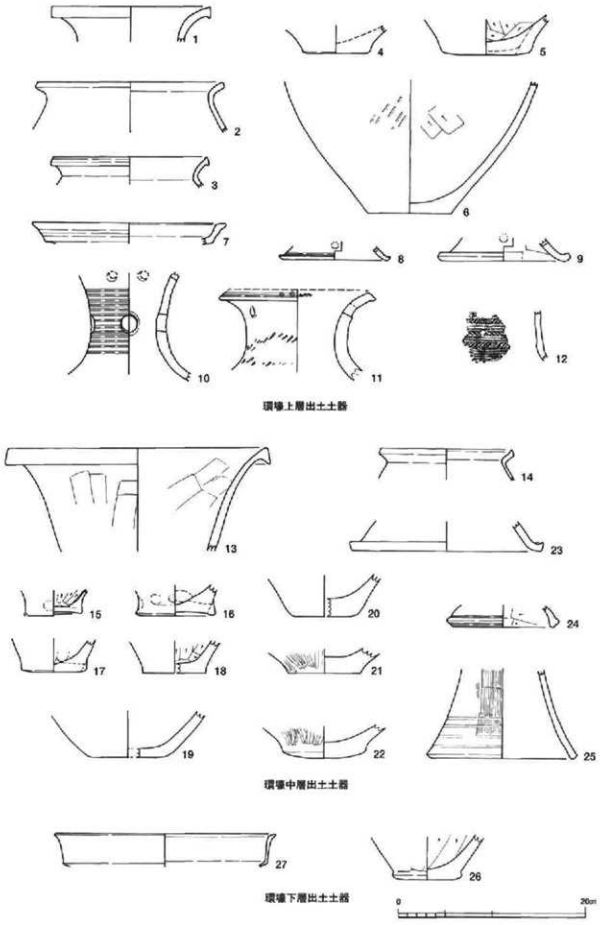
土坑1

溝状遺構1

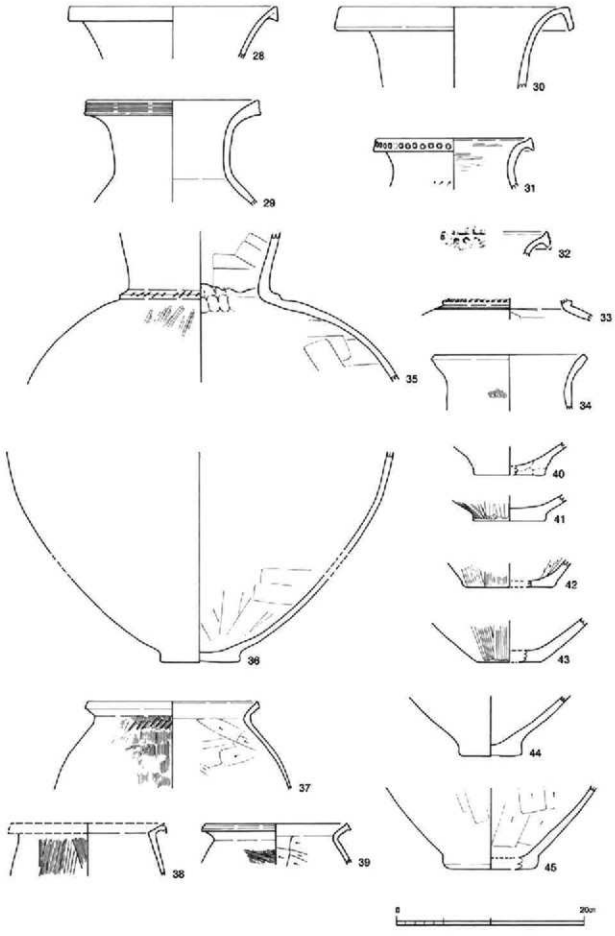


溝状遺構2

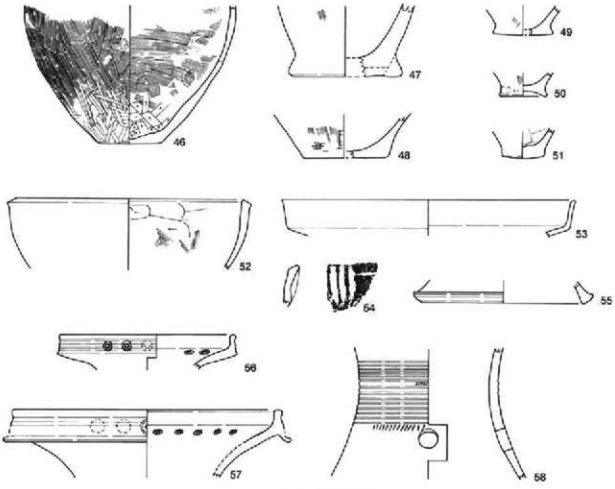



1
4
5
2
6
3
7
8
9
10
11
12
環壕上層出土土器
13
14
23
15
16
20
24
17
18
21
19
22
25
環壕中層出土土器
27
26
環壕下層出土土器
0
20cm

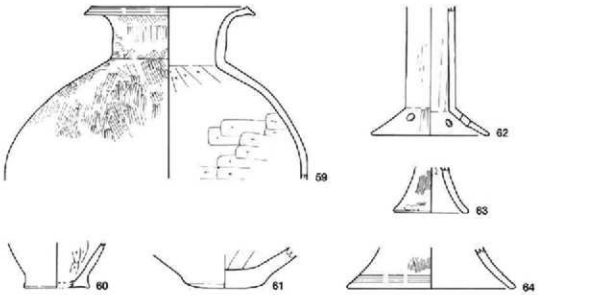
環壕出土土器 ①



環壕出土土器 ②（最下層）



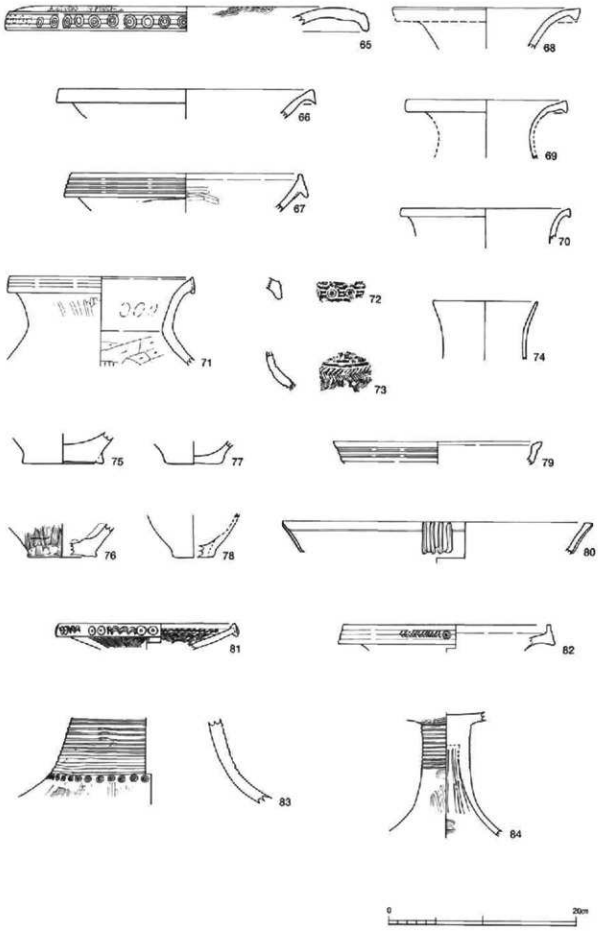
環壕最下層出土土器



環壕内橋状遺構付近土坑出土土器

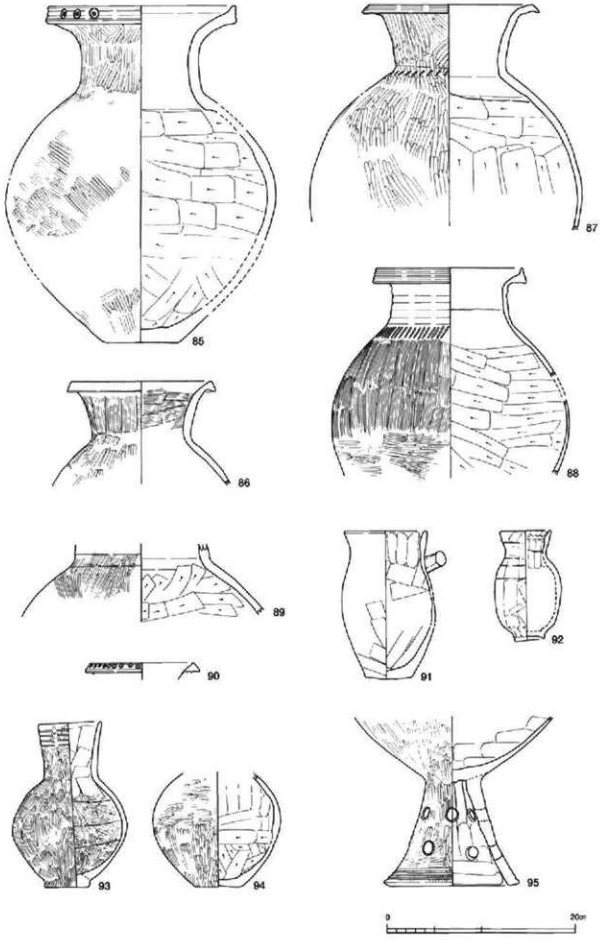
0 20cm

環壕出土土器 ③

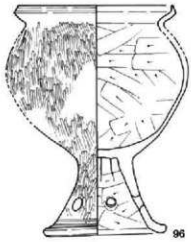


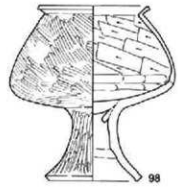
環壕出土土器 ④

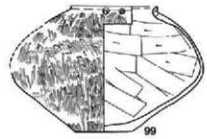
図版21

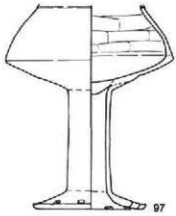


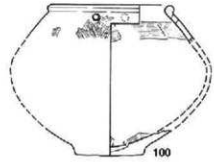
段状特殊遺構出土土器 ①

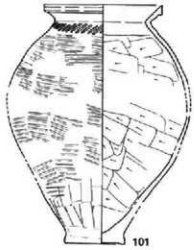


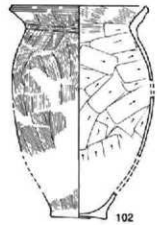






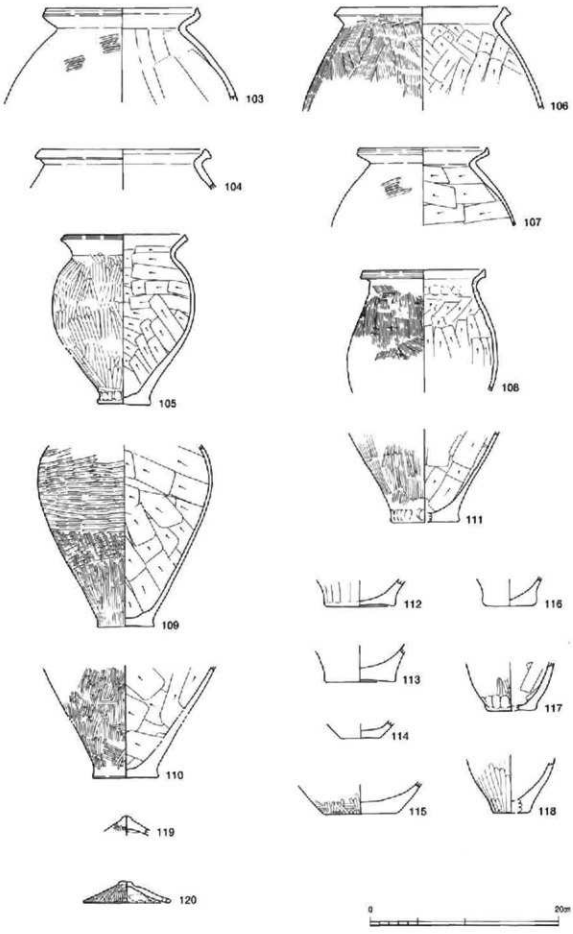




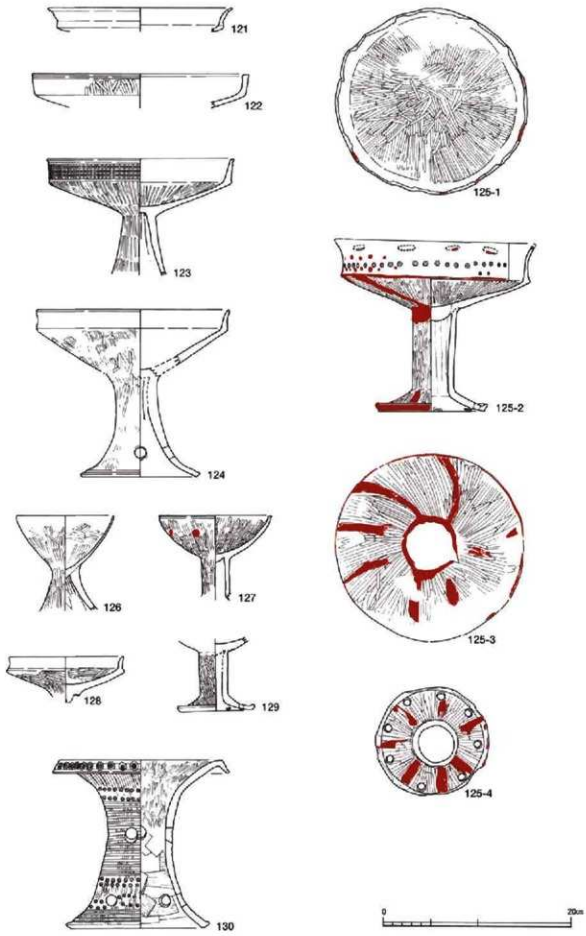


段状特殊遺構出土土器 ②

図版23

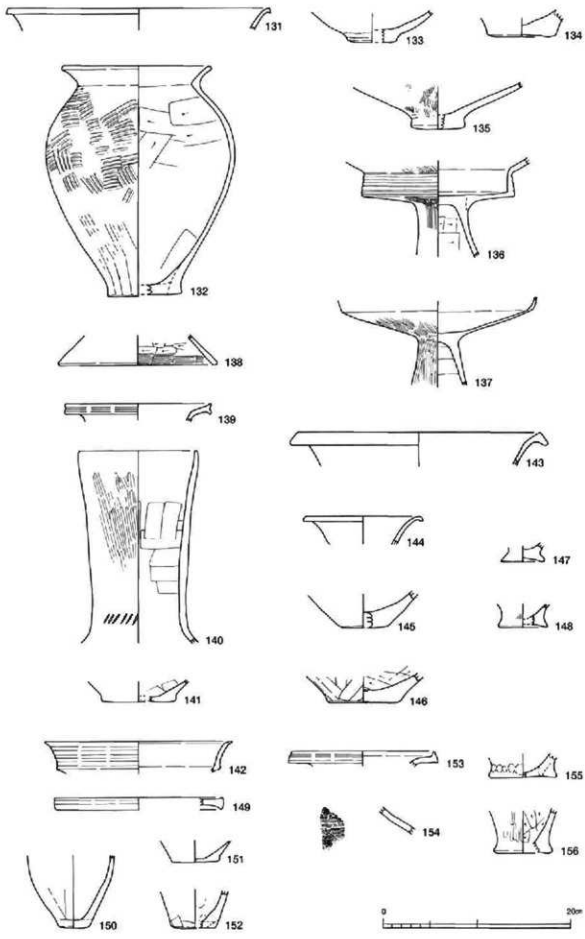


段状特殊遺構出土土器　③

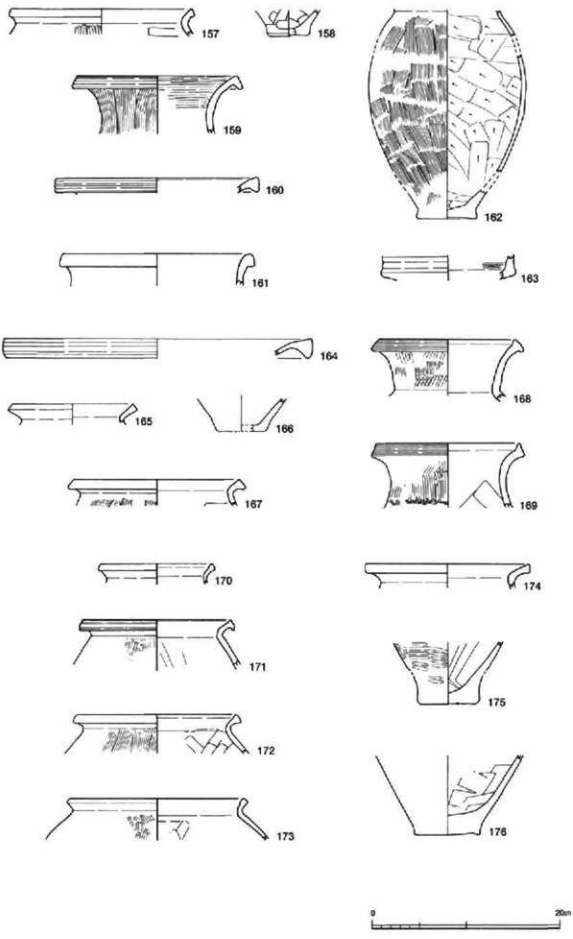


段状特殊遺構出土土器 ④

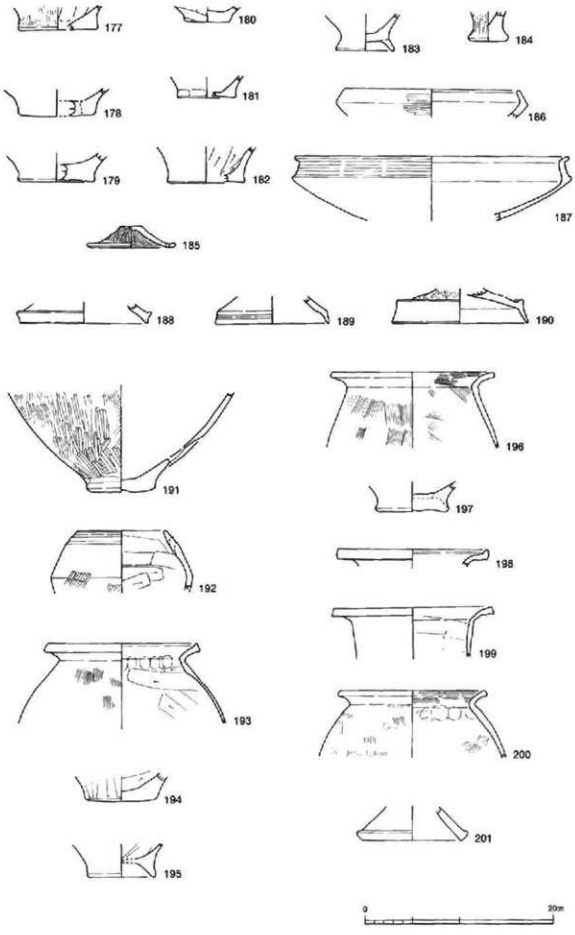
図版25



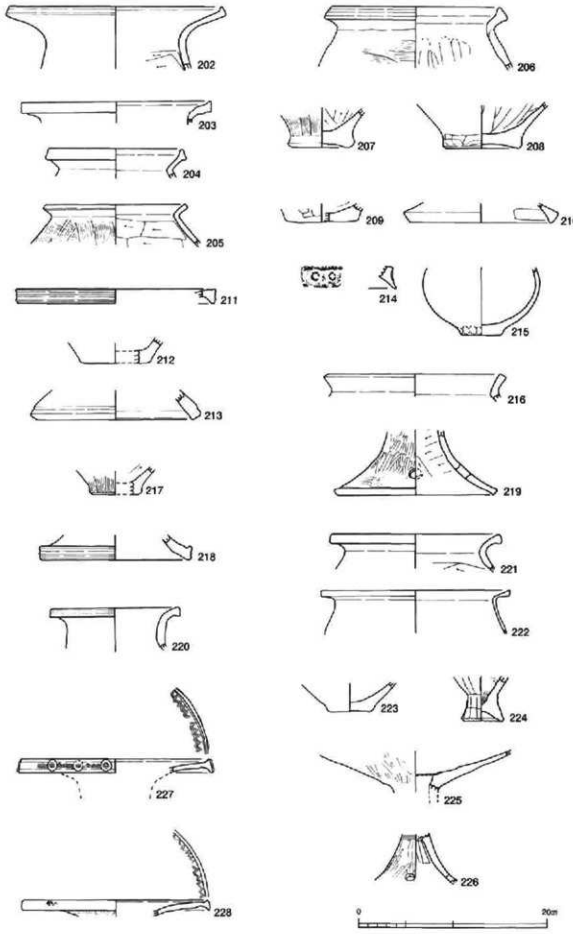
竪穴住居出土土器 ①


157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
0
20cm

段状遺構出土土器 ①

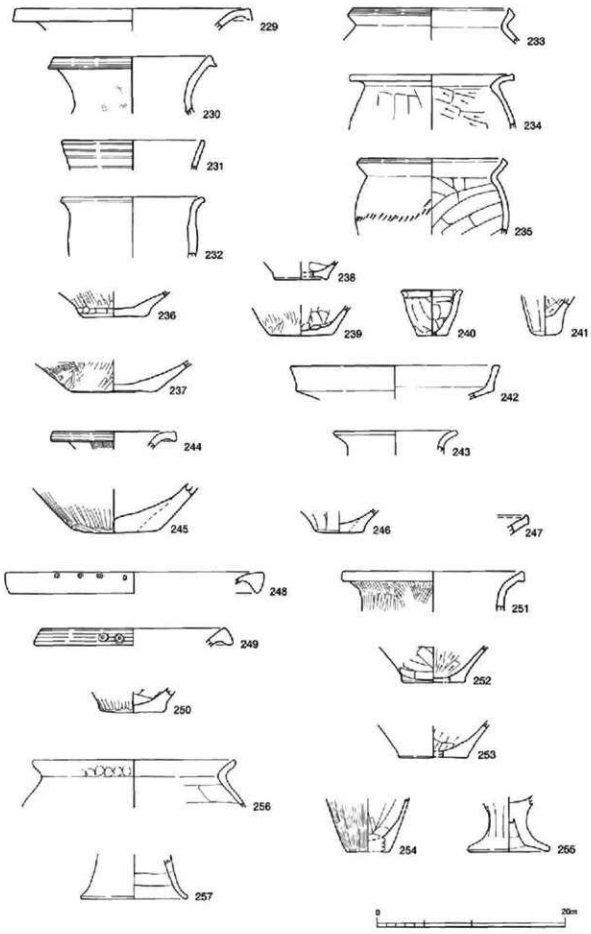

177
180
183
184
178
181
186
179
182
187
185
188
189
190
191
196
197
192
198
199
193
200
194
201
195
0
20cm

段状遺構出土土器 ②

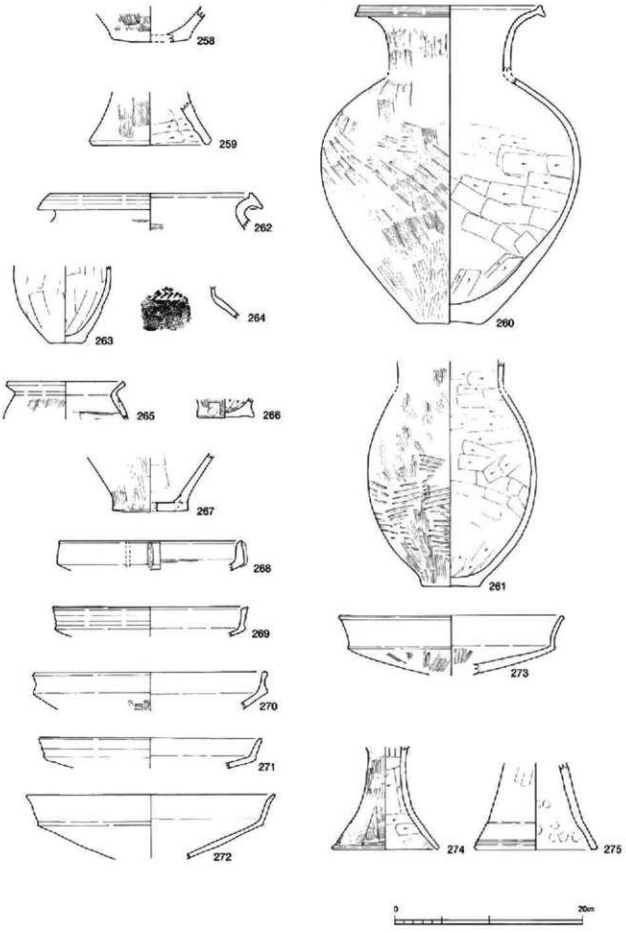

202
206
203
207
208
204
205
209
210
211
214
215
212
216
213
219
217
221
218
222
220
223
224
227
225
226
228
0
20cm

段状遺構出土土器 ③

図版29

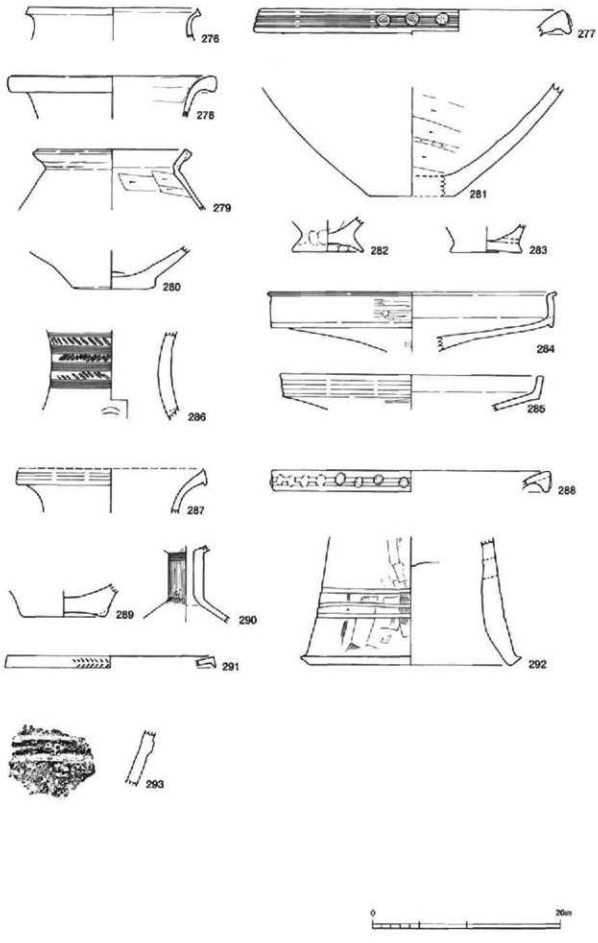


段状遺構出土土器 ④

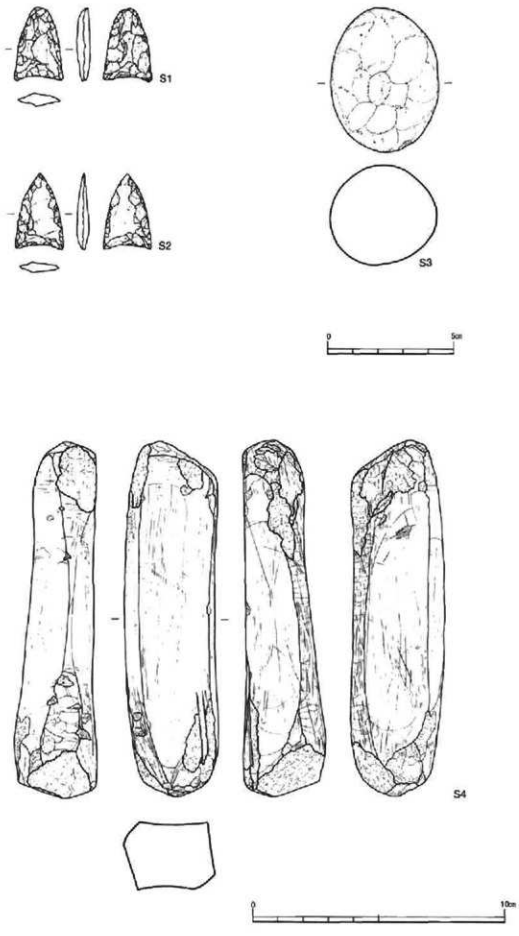


その他の遺構・谷部落ち込み出土土器

図版31

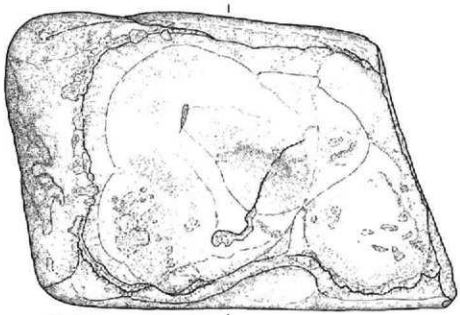


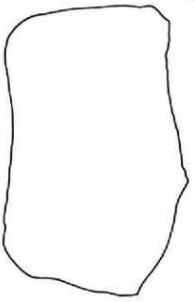
包含層・表採出土土器



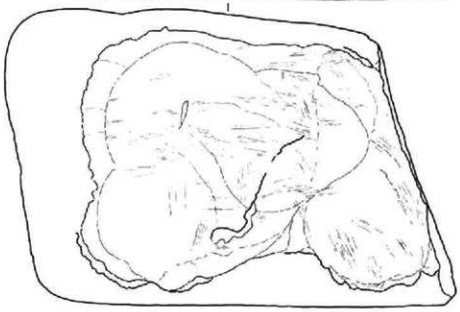
出土石器 ①

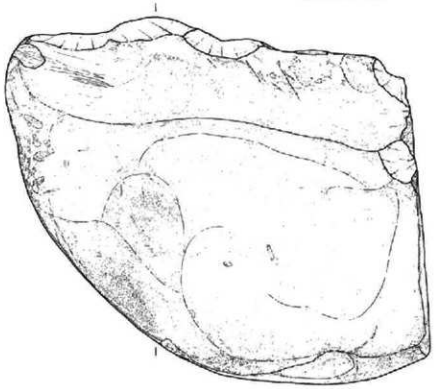
出土石器　②

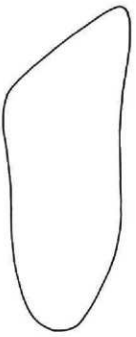




S6

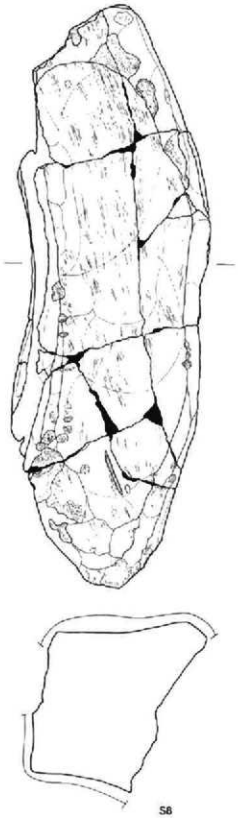




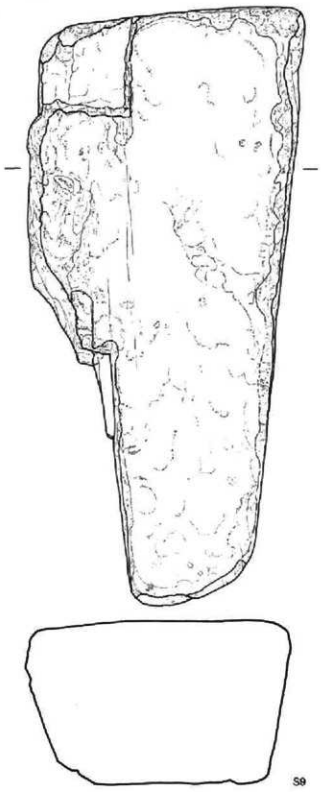


出土石器 ③

S7



出土石器 ④

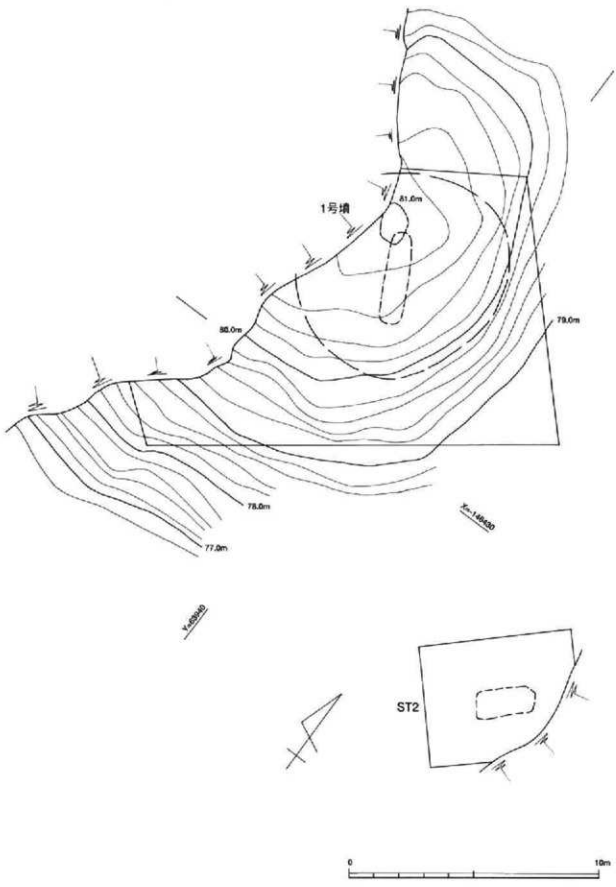


出土石器 ⑤

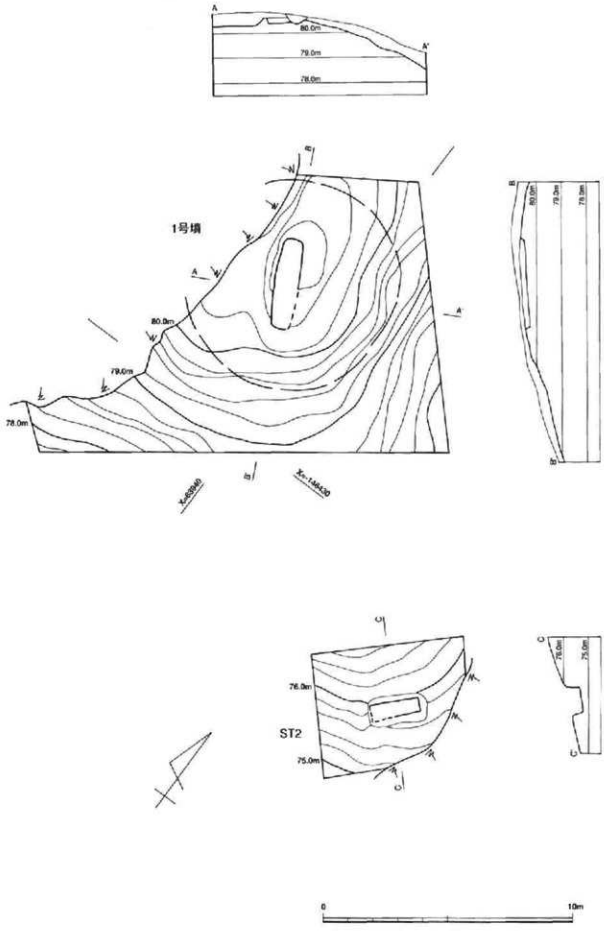
池ノ内群集墳

図　　版

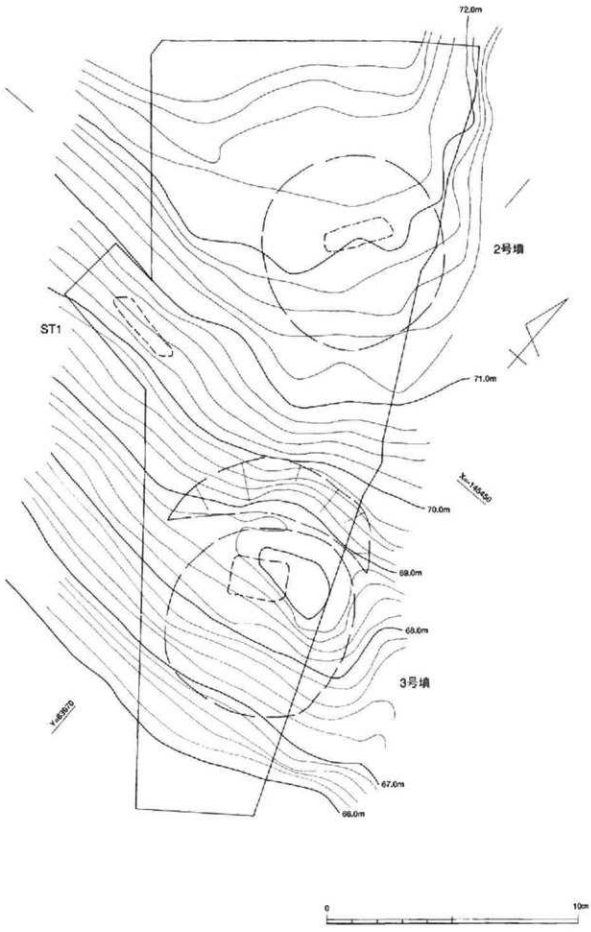
池ノ内群集墳位置図（S=1/2,500）



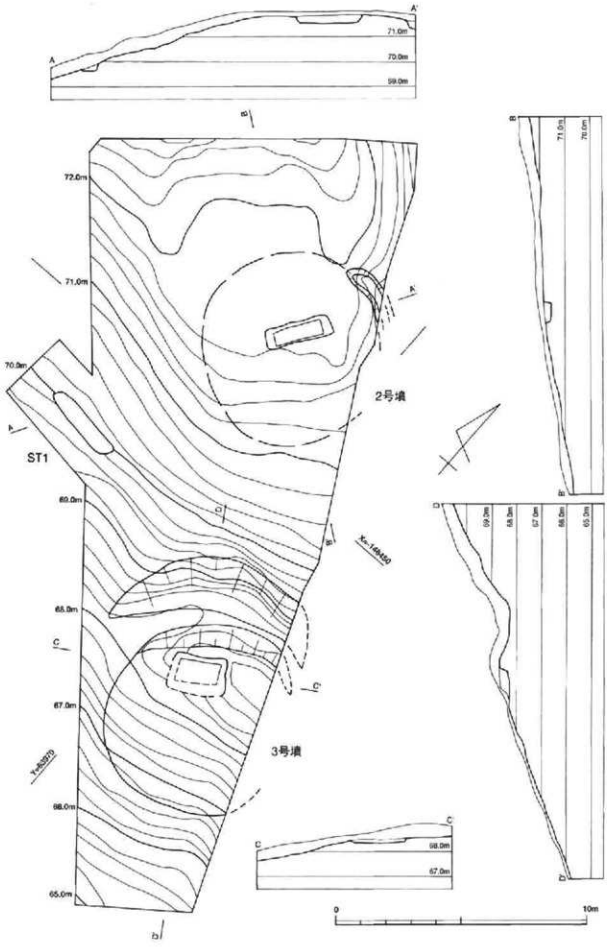
1号墳墳丘測量図（調査前）



1号墳墳丘測量図（調査後）

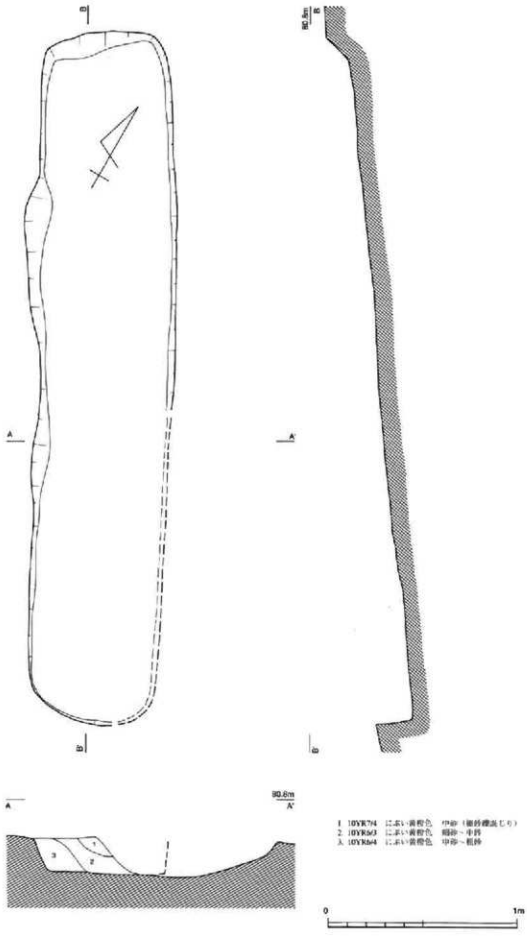


2・3号墳墳丘測量図（調査前）

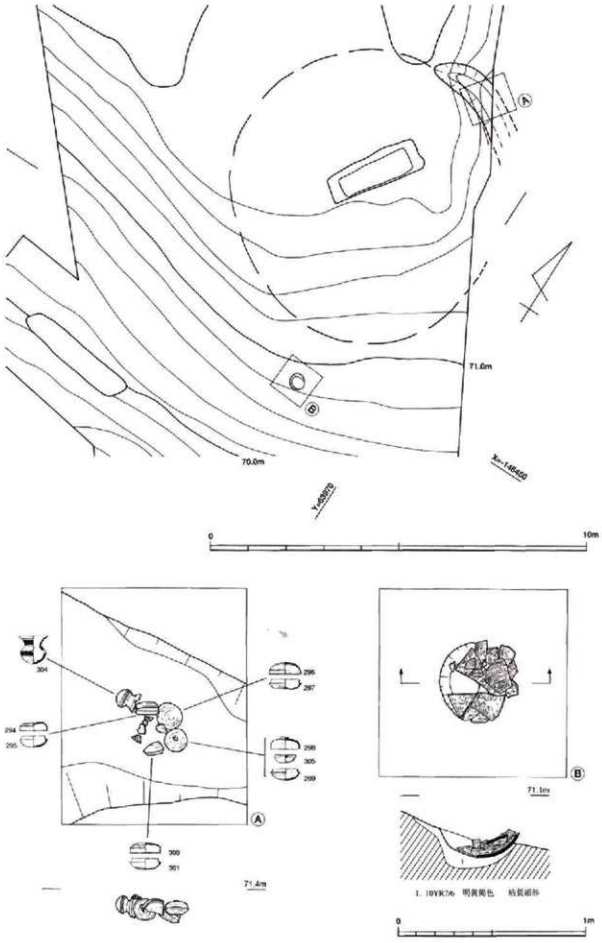


2・3号墳墳丘測量図（調査後）

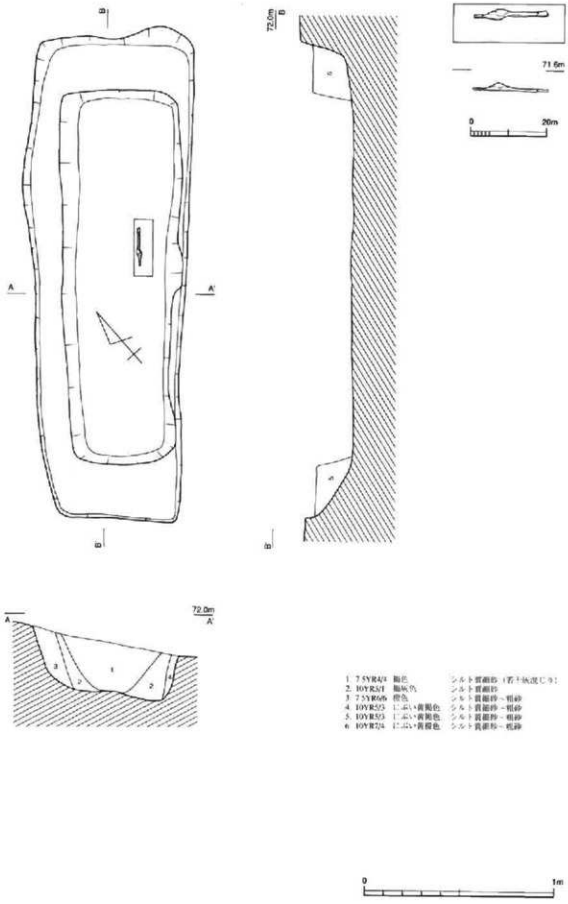
図版42



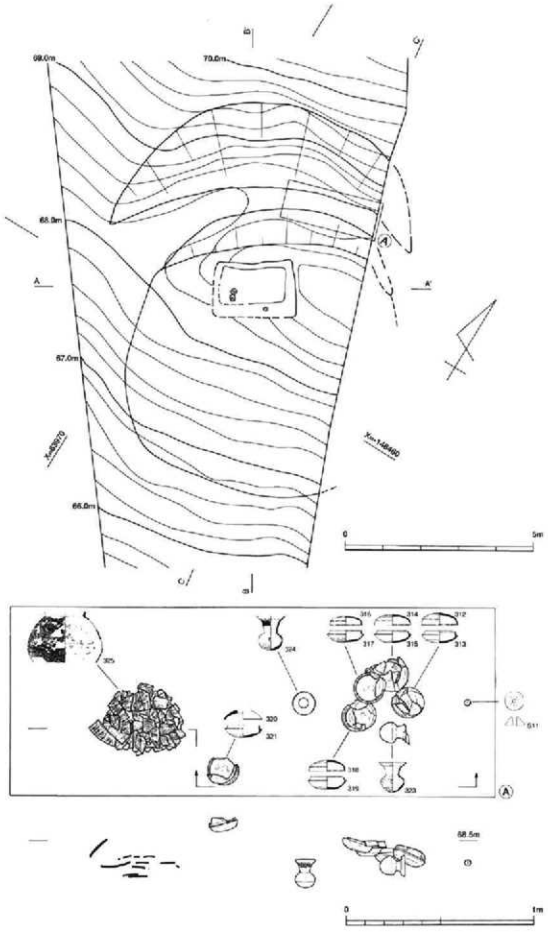
1号墳埋葬施設実測図



2号墳測量図および遺物出土状況図


B
A
A'
B'
72.0m
B
B'
71.6m
0
20m
72.0m
A
A'
1
2
3
4
5
6
1. 7.5YR4/4 褐色 シルト質細砂（若干紙混じり）
2. 10YR5/1 褐灰色 シルト質細砂
3. 7.5YR6/6 橙色 シルト質細砂～粗砂
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト質細砂～粗砂
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト質細砂～粗砂
6. 10YR7/4 にぶい黄橙色 シルト質細砂～粗砂
0
1m

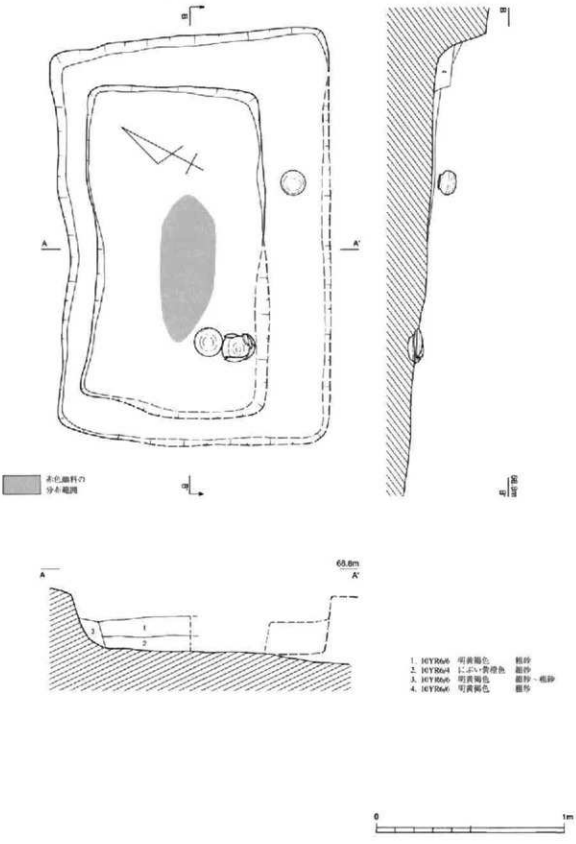
2号墳埋葬施設実測図



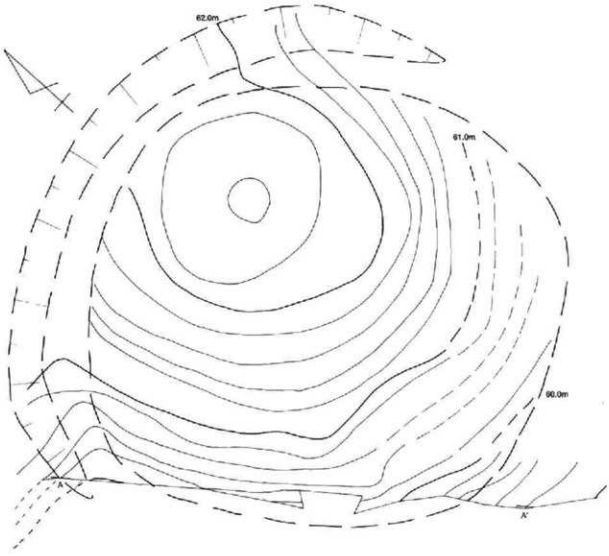
3号墳測量図および遺物出土状況図

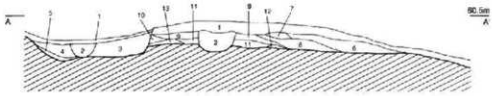
図版46

3号墳周溝埋土断面および墳丘盛土断面図


A
A'
B
B'
赤色顔料の
分布範囲
68.8m
1. 10YR6/6 明黄褐色 粗砂
2. 10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂
3. 10YR6/6 明黄褐色 細砂～粗砂
4. 10YR6/6 明黄褐色 細砂
0
1m

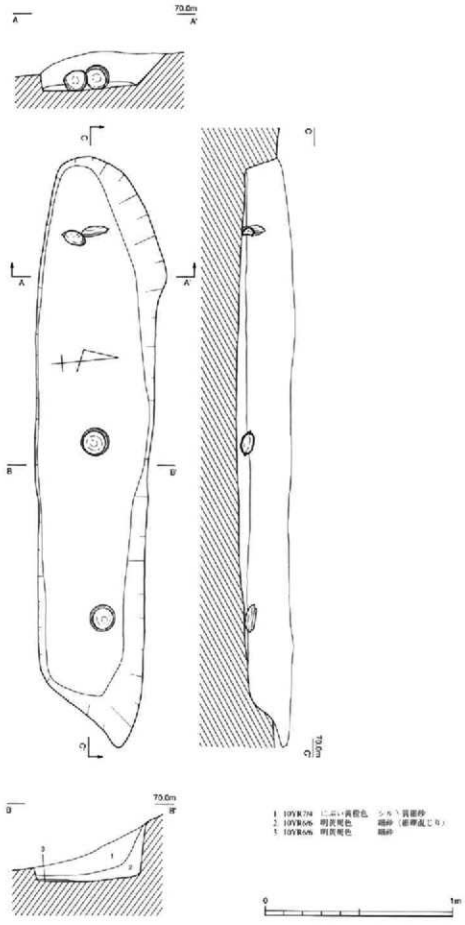
3号墳埋葬施設実測図



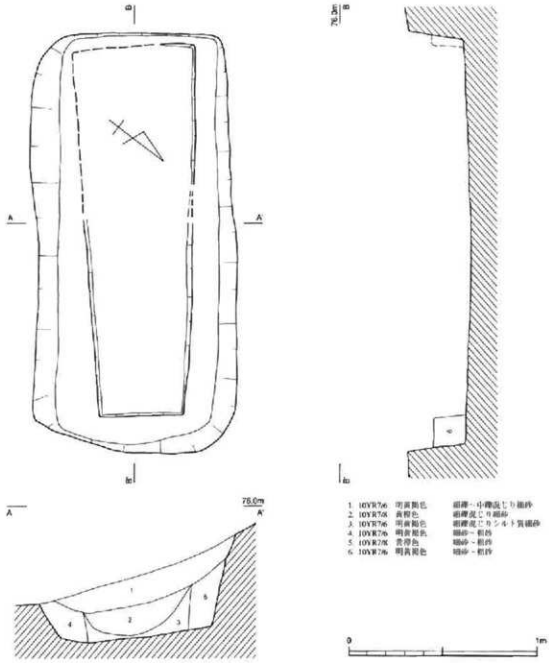


1. 表土
2. 板の復元
3. 地産りで動いた土
4. 10YR7/4　にぶい黄橙色　シルト質細砂
5. 10YR6/6　明黄褐色　シルト質細砂（細礫～半礫混じり）
6. 10YR7/3　にぶい黄橙色　シルト質細砂（細礫混じり）
7. 10YR6/6　明黄褐色　シルト質細砂（細礫混じり）
8. 10YR7/4　にぶい黄橙色　シルト質細砂～細礫
9. 10YR5/6　黄褐色　シルト質細砂
10. 10YR7/4　にぶい黄橙色　シルト質細砂（細礫混じり）
11. 10YR7/4　にぶい黄橙色　シルト質細砂
12. 10YR6/6　明黄褐色　シルト質細砂（細礫混じり）
13. 10YR5/6　黄褐色　シルト質細砂～細礫

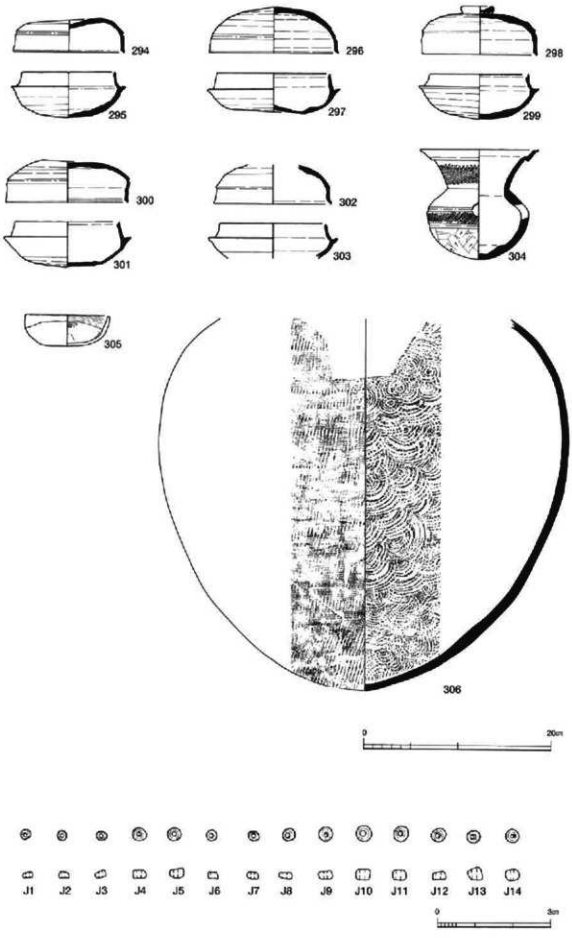
4号墳墳丘測量図および断面図



ST 1 実測図

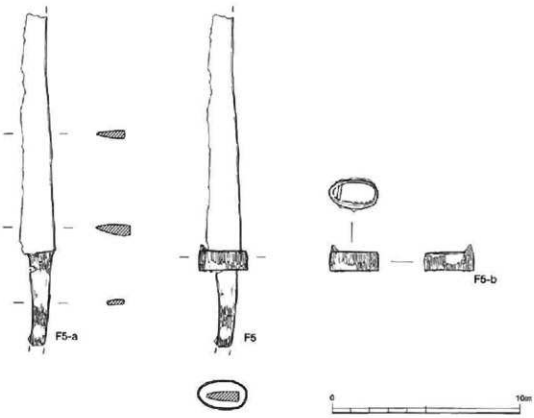

A
A'
75.0m
1
2
3
4
5
1. 10YR7/6 明黄褐色 細礫～中礫混じり細砂
2. 10YR7/6 黄橙色 細礫混じり細砂
3. 10YR7/6 明黄褐色 細礫混じりシルト質細砂
4. 10YR7/6 明黄褐色 細砂～粗砂
5. 10YR7/6 黄橙色 細砂～粗砂
6. 10YR7/6 明黄褐色 細砂～粗砂
0
1m

ST 2 実測図

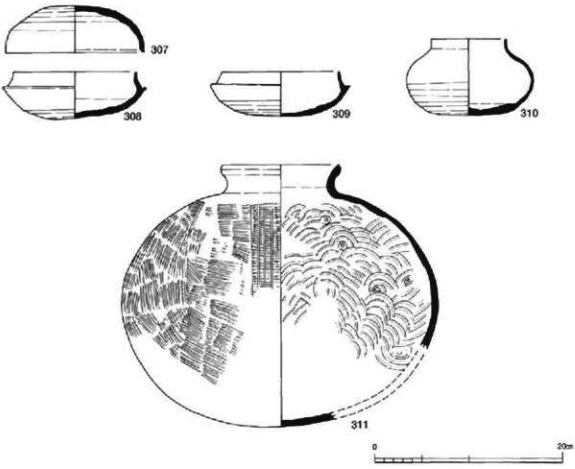


2号墳出土土器およびガラス玉

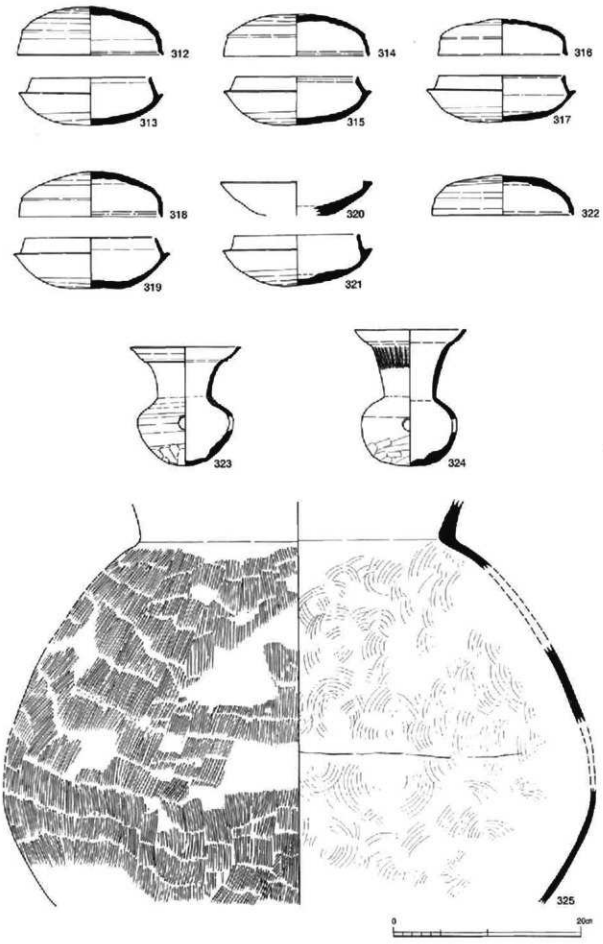
図版52



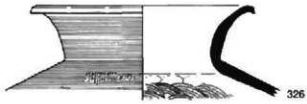
2号墳棺内出土金属器

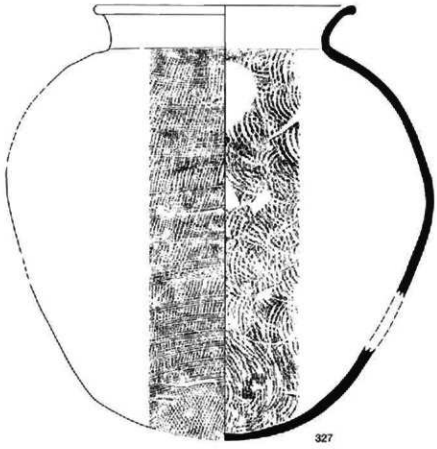


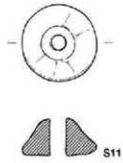
3号墳埋葬施設・墳頂出土土器



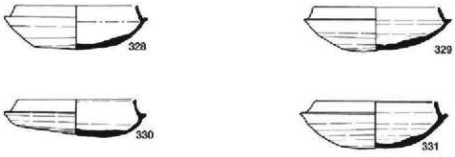
3号墳周溝出土土器



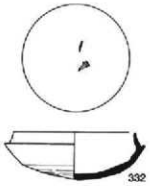




3号墳周溝出土土器および石製品



ST 1 出土土器



5 号墳表採の土器

表山遺跡
写真図版

遺跡全景（南西上空から）

遺跡全景（西上空から）

遺跡北部（垂直写真）

遺跡中央部（垂直写真）

遺跡南部（垂直写真）

環壕完掘状況
（南東から）

環壕東側
（南西から）

環壕断面①
（西から）

環壕西側
（南から）

環壕断面②
（南東から）

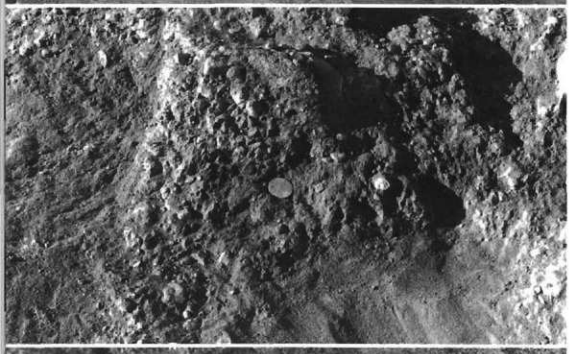
環壕断面②
（北西から）

環壕断面④
（南から）

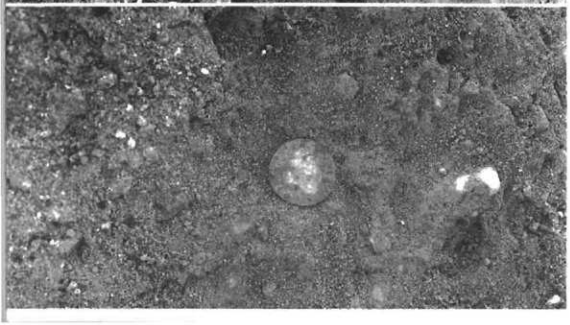
環壕内橋状遺構付近
（南東から）

環壕内橋状遺構付近断面
（東から）

環壕内橋状遺構
（南から）



鏡出土状況



鏡出土状況

上：段状特殊遺構
土器検出状況
（南から）

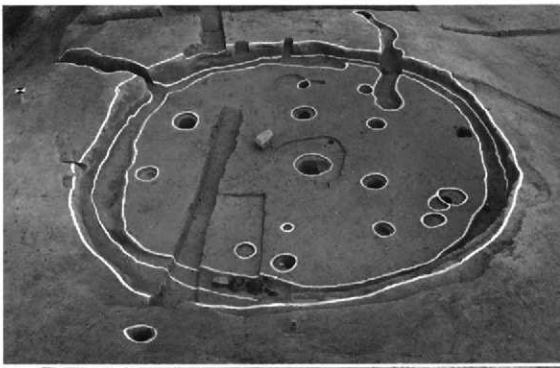
中：段状特殊遺構
掘削状況①
（東から）

左下：段状特殊遺構
掘削状況②
（東から）
右下：段状特殊遺構
上層土器

上：段状特殊遺構
土器出土状況
（南から）

中：段状特殊遺構
完掘状況

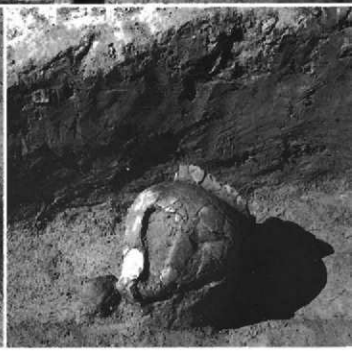
左下：段状特殊遺構
柱穴断面
（東から）
右下：炭化材アップ
（東から）



上：竪穴住居1
完掘状況
（北西から）

中：竪穴住居1
完掘状況
（南東から）

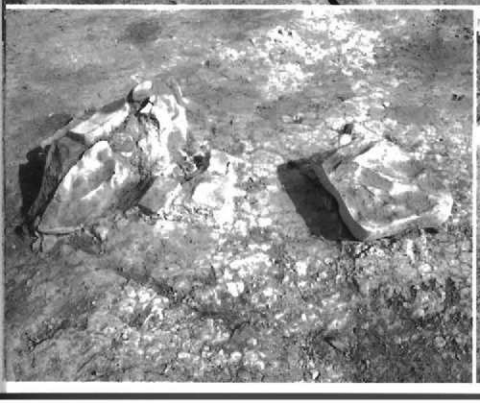
左下：竪穴住居1
遺物出土状況
（北西から）
右下：竪穴住居1
遺物出土状況
（北東から）



上：竪穴住居２
炭化材検出状況
（南東から）

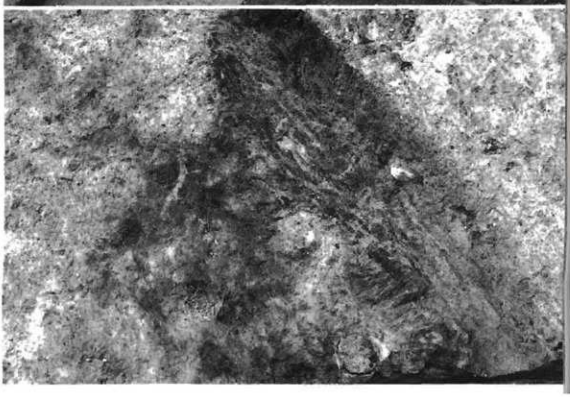
中：竪穴住居２
完掘状況
（南東から）

左下　及び　右下
竪穴住居２
遺物出土状況
（東から）



竪穴住居3
（西から）

竪穴住居5
検出状況
（南から）



竪穴住居5
炭化材検出状況
（東から）

竪穴住居5
完掘状況
（南から）

竪穴住居5
断面
（西から）

竪穴住居5
完掘状況
（南から）

竪穴住居6
（南から）

竪穴住居7
断面
（南西から）

竪穴住居7
（南から）

調査区南部遺構群
（南西から）

調査区中央部遺構群
（南から）

調査区中央部遺構群
（南西から）

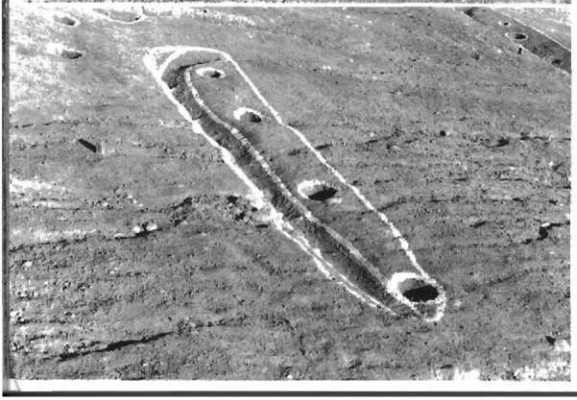
調査区中央部～南部
遺構群
（北西から）

調査区中央部遺構群
（東から）

調査区中央部遺構群
（北東から）

段状遺構4
（北から）

段状遺構6
（北西から）



段状遺構9
（北西から）

段状遺構10
（西から）

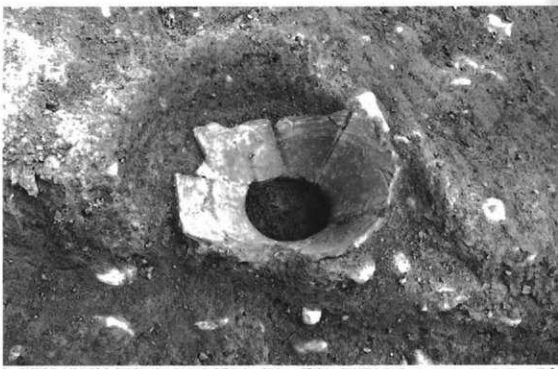
段状遺構12
（南西から）

段状遺構15
（西から）

段状遺構23
（北西から）

段状遺構24
（北西から）

段状遺構27
（南東から）



土坑1出土状況
（西から）

谷部包含層内土器
出土状況
（南西から）

谷部包含層内土器
出土状況
（北西から）

現地説明会風景

上：環壕土層剥ぎ取り風景
左：電気探査実施風景

62

59

63

環壕橋状遺構土坑内出土土器（59, 62, 63）

6

11

16

17

13

環壕上層・中層出土土器

28

34

29

35

30

36

31

48

44

環壕最下層出土土器 ①

45

57

50

51

46

56

環壕最下層出土土器 ②

69

65

77

81

83

82

84

環壕内出土土器一括

85

88

86

89

90

87

94

91

92　　93

段状特殊遺構出土土器　②

95

98

97

99

100

106

103

段状特殊遺構出土土器 ③

101

105

107

102

108

段状特殊遺構出土土器 ④

109

112

113

110

114

116

111

120

段状特殊遺構出土土器 ⑤

123

125

127

126

124

128

段状特殊遺構出土土器 ⑥

96

129　130

段状特殊遺構出土土器 ⑦

132

136

137

竪穴住居跡1出土土器

140

竪穴住居跡2出土土器

150

152

竪穴住居跡5出土土器

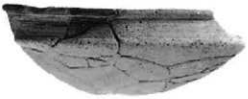
159

248

169

162

175



187

176

191

段状遺構出土土器 ①

195

196

202

208

215

207

219

239

245

255

段状遺構出土土器 ②

224

241

235

230

220

228

227

258

259

上：段状遺構出土土器 ③
下：その他の遺構（258, 259）

260

261

273

266

274

263

谷部落ち込み等出土土器

279

283

280

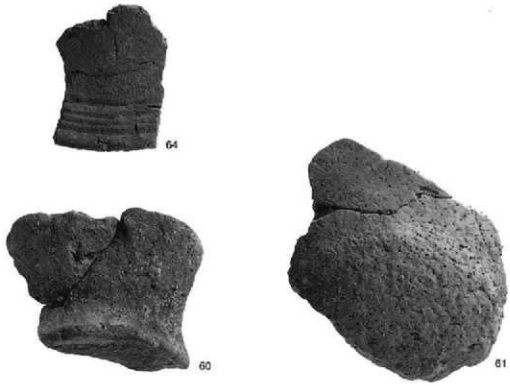
284

包含層出土土器

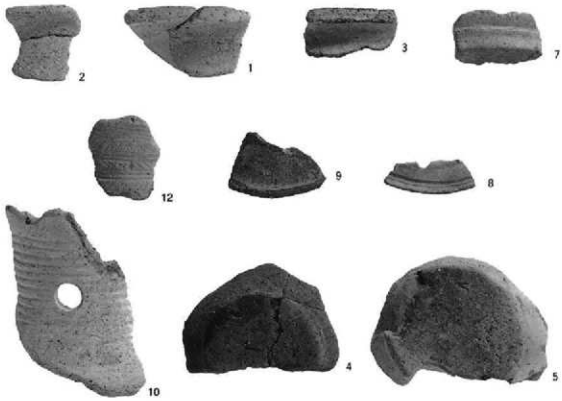
288

293

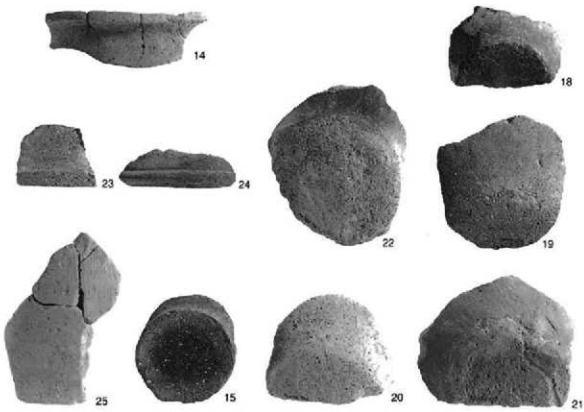
表採出土土器



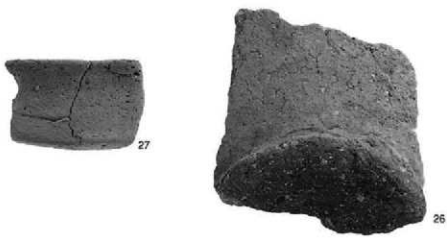
環濠橋状遺構土坑内出土土器



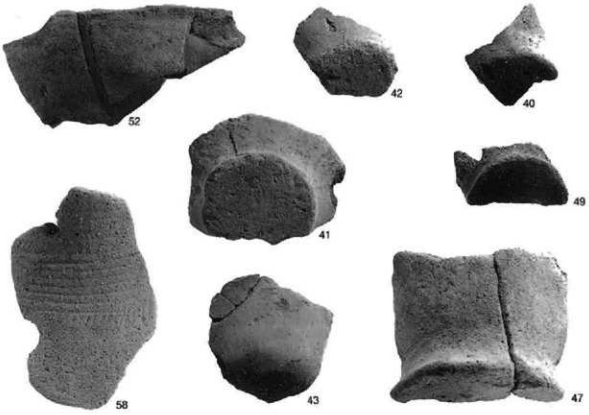
環濠上層出土土器



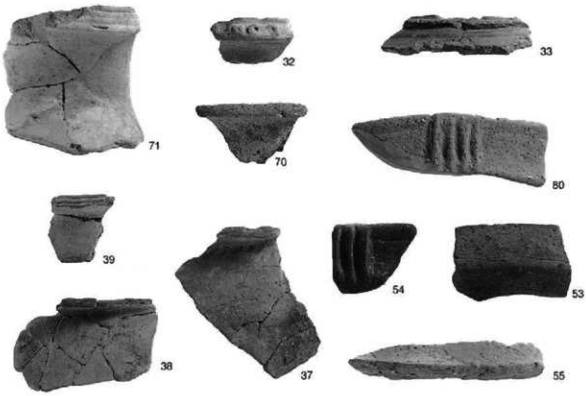
環壕中層出土土器



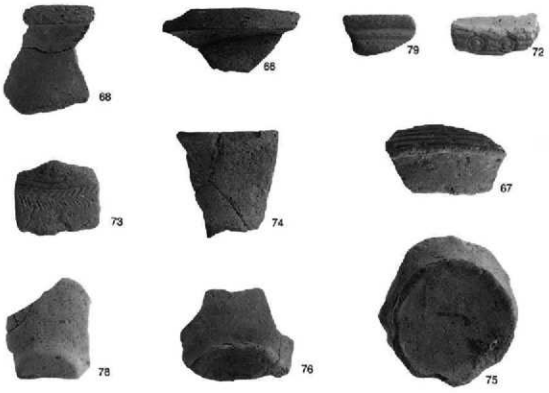
環壕下層出土土器



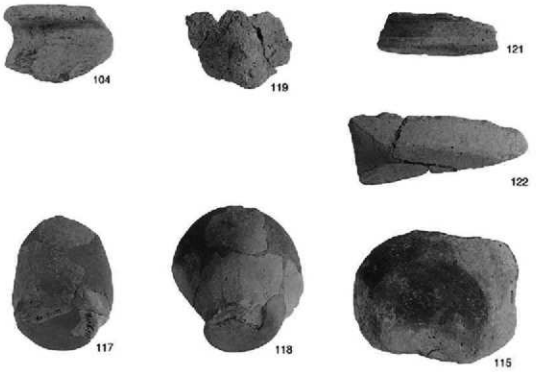
環壕最下層出土土器



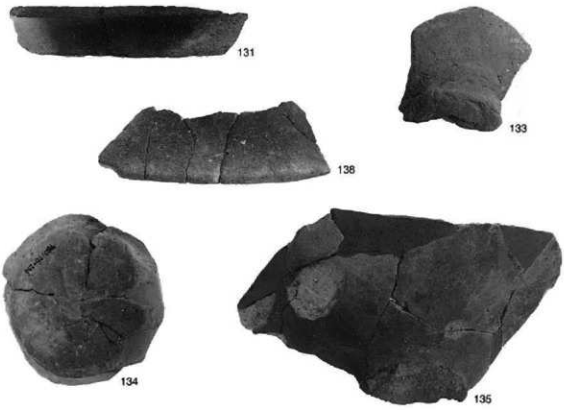
環壕内出土土器及び最下層出土土器一括



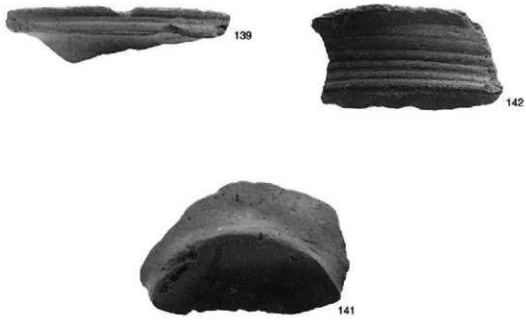
環壕内出土土器一括



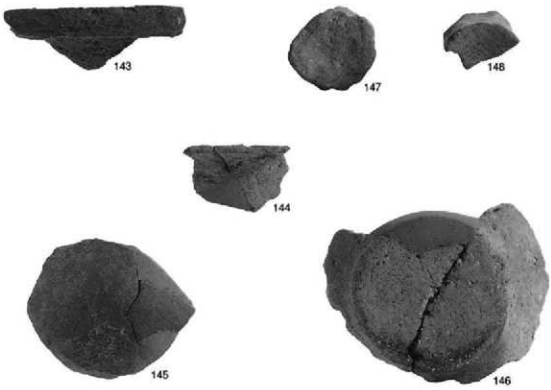
段状特殊遺構出土土器



竪穴住居1出土土器

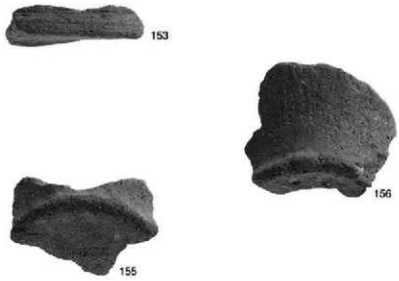


竪穴住居2出土土器

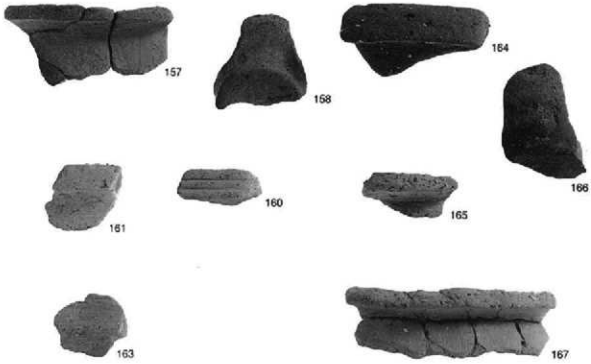


竪穴住居3出土土器

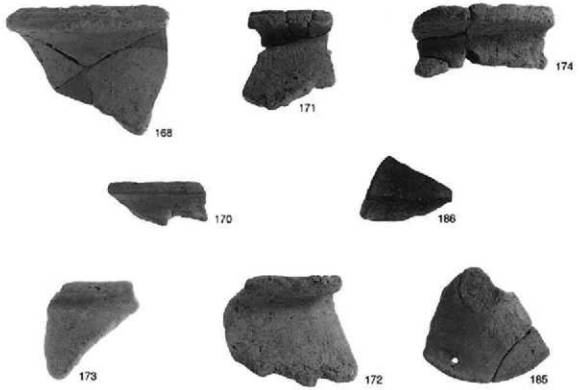
竪穴住居5出土土器



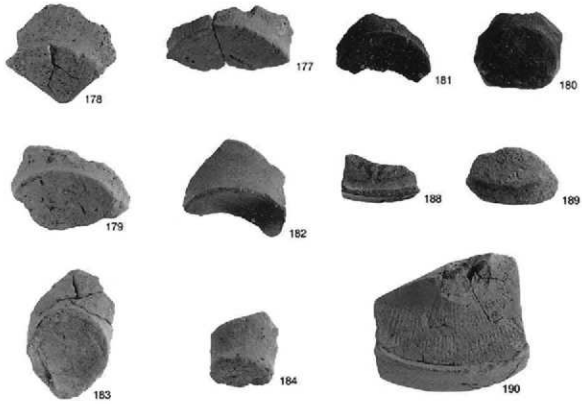
竪穴住居７出土土器



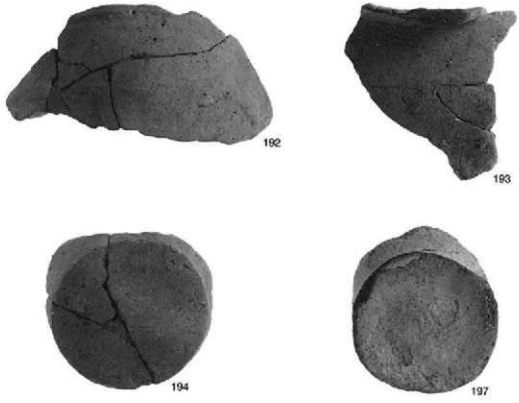
段状遺構出土土器　①



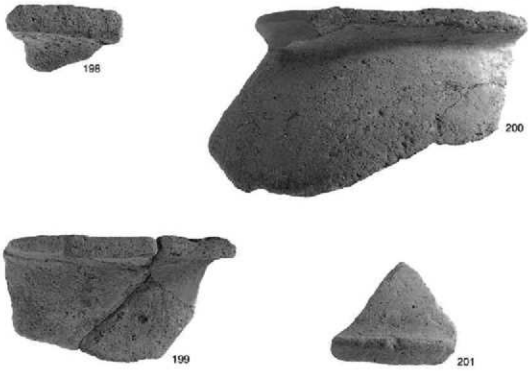
段状遺構出土土器 ②



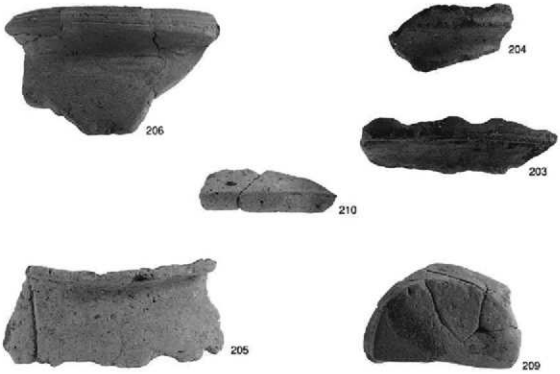
段状遺構出土土器 ③



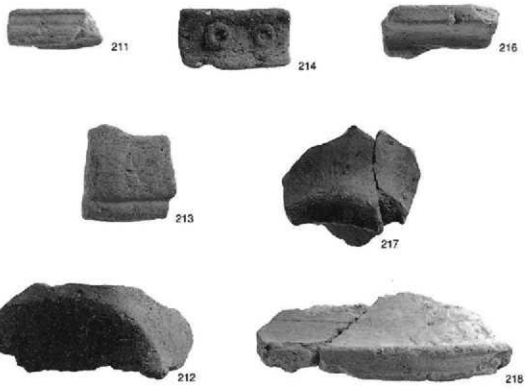
段状遺構出土土器 ④



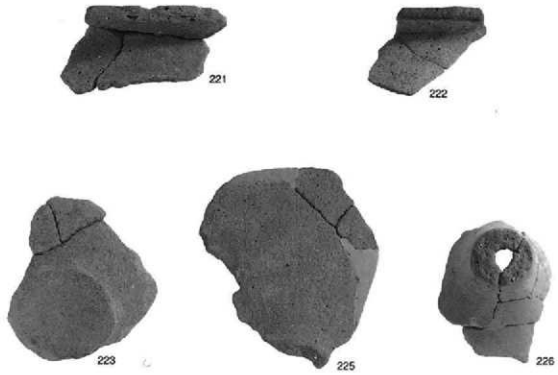
段状遺構出土土器 ⑤



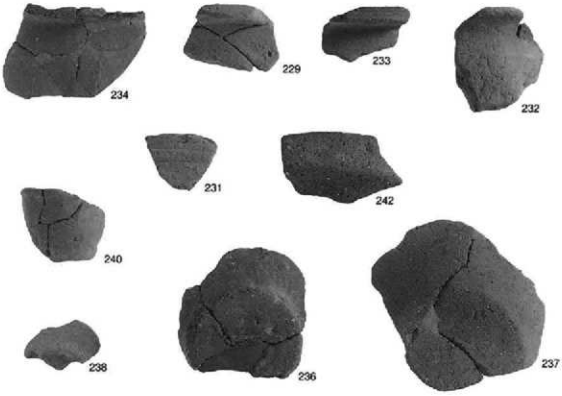
段状遺構出土土器 ⑥



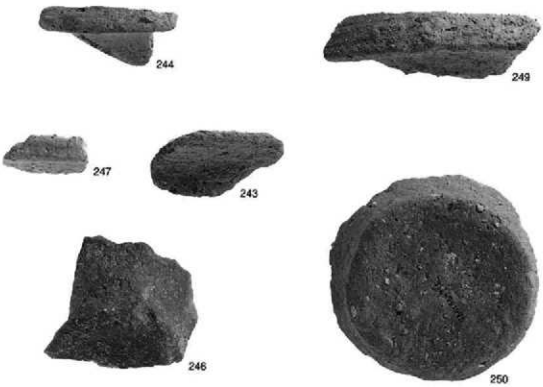
段状遺構出土土器 ⑦



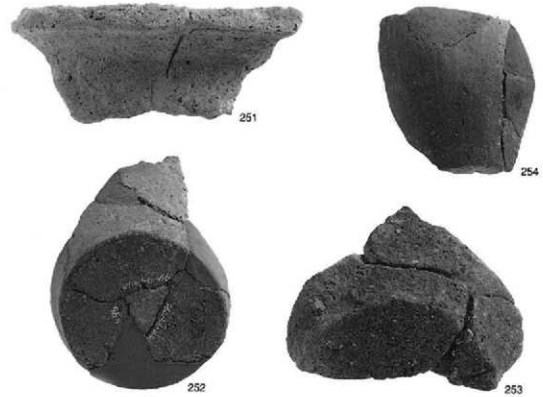
段状遺構出土土器 ⑧



段状遺構出土土器 ⑨



段状遺構出土土器 ⑩



段状遺構出土土器 ⑪

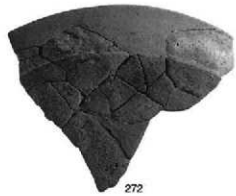
256

257

段状遺構出土土器 ⑫

264

262


272

268

265

282

269

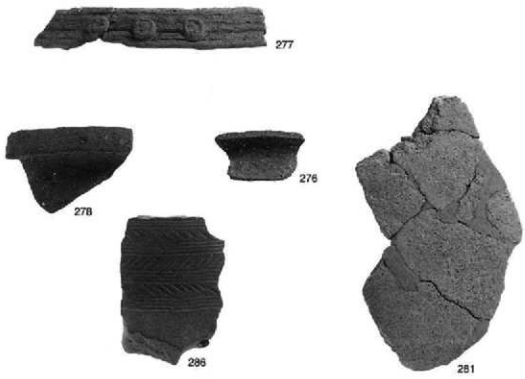
270

267

271

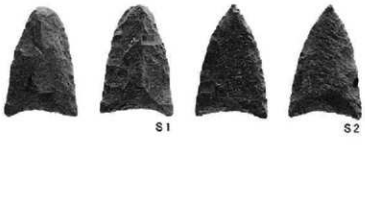
275

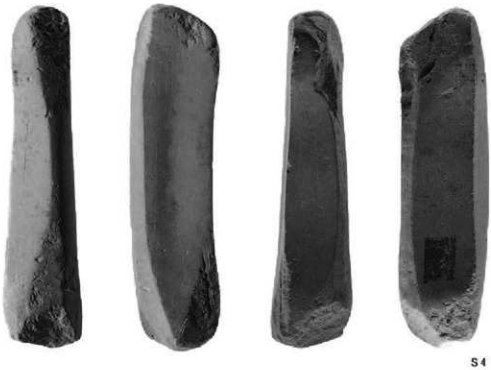
谷部落ち込み等出土土器

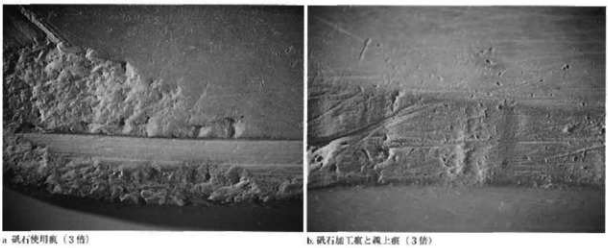


包含層出土土器

表採資料







a 砥石使用痕（3倍）　b 砥石加工痕と擦上痕（3倍）

石鏃、投弾、砥石、砥石細部拡大写真

S5

c. 縁上縁（左が矢）約3倍

d. 縁上縁（左が矢）約4.5倍

S7

S6

石皿、台石、台石細部拡大写真

S8

S9

S10

台石はか

F1

F2

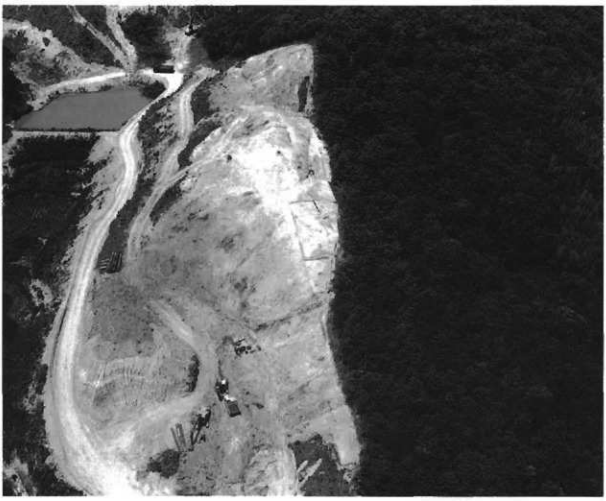
F3

F4

金属器

池ノ内群集墳
写真図版

池ノ内群集墳遠景（西上空から）



池ノ内群集墳遠景（南上空から）

池ノ内1号墳調査前近景
（北西から）

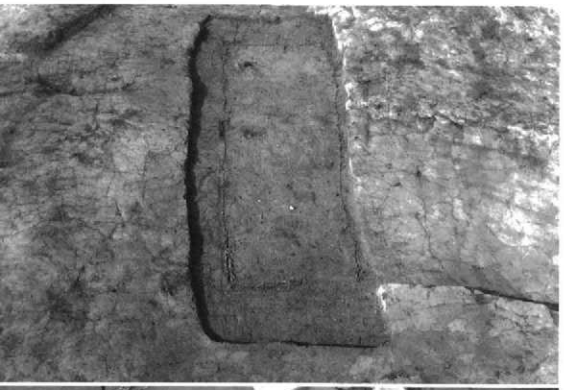
池ノ内1号墳墓壙断面
（南東から）

池ノ内1号墳全景
（南西から）

池ノ内２号墳調査前近景
（南から）

池ノ内２・３号墳全景
（北西から）

池ノ内２号墳全景
（南西から）



池ノ内２号墳棺検出状況
（南西から）

池ノ内２号墳棺掘削状況
（南西から）

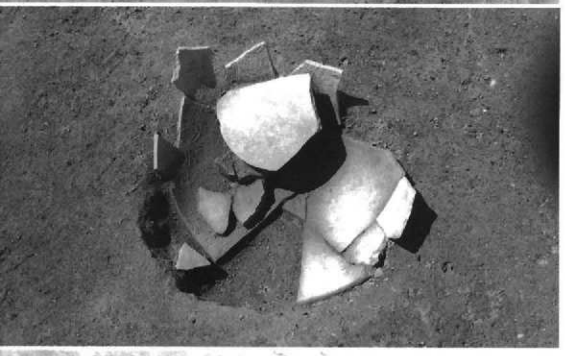
池ノ内２号墳棺断面
（南東から）

池ノ内２号墳槨完堀状況
（南西から）

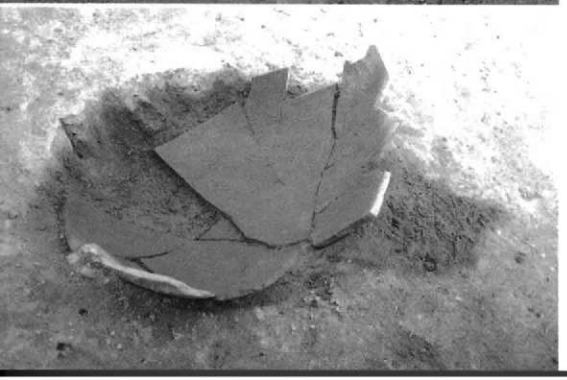
池ノ内２号墳槨内
鉄器出土状況
（北西から）

池ノ内２号墳周溝断面
（南東から）

池ノ内２号墳周溝
土器出土状況
（北西から）



池ノ内２号墳墳裾
土器出土状況
（西から）



池ノ内２号墳墳裾
土器出土状況
（南から）

池ノ内3号墳調査前近景
（南西から）

池ノ内3号墳全景
（南西から）

池ノ内3号墳墓壙
検出状況
（北東から）

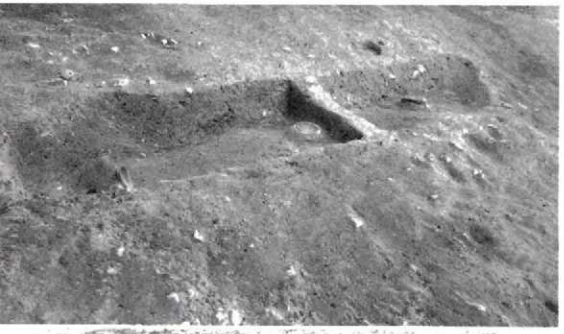
上：池ノ内３号墳棺完掘状況
（南西から）

中：池ノ内３号墳墳丘断面
（南西から）

左下：池ノ内３号墳棺内
土器出土状況
（南から）
右下：池ノ内３号墳周溝
土器出土状況
（南西から）

池ノ内４号墳調査前近景（北西から）

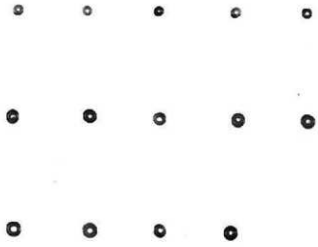
池ノ内４号墳墳丘断面（南西から）



ST 1 検出状況
（北西から）

ST 2 完掘状況
（北から）

ST 2 墓壙断面
（南西から）



池ノ内２号墳槨内出土ガラス小玉

F5

F5－b

F5－a

池ノ内２号墳槨内出土鉄器

S11

池ノ内３号墳周溝出土石製品

294

296

295

297

298

300

299

301

302

305

304

298, 299, 305

池ノ内2号墳周溝出土土器

307

309

308

米粒状土製品（実物大）

310

311

池ノ内3号墳埋葬施設・墳頂出土土器

312

314

313

315

池ノ内3号墳周溝出土土器(1)

316

318

317

319

320

321

320, 321

322

323

324

池ノ内3号墳周溝出土土器(2)

326

327

池ノ内3号墳周溝出土土器(3)

328

329

330

331

ST1出土土器

332

池ノ内5号墳表面採集土器

兵庫県文化財調査報告書　第202冊

神戸西バイパス関係
埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
表山遺跡
池ノ内群集墳

平成12年3月17日　印刷
平成12年3月17日　発行

編集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
TEL 078-531-7011
発行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
TEL 078-341-7711
印刷　株式会社七旺社
〒653-0013 神戸市長田区一番町2丁目1番地

11数(丁)1-019A4